

2022年度
京都市

文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業 報告書

2022年度
京都市

文化芸術による
共生社会実現に向けた
基盤づくり事業

報告書



HAPS

一般社団法人HAPS | 京都市東山区大和大路通五条上る山崎町339
Tel. 075-525-7525 | Fax. 075-525-7522 | <http://haps-kyoto.com>

HAPS

HAPS

2022年度
京都市

文化芸術による
共生社会実現に向けた
基盤づくり事業

報告書

2022

目次

004 はじめに 文|中川真

008 第1章 相談事業

010 2022年度の相談について

相談いろいろ

012 〓 伴走型支援の事例 白鳥建二の京都滞在をサポート

014 〓 ワークショップのコーディネート事例

016 〓 今年度の相談事例より

018 ディレクターズノート

〓 知見の蓄積と交換によって生まれた変化 文|奥山理子

024 第2章 モデル事業

030 2022年度企画

「離れられない大切な場所でも生きていくために」 文|石井絢子

実践の紹介

032 ① 東九条 空の下写真展実行委員会

036 ② 崇仁すくすくセンター実行委員会

038 ③ 高瀬川モニタリング部

040 トークイベント「離れられない大切な場所でも生きていくために」
2022年度 文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業
モデル事業報告会 構成・執筆|竹内厚

054 2022年度モデル事業

アートコーディネーターへのインタビュー 聞き手・文|石谷治寛

070 継続調査

071 2020年度モデル事業 谷本研+中村裕太

タイトルとホコラとツーリズム season8《七条河原じゃり風流》

継続調査報告2

節目の年の振り返りと新たな第一歩 文|高嶋慈

080 2020年度モデル事業 山本麻紀子 3つのプログラム 継続調査報告2

こちらとあちらを繋ぐもの、あるいは巨人と植物 文|宇佐美達朗

090 2021年度モデル事業(招聘アーティスト|前田耕平) 継続調査報告

高瀬川での生き物観察が生み出す新たな生態系 文|続木梨愛

104 第3章 講座

106 京都精華大学公開講座

「#わたしが好きになる人は／#The people I love are」

レクチャーシリーズ+ネットワーク構築ゼミ レポート 文|中川真

115 プロフィール

118 実施概要

はじめに

文 | 中川眞

本冊子は京都市の2022年度（令和4年度）「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」の報告書である。本事業は2017年度（平成29年度）の「文化芸術で人が輝く社会づくりモデル事業」、2018年度（平成30年度）「文化芸術による共生社会実現のための基盤づくり事業」を経て、2019年度（平成元年度）から「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」という名称となって4年を経過したところである。

本事業は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課（文化力活用創生担当）が主管し、一般社団法人 HAPS が主催、実施している。令和4年度は主に2つの事業と、アートコーディネーター人材育成、京都精華大学との講座の共同開講（1回）に取り組んだ。

さて、本事業は特定の地域において目に見える成果を上げるというよりは、多様なアプローチの可能性、可変性を提示し、様々な団体や関係者、関心のある人への参考となる（あるいはモデルとなる）情報や方法論などの提供を旨としており、これまでの5冊の報告書を含めて一定の役割を果たしてきたと自負するが、同時に、今後の本事業のあり方も考えねばならない時期に差し掛かってきたのではないかと思う。

2023年5月から新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は5類感染症への移行となり、新しい局面に入るだろう。これまでの3年間、文化芸術のみならず日常生活、産業、経済、教育、医療などあらゆる領域で極めて大きな影響を被ってきたのは周知の通りである。本事業も、福祉系施設への悉皆的なアンケート調査を試みるなど、猛威をふるう感染症と文化芸術活動の共存について、試行錯誤を繰り返しながら情報の集約、発信、オンライン活用など、当初の目標へ向かって歩み続けてきた。文化芸術の役割に関する説明がいつそう要請されたことをひしひしと感じ、改めて私たちはアートの存在根拠について深く考えることができたように思う。

また、本事業が地域社会においてどのような意味（あるいは意義）をもつのか、振り返ってみることも必要である。私たちは事業目的に照らして、先端的な取り組みを行っていると思うが、京都市全体の年間を通じたあらゆる文化芸術活動からすれば、小さな活動に過ぎないかもしれない。この点について、私事に近い話で申し訳ないが思い起こすことがある。

2002年から10年にわたって、私が勤務していた大阪市の大学では文部科学省から大きな予算がつき、それを元手に教員10名が集まって市内中心部といえる本町・船場にてアートカフェを開設した。この地区は昔は繊維産業で大きく発展したところであるが、同産業の後退

に沿って「まち」の空洞化が進んでいた。工学部の都市計画の教員が地元の方から相談を受け、大学の力（分析や計画、教育など）でなんとか再生の道を図れないだろうかという話があり、学内での議論を重ねてビルの空きスタジオを借り、アートカフェを開いたのである。

しかし、この出動に地元の人たちは不満気であった。何しろこの地区には「～協議会」「～活性化委員会」など30近い団体が地域再生のためにもがいていて、成果が上がっていなかったのである。あとから聞いた話によると、私たちが招聘したビルのオーナーは「アートで何ができるんや」と疑問しかなかったとのことである。

細かい話は省略するが、そこでワークショップや展示をしたりしていると、住民ではないが社員として通ってきている人たちが、ポツポツと寄ってくれるようになった。小さな取り組みを繰り返したのち、3年ほど経ってから「まちのコモンズ」というフェスを開催することになった。企画には街の人々に加ってもらい、地元の飲食店にも協力をお願いし、1週間ほどのイベントが実施された。内容はそんなに奇抜なものではなく、手堅い感じのフェスであった。それからしばらく経って、懐疑的であった商会の社長が、「あのフェス以来、うちの社員が朝に『かど掃き』（自分の家の前を掃除する際に、隣や向かいの家の前も少しだけ掃除をすること）をするようになったと不思議そうに報告にみえた。それは社員によって新しく生まれた街への愛着の表明であった。風景が変わってきたのである。

それ以後、私たちはアートを中心として、街の仕掛けに関して色々相談を受けるようになっていった。そしていつしか「まちのコモンズ」は街の人たちが企画するようになっていった。さてそれで地元の経済はどう好転したかは不明であるが、これまでになかった様々なコミュニケーションが地域で生まれていったのは確かである。件のオーナーは「アートって、なかなか大したもんやね」と初めて認めてくれた。その後、私たちの活動はさらに成長し、本町・船場の枠を超えて、今や日本で唯一といわれる建築フェスティバル「生きた建築ミュージアム事業」（大阪市主管）のアイデアへと成長したのである。

自慢話のようで恐縮であるが、このエピソードで言いたいことは、活動が核心を突いていたなら、たとえ小さな一粒であっても徐々に拡散し、人々の共有（コモンズ）となり、街のなか地域のかなかに浸透していく可能性があるということである。私自身は「生きた建築ミュージアム事業」には参加することなく、2017年度より京都市（HAPS）の事業に参画して、共生社会の実現に向けて微力を傾けているが、もちろん京都市と大阪市では文脈も異なるので、同じというわけにはいかない。ただ HAPS のメンバーは、地道ではあるが、いま大きな手応えを感じながら、個々の人々、組織、地域と誠実に向かい合いながら先駆的な業務を遂行しており、いずれ市域に大きく浸透していこうと思っている。以下、メインとなる2つの事業について概略を説明する。

1. 相談事業

南区東九条地域にある HAPS HOUSE を拠点として、ディレクターの奥山理子とアシスタントコーディネーターの小泉朝未・東美沙季が Social Work/Arts Conference (SW/AC) に寄せられた相談への対応を行った。開設以来3年目を迎え、今年度は52件の相談に応じた。相談件数は増え、取材などを受けることもあって、SW/AC の認知度は徐々に高まってきている。

昨年度から、「きく」「つなぐ」「わたす」「さがす」という4つのフェイズで活動を整理しながら、個々の相談に対してインクルーシブに対応している。相談は固有の文脈を背景としているため、マニュアル的な対応は不可能であり、様々な対応方法を工夫しなければならない。結果として、説明や紹介、助言のみならず、背中を押すなどといった伴走型支援のバリエーションを駆使しているのである。

本年度の特徴として、施設の条件に合う講師をつなぐことができワークショップの実施に至り、良好な結果を残せたというマッチング事例があった。詳しくは後の報告を見ていただきたいが、3年目となって、これまでの蓄積が徐々に対応の幅広さへと転化しつつある。

また伴走型支援として全盲の写真家の滞在を HAPS HOUSE にて受け入れ、ともに時間を過ごすなかで様々な発見を経験した。その展覧会「アトリエみつしま企画展 まなざす身体」(2022年10月1日～30日)がアトリエみつしまにて実施された。

2. モデル事業

これまでモデル事業はアーティストを招聘し、アートコーディネーターとの企画のもと、地域の人々とアートプロジェクトを手がけ、それをレポーターが記録してきたが、本年度は新規のアーティストを呼ばず、内部の地域住民、関係者などとの共同作業のなかからアートの新しいあり方、姿を提示しようとした。先走って、この試みをソーシャリー・エンゲイジド・アートの文脈で捉えるなら、C. ビショップの主張する自律性・自己表現ではなく、社会的価値・他己性を主張する N. ブリオーの関係性の美学に依拠しつつ、そこで交わされる「参加型(ブリオー)か協同型(G. ケスター)か」という議論でのケスターの立場をさらに前進させようというもので、先鋭的なアートコーディネーターとして石井絢子が出現する。

アーティストをサポートする HAPS の報告書として若干奇妙な文脈の話になるが、私がこれまでのコミュニティベースのアートを見聞したときに気になったのは、アーティストの特権性である。コミュニティアートにおいては参加型が称揚され、事実多くの住民の参画によって成り立っているが、そこで主導的に活躍しているのはアーティストであり、アートのスキル

をもった関係者であり、結果として住民との間に微妙な権力関係が生み出されているのである。もとより美術館や劇場といった制度的なアート施設の間ではアーティストが特権的存在であることを誰しもが認めるが、コミュニティアートにおいてもそのような階層性が隠れた形で存続している点が気になるのである。些細な権力関係かもしれないが、それが蔓延することはアートを通じた共生社会の実現にとって大きな障害になるのではないかと私は思う。

本事業において、東九条、崇仁を中心にアートコーディネーターとして活動する石井絢子は、地区が社会的に抑圧されてきた様相、生存のあり方が模索され表現や文化などが生み出されてきた地域の状況、そして今日進展している街の変化などに直面して、「ともに生きる」あり方を考えようとしている。石井は、東九条地域の自治連合会、高齢者施設、児童館、コミュニティカフェ、劇場など様々な組織・団体が緩やかに連帯して須原通りの空き地(市有地)フェンスに地域の歴史や生活があらわれた写真を展示する「東九条 空の下写真展」に参画した。地域内外を問わない集団的なプロジェクトに賛同あるいは参加した人々は何をめざし、どのような体制をつくり、どのような私と公の関係性、個と集団のパワーバランスのもと、地域や社会にどのような波紋や生態系を生み出していくのかと自問する。その一つの回答が2023年3月25日に開催されたトークイベント「離れられない大切な場所とともに生きていくために」である。会場内では人々の声が、応答のようにこぼれました。

なお、2020年度の谷本研+中村裕太による「タイルとホコラとツーリズム season8 《七条河原じゃり風流》」、山本麻紀子による「巨人の歯と眠り」「糸と布染め」「崇仁すくすくセンター(挿し木プロジェクト)」、ならびに2021年度の前田耕平によるプログラムについても、今年度の企画の一環で部分的に協働したり、その後のレポートを行うなど、継続的に見守っている。

3. 人材育成

今年度最後となった人材育成事業では、2021年度より引き続きアシスタントとして小泉朝未を雇用した。小泉は相談事業のアシスタント・コーディネーターを主担するとともに、これまで京都市内の福祉施設等の文化芸術活動の状況についてのアンケート調査や共同開講の講座の企画協力・レポート執筆など、着実に現場経験を重ねながら秀逸な結果を残した(なお、小泉は2022年12月末をもって産休、2023年1月より東美沙季を雇用となった)。

Chapter 01

Coordination

相談事業

本相談事業は、HAPS が2017年度に京都市からの委託事業として文化芸術と共生社会にまつわる取り組みを開始した当初より開設に向けた検討を続け、2020年6月に「Social Work / Art Conference (SW/AC)」として活動を開始しました。HAPS が設立以降取り組みの主軸としてきた若手アーティスト支援の一環としての相談対応のノウハウも活かしつつ、福祉、教育、地域活動など多様な分野とアートをつなぐ実践の一つとしてSW/AC 独自の相談対応のあり方を模索しています。設立時から、個々の人間の尊厳や価値を擁護するソーシャルワークの理念を参照し、相談者らとアートや表現についての対話を重ねることを目指してきました。本章では、2022年度のいくつかの相談事例を紹介し、そしてそれらの活動を総括するディレクターの言葉を掲載します。



シンポジウム「共生と分有のトポス～潜在的 commons の連続デザイン」(撮影 | 奈倉怜)



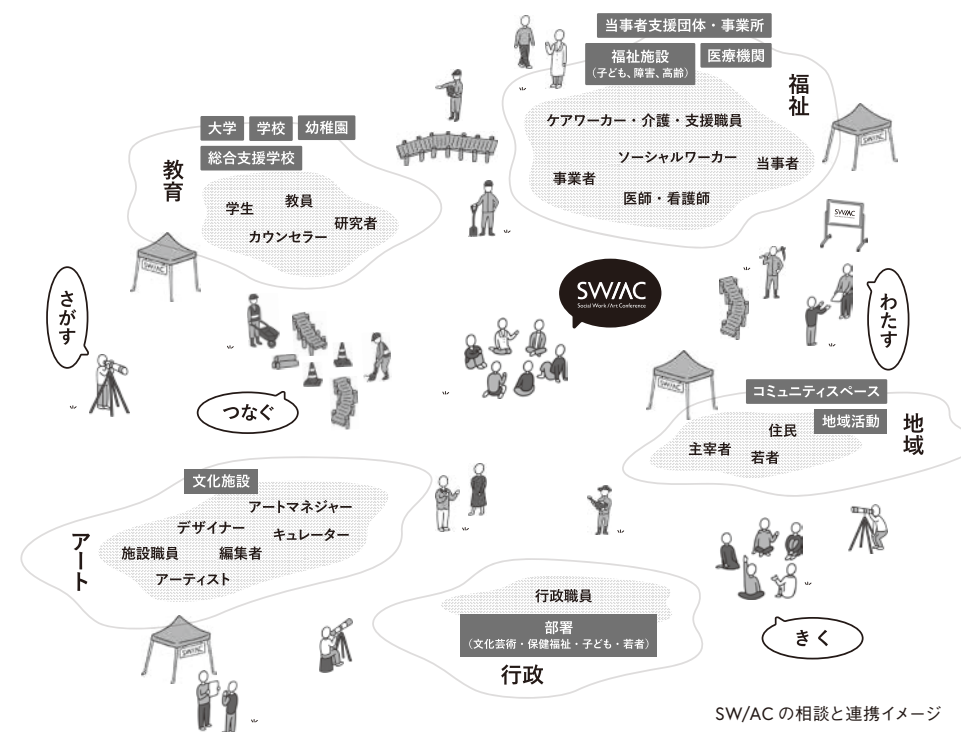
(左) HAPS HOUSE で行った談話室の様子 (右) HAPS HOUSE に滞在した写真家・白鳥建二

2022年度の相談について

Social Work / Art Conference (SW/AC) は、アートと共生に関わる様々な分野や活動についての相談を受け付けています。開設から3年目を迎え、相談件数が増加したほか、取材や登壇の機会が増えるなど、少しずつ活動が認知されてきたことを実感する1年でした。

福祉の分野からの相談では、福祉施設内でのアート活動の始め方や改善方法についての相談を受けるなどするなかで、2年の交流を経て、施設の条件に合う講師をつなぐことができワークショップの実施に至った事例がありました。またアート関係者からは、アーティストや支援者を問わず、ケアや共生社会に関する活動に携わりたいと考えている方々からの問い合わせが目立ち、その関心の高さが伺えました。また伴走型の支援となった事例では、全盲の写真家が京都での展覧会に先立ちHAPS HOUSEで滞在することになり、近隣の同行支援や展覧会鑑賞などを含むレジデンス対応を通して多様な交流や気づきを得ることができたほか、宇治市に開館したウトロ平和祈念館での地域住民を対象としたワークショップのコーディネートを行うなど、京都市内外でSW/ACの特性を活かしたサポートを行うことができました。

コロナ禍での文化芸術活動に関するガイドラインも少しずつ緩和され、多くの現場で活動の再開が活発化したこともあり、通常の相談対応だけでなく、個別相談会や談話室も活用しながら、SW/ACの働きかけがそれぞれの活動の手助けとなるよう引き続き取り組んでいきます。



SW/ACの相談と連携イメージ

- きく —— 相談を聞く／対話の相手になる／多様な人が話を聞き合う機会をつくる
- つなぐ —— 協働相手や見学場所を紹介し、仲介する
- わたす —— 参考資料や書類のひな形を提供する／事例共有の講座をひらく
- さがす —— アウトリーチ／中間支援組織へのヒアリング／連携先の開拓

相談いろいろ

伴走型支援の事例

白鳥建二の 京都滞在をサポート

全盲の美術鑑賞者、写真家の白鳥建二さんから、アトリエみつしまで開催された展覧会「まなざす身体」*1への出品に先立ち、京都に滞在し写真を撮ってみたいとの相談を受けたSW/ACは、2022年6月から7月の約ひと月間HAPS HOUSEを滞在先として提供し、滞在中のサポートを行いました。

HAPS HOUSEは古い日本家屋で決してバリアフリーとはいえません。しかし初日に建物のなかを案内したところ、おおよその把握ができたと言ひ、構造的な使いづらさの指摘は受けませんでした。また白鳥さんは、外出時も白杖を片手にテンポよく街を歩いていきます。ただし、知らない街を一人で歩けるようになるまでには約2週間かかるとのことで、とくに滞在中の前半は、私たちが手引きをして駅までの道のりを一緒に覚えたり、買い出しを手伝ったりすることになりました。また何度か市内で開催されていた現代美術の展覧会にも、一緒に足を運びました。

滞在の目的でもあった「写真活動」と呼ばれている日課は、デジタルカメラで写真撮影をするもので15年以上続けているのだそうです。散歩する、買い物へ行く、どこかへ移動するなど、一人で外出する際の、日常的な行動のなかでの撮影です。1日に撮る数は数百枚にのぼるそうで、その全てをデータに残している白鳥さんは、驚くことに、撮影した写真にさほど関心がないと言ひ、とくに情緒的な理由でシャッターを切っているわけでもないと言ひしていました。

滞在終盤に行ったトークイベント*2では、白鳥さ

んが滞在中に交流が生まれた人たちを招いて、京都で撮影した約2500枚の写真を見ながら、滞在を振り返りました。

白鳥さんに滞在してもらったなかで改めて考えたことは、私たちが普段どのようにHAPS HOUSEを使っているのか、どのように地域で活動しているかということでした。それは、街や建物がバリアフリーかどうかということだけでなく、仕事場として使うからこそ知っていること、知らないままだったことなどが、白鳥さんを通して浮かび上がってくるような体験でした。例えば、夜間HAPS HOUSEではどんな音が聞こえてくるのか。また周辺で馴染みの福祉施設やコミュニティスペースは案内できても、何に使われているのかわからないビルがあったり、周辺にお寺が多いことにも気づいていませんでした。さらに、白鳥さんに比べて、私たちが無意識に立ててしまう生活音（立ち上がる、座る、扉を開ける、閉める、紙を触る、水を出すなど）の大きさに驚かされたりもしました。

意識を向ける先が変わることで、何かを発見したり、気づきが生まれたりするということは、私たちが文化芸術に取り組む上でも大事にしていることです。いつもは提供する側になることが多かった私たちにとって、体験する側となれた貴重なひと月間となりました。



- (1) 滞在初日。地下鉄の最寄り駅までの道のりを一緒に確認。京都駅が複雑なため最寄り駅は地下鉄九条駅を選択した
- (2) HAPS HOUSEの洗濯機を確認中。家電の多くは点字がついていることも白鳥さんを通して初めて知った
- (3) 滞在中に際して確認事項を説明するSW/ACの小泉(右)とそれを聞く白鳥さん
- (4) 白鳥さんが滞在した部屋の前。白杖と傘が立てかけられている
- (5) 野菜の移動販売がやってきたので説明を受けながら品定め
- (6) HAPS HOUSE内の動線や設備を触って確認する

1 「アトリエみつしま企画展 まなざす身体」 / 出演作家 | 池上恵一、伊庭靖子、しらとりけんじ+新谷佐知子・吉田亮人、中ハシクシゲ、光島貴之 / 会期 | 2022年10月1日(土) ~ 10月30日(日) / 会場 | アトリエみつしま (〒603-8215 京都市北区紫野下門前町44)

2 HAPS HOUSEでのトークイベントの様子はYoutubeでご覧いただけます。 https://youtu.be/1IG9F_4AT4c

白鳥建二 Kenji Shiratori

1969年千葉県生まれ。全盲の美術鑑賞者、写真家。生まれつき強度の弱視で、12歳のころには光がわかる程度になり、20代半ばで全盲になる。その頃から様々な人と会話しながら美術鑑賞をする独自の活動を始め、水戸芸術館現代美術センターをはじめ、いくつもの場所で講演やワークショップのナビゲーターを務める。また、2005年からデジカメで写真を撮るようになり、撮りためた写真は40万枚を超え、写真家として、滞在型展示などの活動も行う。撮影した写真はnoteに掲載。

<https://note.com/shiratorikenji/>

相談いろいろ

ワークショップのコーディネート事例

2022年度特筆すべき事例として、
ワークショップに関する相談を紹介します。

[CASE 1] 過去の相談事例とのマッチング

相談 新型コロナウイルス感染拡大に伴い受注が減少した。これを機に以前から関心のあったアート活動をレクリエーションに取り入れてみたい。(NPO法人陽(みなみ) / 障害者支援施設)

相談 「マンガを描いたことがない人や、絵が苦手な人でも漫画による自己表現ができるワークショップ設計」というテーマで研究を行っており、協力先の福祉施設を紹介してほしい。(大西起子・京都精華大学大学院生)

NPO法人陽は、「京都市内の福祉施設等の文化芸術活動の状況についてのアンケート調査」(2020年度実施)に回答協力したことを機にSW/ACを知り、その年に相談対応を行っていた。以降、候補アーティストの紹介やイベントの情報共有などを通して交流を重ねてきたなかで、2022年度の新規相談者の大西起子からの相談内容が、作業所の特性に合致すると考え、両者顔合わせの後、全2回のワークショップの実施に至った。

大西は、簡単なマンガを描くことで自己表現ができるワークショップを研究しており、スマイリーフェイスに代表される円のなかに目と口といった簡単な構成を基本にワークが展開されたので、知的な障害が重い人でも取り組みやすく、コミュニケーションのきっかけに効果的だった。とくにフェルト製の顔のパーツを用いた「ふつう」、「笑う」、「泣く」、「怒る」、「驚く」といった表情をつくる最初のワークでは、ほぼ全員が主体的に参加できただけでなく、顔のパーツを縦に並べたり、どんどん上に重ねたりする人や、複数の表情のパーツを独自に組み合わせオリジナルキャラクターを再現する人もおり、驚かされた。

そのほか、表情の異なる顔の横に空欄の吹き出しが印字されている用紙にそれぞれ対

応するセリフを記入してもらったり、マンガ制作で必ず行われるという「キャラクター設定」を模した作業も行われたが、これらは参加できる人が限られてしまったので、大西としては課題を残したと感じたようであった。しかし、振り返りを行った際に作業所から伝えられた感想では、普段の箱折りの組み立てなどの業務では生まれにくいコミュニケーションが、ゲストと利用者、職員と利用者、利用者と利用者の中でそれぞれ行われ、固定されかけていた作業所内での人間関係に変化が生まれたり、普段はすぐに席を立ってしまう人が長時間同席できたりといった、新鮮な時間が生まれていたことを喜んでおられた。

SW/ACとしても、作業所側との交流に時間をかけることができたので、初めて障害者支援施設を訪ねる講師との間に中立的に立つことができた。



[CASE 2] 京都市外でのマッチング

相談 ウトロ地区で毎月開催している「ウトロ喫茶」という時間がある。平和祈念館開館後は館内で継続することになったので、アーティストと何か一緒につくってみたい。参加者はウトロ住民の高齢の女性を対象で、みなさん裁縫や料理が得意。(ウトロ平和祈念館)

祈念館にボランティアスタッフとして携わり、またHAPSが取り組む共生社会事業においても数々の協力を仰いできた孫晶さんから相談が寄せられた。講師には在日コリアンのネットワークも広げたいという意図から朝鮮にルーツのあるアーティストを希望されたので、予めSW/ACから数名の候補者を挙げたところ、京都市を拠点に優しい色合いの模様が多用された雑貨を制作する染色作家の南寿玉(みなみすお)が選ばれた。

両者初めての取り組みということもあり、会場の下見のほか、それぞれとのヒアリングを慎重に重ね、型染めのコースターづくりを全2回で実施することが決まった。

1回目の図案をクラフトナイフで型を彫っていくという工程では、刃物を用いた細かい作業になるため、参加者とボランティアスタッフがペアを組んで作業することになった。花、魚、チャングという楽器、またハングル文字でウトロと表すなど、住まいや暮らし、そして土地を守ってきた女性たちのウトロへの思いが図柄に反映され、ペアを組んだスタッフ(SW/ACも加わった)と協力しあって型紙が完成した。

翌月の2回目は、つくった型紙をもとに布を染める。この日も多くのボランティアスタッフが参加し、留学中の学生らも加わった。一色ずつ刷るたびに「きれい!」という歓声や、

「あ〜、にじんだ!」などと悔しそうな声が上がったりして、部屋全体が盛り上がった。参加者の集中力が途切れることなく続いたので、当初の時間を延長して縫い合わせる作業まで完成し、最後に参加者のポートレート撮影まで行うことができた。

ある参加者の女性は、人生の大半を家業やさまざまな仕事に費やしてきたといい、こんな手工芸を楽しむ時間はごく最近のことだと話してくれた。またワークショップの終了後講師の南に対し、「またぜひ来て欲しい」と口々に声が掛かっており、その様子から今回の成果を感じ取ることができた。



#きく #つなぐ #わたす #さがす

美術大学教員

アウトサイダーアートや障害のある人たちの創作活動に携わりたい学生が複数いるので、見学できる福祉施設はないだろうか。できれば就職へつなげたく、施設の一覧表があるとありがたい。

障害者支援施設は数多くあるが、それぞれ運営形態や歴史が大きく異なり、一覧表から興味のある場所を特定することは困難。また、創作活動を行っている施設の割合は決して多くないため、学生の興味や関心を、実際の現場で確認してもらうことが必要。

SW/AC

対応

SW/ACディレクターが郊外にある入所型の障害者支援施設をアテンドした。その際に施設の歴史、入所する人たちの様子、ケアとアート活動の両立の魅力や課題などを紹介。後日、見学した学生の一人が自主的に福祉職の現場実習に申し込み、就職につながった。

#きく #つなぐ #わたす #さがす

公共施設職員

毎年開催してきた青少年を対象としたイベントで、3年ぶりに規模を戻すことになった。今回は若者がパフォーマンスをしたり、若者たちで企画したプログラムを行うスペースを設けたいと考えている。会場内での各エリアの棲み分け、空間づくりについてアドバイスを受けてみたい。

イベント参加の目的以外にも多くの人々が往来する場所での野外イベントで、音響効果も狙ったイベントを含む複数のプログラムを同時多発的にやりたいとのこと。SW/ACの相談員がこれまで携わってきた大小様々なイベント開催の経験値をもとに、主に運営面の視点から考えてみる。

SW/AC

対応

予定しているプログラム一覧や会場配置図などを一緒に見ながら、音の干渉、導線の整理、看板などのサインの位置、運営上のリスクマネジメントなどについて助言を行なった。

#きく #つなぐ #わたす #さがす

障害者支援施設職員

障害福祉全般の事業を行なっているが、特に最重度の知的障害・自閉スペクトラム症などの方への支援に重点をおいている。アートを通して、施設利用者だけでなく、家族、職員、近隣住民にとって有益な活動や環境を検討したい。

重度の障害者支援を行う法人として京都の障害福祉分野ではよく知られた施設。コンセプトメイキングや地域へのひらき方の実践では、すでに一定以上の経験値があり、新規にアーティストやデザイナーなどと繋がることで、より多様な活動の展開が期待できる。

SW/AC

対応

面談では、アート活動の担当者が施設内で孤立せずに活動を継続するための方法について話し合った。また広報媒体がウェブサイトのみで、うまく施設の特徴を内外へ発信できていないという課題も共有された。今後は、アート活動の担当者とともに相談に来てもらうことや、他施設の事例提供、広報については編集者などの紹介も可能である旨を伝え、連絡を継続することになった。

#きく #つなぐ #わたす #さがす

アーティスト

資料館のパンフレット制作に携わることになった。アクセシビリティに配慮したデザインを検討するうえで、視覚に障害がある方へのヒアリングを行いたいと考えており、窓口を担ってほしい。

相談者は普段、美術作品を制作しているアーティストである。ひよんなことから制作に携わることになったそうで、自分では力不足ではないかと不安を口にしていた。アクセシビリティについて考えると、完璧を目指さないといけないと囚われてしまうが、視覚障害を始めとする障害のある方を資料館へ迎えたいという気持ちが重要。リニューアルしたパンフレットがそのきっかけの一つになって欲しいので、前向きな気持ちで制作に取り組んでもらえるよう背中を押したい。

SW/AC

対応

資料館との連携は丁寧に行われており、SW/ACへの問い合わせ後、面談を行うまでの間に、当事者へのヒアリング自体も資料館側の協力があり既に実施できたという。ヒアリング先の紹介には至らなかったが、今後もデザインに関わる可能性があるということなので、京都市内の視覚障害者の当事者団体や点字、触図が多用されている図録の例などを紹介した。

事例や話題提供の依頼

共生と分有のトポス～潜在的 commons の連環デザイン

日時 | 2022年11月5日 会場 | 京都国立近代美術館1階 講堂

主催 | 京都市立芸術大学 助成 | 令和4年度 文化庁 大学における文化芸術推進事業

「えんとこの歌 寝たきり歌人 遠藤滋」上映会アフタートーク

日時 | 2022年12月18日 会場 | 井口倉庫 (〒601-8025 京都府京都市南区東九条柳下町16-6)

主催 | 5minutes films 協賛 | NPOココベリ121 / 井口倉庫

滋賀県立美術館のフォーラム アートと障害を考えるネットワークフォーラム2023

日時 | 2023年2月23日 会場 | 滋賀県立美術館 木のホール

主催 | 滋賀県文化芸術振興課美の魅力発信推進室 (滋賀県立美術館内)

#きく #つなぐ #わたす #さがす

起業を計画中の障害のある人

京都市文化芸術総合相談窓口KACCOからSW/ACを紹介された。当事者であることを活かし、障害者アートを活用したまちづくりを推進していく事業の立ち上げを目指している。そうしたなかで私自身も制作活動を始めた。今後のプランや障害者アートとまちづくりをどのように結びつけることができるかについてなど、助言いただきたい。

事業の立ち上げと制作活動を開始したこととどのような相関関係があると考えているか丁寧にヒアリングしたい。また、その二つはそれぞれに組み込みの内容が大きく異なるので、棲み分けて考えることができるよう情報整理の手助けができると良いのではないかな。

SW/AC

対応

HAPSやSW/ACが関わるトークイベントや談話室などの情報提供を行ったところ、実際に複数のイベントに参加された。またイベント会場では、本人の興味関心に繋がりそうな方々を紹介することもできた。なお、面談に来られて初めて車椅子ユーザーであることが分かったので、今後イベントや展覧会に関する情報を提供する際に、アクセスや会場についても状況や条件を把握し、事前に伝えるよう心がけている。

メディア掲載

・コネクタテレビ vol.177 インタビュー出演

・『ハンケイ 500m vol.67』

河原町正面特集

「The Beauty of Society 06.」

・ラジオ出演「Air STUDYHALL」

(α-STATION × ワコールスタディホール京都)

知見の蓄積と交換によって生まれた変化

文 | 奥山理子 (Social Work / Art Conference ディレクター)

開設から3年

「3年ひと区切り」とよく言われるが、Social Work / Art Conference (以下SW/AC) も開設から3年が経過した。事業の軸は「相談対応」という地道な経験の積み重ねなので、華々しい飛躍こそ生まれにくいものの、それでも変化の感じられた1年であったので、ここで振り返ってみたい。

まず新年度早々4月に、個別相談会と談話室を開催した。4月というと、個人でも団体でも、その年の事業計画のおおよそは決まっている段階かもしれない。それでも、具体的な取り組みについてはこれから計画しようとする人も少なくないだろう。むしろ年度末に忙殺された経理・成果報告業務からようやく解放され、少しゆとりのできたタイミングといえるのではないか。さらに新年度の新鮮な気分も手伝って、今後の活動を計画してみたり、それに先立ち現在の状況や環境を丁寧に整理してみたりする機会として、SW/ACでの相談を活用してもらいたいと考えた。その狙いは功を奏し、個別相談会ではアーティスト、ギャラリー運営者、福祉施設職員など様々な人が相談の扉をノックしてくれた。また多種多様な相談内容に応じていく際に私たちは、前年度に整理することができた「きく」・「つなぐ」・「わたす」・「さがす」という4つの関わり方をもとに対応することを心がけ、限られた時間のなかで実りのある対話ができるように感じられた。個別相談会は、上半期を終えてこれから畳掛かってくるであろう文化事業の繁忙期直前の9月にも実施した。こうして時期を工夫することで相談者からのアクセスが増え、ニーズの把握にも繋げることができたと思う。また、こうした相談会を実施するという案内自体も活動の紹介につながったのか、相談件数も過去2年に比べ増えたことも喜ばしいこととして報告したい。

HAPS HOUSEの活用

開設からしばらくは面談や談話室などのイベントもオンラインが続いていたが、2022年度はSW/ACが拠点を置くHAPS HOUSEを活用する機会も増えた。別ページで紹介している

全盲の美術鑑賞家であり写真家・白鳥建二による約ひと月間のアーティスト・イン・レジデンスや、別事業ではあるが、ギャラリースペースでの初の企画展の開催が実現し、HAPS HOUSEが制作活動の拠点となったり、作品が発表されるために活用されることで、建物全体が喜んでるように感じられた。今はまだスタッフの体制が整っているとは言い難いので、常にオープンにするわけにもいかないことはもどかしい限りであるが、スタッフとの雑談のなかでも、度々HAPS HOUSEの活用に関するアイデアが挙がるようになってきたので、次年度に向けて色々と計画を練ってみたいと考えている。

学生との交流

アウトリーチの機会も得ることができた。京都市立芸術大学の高橋悟教授が中心となり開催された「共生と分有のトポスー「公共空間」における潜在的コモンズとその連環デザイナー」のなかで、学内での講座と一般公開されたシンポジウムに講師として参加した際には、意外なほどに興味を示してくれた聴講生たちの反応が新鮮だった。「意外なほどに」というのも失礼かもしれないが、SW/ACは小規模な相談所にすぎない。しかもキャリアサポートを銘打っているわけでもないで、正直なところ、学生らにとってはまだピンとこないのではないだろうかと思っていた。しかし当然のことながら、彼ら・彼女らは作品制作（あるいは研究）の道を歩み始めたばかりの身で、日々、制作に直接関係すること、関係しそうなこと、関係しなさそうなこと、どちらともいえないようなことと出会い続けている。そのなかから自身の関心の的となるテーマを絞り込み、照準を当てていくプロセスは、さながら広大な荒野をさまよっている感覚にも近いかもしれず、そうしたなかでの道しるべや手がかりはいくらあっても余ることはないのだろう。SW/ACを利用することで、学内だけでは得られない情報を得たり、上下関係ではない横のつながりが生まれ、さらには社会との接点を持ったりといった経験が増えていくのではないかという期待が生まれ、その後の交流も生まれつつある。私たちも、一度大学を出てしまったら（ちなみに私に至っては大学すら出ていない）、こうした

学生の状況を知る機会はその多くはない。拡張を続け、新陳代謝を続けていくアートの、その主体となっていく可能性を持つ学生たちへ、相談の扉を常に開いておけるようにすることもまた、大切な役割であることを意識させてもらう機会となった。

アシスタントコーディネーターの活躍

もうひとつの成果として、同講座にアシスタントコーディネーターの小泉朝未とともに登壇できたこともあげておきたい。というのも、“こうした仕事”つまり、人と人、あるいは人と表現の間に立ち、調整したり創造したりする仕事では、属人性に頼らざるを得ない場面が多く、とりわけディレクターのような立場にある者の言動が前面に出てしまう。もちろんそれによって活動をリードできることや人々を勇気づけることができることは言うまでもなく、私自身も微力ながらそうした役割と責任を担っていることを自覚している。しかしもう一方で、ケアを扱うアートマネージャーやアートを扱うソーシャルワーカー、あるいはそのふたつの職能を併せ持つ人材が育つ未来を思い描いている私にとって、アシスタントコーディネーターが前に立つ機会に居合わせたことで得られた学びは少なくなかった。例えば、これまでSW/ACの設立背景や相談対応の意義、そして今後のビジョンなどを語るのは大抵私の役目だった。しかし語り手が変われば語られることにも変化が生まれる。私の席の隣で聴講者に向けてSW/ACの活動を語る小泉の姿から、彼女がどこに重点を置いているか、聴衆にSW/ACの何を伝えたいと思っているかを知ることができ、今後のSW/ACの発信の選択肢がまたひとつ増えたようで、頼もしくその横顔を眺めていた。

アシスタントコーディネーターの仕事は、HAPSが取り組む「文化芸術による共生社会実現のための基盤づくり事業」のなかで「人材育成」として柱が立てられた（2020-2022年度）限られた枠ではあるが、この仕事に関心を持ち携わろうとしている人がいることに感謝しているし、一人の相談員として成長を続け、自分自身の活動の範囲を広げていきたいような職場となるよう、私も支えていきたいと考えている。

相談対応に対する共感と労い

現在、文化芸術に携わる人たちのための相談所が、京都だけでなく各地に開設されつつあるのは、やはり文化芸術の分野で相談相手を求めている人たちが増えていることの表れだろう。SW/ACを運営するHAPSを起点に近いところから順に広げて挙げていくと、同じ京都市内にはコロナ禍第1波に交付金申請の相談窓口として開設し、その後も多岐にわたる相談対応を継続している「京都市文化芸術総合相談窓口KACCO」があり、その認知もずいぶん広がってきた。京都府にも同様の窓口が設置されているし、お隣の大阪市でも2022年4月にアーティストサポート窓口「なにそうだん」が開設された。東京では、有楽町で実験的なプログラムを展開する「YAU」（有楽町アートアーバニズム）のなかに「SOUDAN」が設置されており、2023年度にはアーツカウンシル東京が「東京芸術文化活動サポートセンター（仮称）」を開設する予定であることを発表している。まさに続々と誕生しており、今後も地域行政やアーツカウンシルなどが中心となって、窓口の設置が増えていくことが予想される。

「SOUDAN」の事例は、SW/ACのインリーチのための勉強会（非公開）として、主宰者を招いて詳しく聞くことができた。相談対象は、文化芸術領域で活動する人たちで、30分の相談時間が設けられている。相談員は、主にフリーランスで働いているキュレーター、デザイナー、制作者、心理士、インストラクターなど多彩な専門家で構成されている。

「SOUDAN」のウェブサイトによると、「展覧会の始まる前から、そして終わった後も、さまざまな人との協働があります。まだ固まってないアイデアを口にしてみることで、具体的な技術的相談、機材や場所や運搬手段の話、ちょっとした専門知の共有、プロジェクトへのお誘い、悩みの打ち明け——これらをひとまず「SOUDAN（相談）」と试试看。」とあり、「(正式な)依頼・契約・発注」などとは異なる、ちょっと話せる相手、新しい関係性として「相談」を芸術創造に組み込んでいく提案とその実践が、民間運営ならではの軽やかで気の利いた工夫とともに展開されていることがわかった。

さらに、年度末にはSOUDANが企画した「ブルペン—次世代の肩を温めてる話—」という

イベントが開催され、舞台芸術のアートマネージャー（制作者）を対象にメンタリングプログラムを実践する「バッテリー」、広島でメディアーターの育成プログラムに着手した「広島芸術都市ハイク|Hiroshima Arts & City Hive（HACH）」、アーティストの活躍の場を様々な企業とのタイアップ事業を通して構築したり、独自のメンタリングシステムを導入している「アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT / エイト]」をゲストに、それぞれの事例が紹介された。ここでは相談対応からさらに一步踏み込んで、アーティストやアートマネージャーの「メンタリング」という長期的な関わりを通して、「人が人を支える」うえでの試行錯誤について、熱のこもった意見交換が交わされた。

1日かけて行われたこのイベントで印象的だったことがある。それは、各事例を批判的に議論し合うのではなく、たびたび労いの言葉が送り合われていたことだ。こうした相談やメンタリングの必要性が語られる以前、文化芸術の領域では、出身校や組織で生まれる上下関係、独自の表現の確立、病気・出産・育児といった環境の変化、経済的不安など、様々な困難は自分でなんとか乗り越えていく他なかった。そして乗り越えられないときは辞めるという選択肢が待ち構えていた。このような状況を少しでも変えたいと、現場で起きた切実な事情をきっかけにして、「ブルペン」で登壇したスピーカーたちはそれぞれの場所で活動を始めたわけである。しかし相手は「人」である。人は絶えず変化する複雑な心を抱えていて、作品や歴史のように静かに待っていてはくれない。悩める人々の話を聞き、適切に状況を把握し、助言したり伴走したりといった対応は、想像以上に大変な労力のかかる作業であることを、メンターを引き受けたスピーカーたちが誰よりも痛感しているのだ。だから、事例発表がひとつ終わるたびに、「よくやってるね」「ご苦労様です」という労いの言葉が思わず口からこぼれ出してしまうのだろう。

人が創り出してきた作品を扱う分野でありながらも、これまでおざなりになってきた人と環境への介入という大仕事に取り組みだした同士が各地から集まり、またその実践を知りたいという人たちも集まった。苦労への共感とエールの交換が、イベントの雰囲気をつくりだしていることを非常に興味深く感じ取り、私自身もまた励まされる思いがした。

アクション志向と創造する力

文化芸術の分野にも「相談窓口」が当たり前のように設置される時代もまもなくやってくるのかもしれない。しかし制度化されたからといって、悩みや課題がなくなることはないだろう。福祉の分野でも、障害のある人たちの就労支援に関する窓口が各自治体に設置されて久しいが、就労先での孤立から離職を余儀なくされる当事者は少なくない。またひきこもりの相談窓口も年々数を増やしているものの、8050問題とも言われる当事者とその家族の高齢化は、行き詰まった状況を物語っている。さらに、2022年には国内で自殺した子どもの数が過去最多を記録したといい、それを受けこども家庭庁では自殺対策が本格化する見通しだ。しかし形式的な相談対応では改善は望めない。実際に、私が別の仕事で関わっているアートプロジェクトには、学校や家庭に馴染めずに社会参加の機会に乏しい若者たちがたくさん集まってくるが、彼ら・彼女らを担当する地域の相談支援員の丸投げ具合に、頭を悩まされることが少なくない。

相談対応という仕事は、一見すると地味かもしれない。私自身も、展覧会やアートプロジェクトを企画するときに得られる成果との違いに、戸惑いを覚えることだってある。けれども、決して相談を単調なものとして扱ってはいけなし、相談対応の過程には山場や正念場もあるのだ。1970年代に活躍したソーシャルワーカーのアン・ヴィックリーの言葉を借りると、ソーシャルワークには「アクション志向」と「創造する力」が不可欠であるのだという。芸術を扱う上では当然すぎることもかもしれないが、ソーシャルワークの視点からもう一度光を当ててみると、また違った意味を持ち始めてくる。

文化芸術における相談窓口をいつときのトレンドとして消費するのではなく、相談に訪れる人とその内容を手掛かりに、創造的な更新を続けることができるよう取り組んでいきたい。





離れられない大切な場所 とともに生きていくために

文 | 石井絢子 (HAPS、本モデル事業アートコーディネーター)

本モデル事業は、「アート」と「共生」に関わる企画を検討し、幅広く多様な芸術実践者とともにプロジェクトを行うことで、社会における芸術の拡張可能性を模索し、モデルケースとなる芸術実践の生成と記録を試みてきました。「多様な人と人がともに生きていく」「世界の中で、人や、人だけでない様々なものがともに生きていく」あり方を、京都駅周辺の崇仁・東九条やその周辺地域において表現を通して模索し、6年目を終えようとしています。また、実践とともに、研究者や批評家、芸術実践者等をリサーチャーとして、本事業に関わるインタビューや論考の執筆を委託し、本報告書へ掲載してきました。そこから、長期的・複合的な視点でプロジェクトの意義や課題を示したり、その価値を検討するための手がかりを未来へ残そうと試みてきました。

2022年度の実践は、京都駅周辺の崇仁・東九条を含む地域を中心に、場所の歴史や現在の状況に呼応するように複数名で芸術実践を行ってきた、あるいは行おうとしている人々に焦点を当て、この地域の歴史や文化的基盤の上にこそ成り立つ、公益性の高い芸術実践との協働や、それらを下支えする試みを行いました。年度末には1年間の取り組みを振り返り、未来に向けた芸術実践や共生のあり方を探る試みとして報告会を実施し、実践の報告・クロストーク・交流会など

を行い、取り組みを共有しました。年間を通じて様々な観点から実践を通して共生のあり方を思考し、「アート」と「共生」にまつわる芸術実践のあり方の拡張可能性を模索しました。

現在、京都駅周辺の崇仁・東九条地域は、京都市有地における京都市立芸術大学・京都市立美術工芸高等学校の移転事業や、新たなミュージアムの建設、公園の設置、高瀬川沿いの遊歩道設置などの再整備事業とそれに伴う大規模な工事が行われ（一部はまもなく終了し、一部はこれから本格化する）、大きな変化の渦中にあります。この状況に呼応するように、地域の歴史や培ってきた豊かな文化と向き合いながら切実な想いで多様な存在との共生を試みようとする文化的な活動や芸術実践を行う、あるいは行おうとする、この地域で生きてきた人々を主体とする声や動きが、これまで以上に増えてきたように感じていたのが、昨年度のことでした。また、同地域においては本事業の一環で、地域の歴史や文化、風土をふまえて立ち上げた取り組みを、新たな体制で発展的に展開するアーティストたちの継続的な取り組みも行われています。無論、それらとは異なる流れで行われている芸術実践や文化的な取り組みも以前より存在します。本企画は公的な事業として、行政による上記の大規模な動きを意識しながらも、より微視的にはそれらとは異なる立ち位置から長期

的に芸術家や幅広く表現に関わる取り組みを行う人々への支援を行い、「共生」を掲げる事業を重ねてきた立場から企画・実施したものです。

本報告書には読みやすさを重視してグループ・団体単位での実践やその中でHAPSが担った役割の一部を掲載しますが、実態としては関わる人が重なっている取り組みもありますし、このように整った状態で当初から計画していたわけではありません。むしろ日常生活と地続きで行われる芸術実践が文化芸術をめぐる様々な状況の中で新たに生起することを想定し、それらの模索に積極的に寄り添い、ともに来るべき未来について考え生きていく動きを受けとめる「うつわ」として本企画を準備した、というのが大きな企画意図のひとつです。そして、このうつわはこの地域を含む過去数年間の本事業での取り組みや、関わり合いによってこそ形成できたものだと感じています。

過去5年間のモデル事業は、1年間に1名、多くて2組のアーティストを招聘し、ともに新たなプロジェクトを立ち上げる実践や、そこから生じる作品を通して「共生」について思考し、表現してきました。そして、それを展開する場所は、一施設から地域へ、地域から地域を流れる川へと、アーティストの関心とともに広がってきました。世界や、一地域を眼差す際の解像度は上がり、アプローチの角度が変わるごとに多様になっていった関係性が、事業に蓄積されています。また、例えば小さなことですが、現在使用している契約書の雛形ひとつとっても、多様な人々の状況をふまえて、実践の中で様々な立場の人の忌憚なき意見が編まれ、事務局で揉まれて現在の形になりまし

た。「共生」に関わる思想的な面や、実践的な関わりだけでなく、そういったマネジメントに関する技術の模索や知見の蓄積も事業の胆力になってきたように思います。一方向での支援する／されるの関係性ではなく、日常的な関わりや芸術的な実践を通して、生存に関わる切実で多様な共生の形と表現のあり方を様々な存在から知り、共有しあう数年間を経て、より豊かなものとして成立していったように思います（ご関心がある方は過去の報告書をご覧ください）。

本報告書には記録の観点で、実践の紹介のほかに、今年度協働した団体・グループを中心にお招きし、取り組みの共有を行った年度末の報告会のレポートや、モデル事業に関するインタビュー・論考などを掲載します。今年度協働した人々は、それぞれが今後も継続的に実践を重ねていきます。また、次年度以降に向けて方針を検討中の動きもご紹介します。年度初旬より、本事業の地域固有性を越えた問いとして以下のようにも考えてきましたが——多様な存在が集う芸術実践によって、何が生じ得るのか。社会的には聞こえづらい小さな声との向き合い方、土地の記憶や資源とともに生み出す表現のあり方、協働の実践における個と公／個と集団の関係性の模索など、それぞれが地道に重ねてきた社会的な芸術実践には、どのような共通性や差異があるのか。複数名により生成された表現は誰のものか。意思決定権や責任の所在はどこにあるのか。それは「芸術」であるのか——模索はまだ続きます。1年間の取り組みの一端としてご覧いただき、より多様な動きを次年度に期待くださいますと幸いです。

東九条 空の下写真展実行委員会

「この街のあちこちで、笑い泣き遊び働いてきた人たちの生きた証が、広く高い空の下に並んだら、どんなにステキだろう、どんな景色になるんだろう。」東九条と周辺地域に今も息づく人々の営みの記憶として、写真や語りのアーカイブや、街ゆく誰もが鑑賞することができる写真展の開催を目指して、東九条で暮らす・働く・動く有志が集まりました。地域の写真の収集・展示を通じて、記憶や歴史、文化を継承しながら、新しい表現活

動の創造とその可能性を探っています。古代より人は、星空や大地といった自然の営みと一体となって生活の知恵や術を紡いできました。古来からの人間の営みや、写真や語りが織りなす人々の記憶を重ねるように、過去とつながる“今”と向き合い、ともに生きる“これから”の物語をこの場所で紡いでいこうとしています。

HAPSは写真の募集・受け取り・語りの聞き取りや、企画・運営体制の構築などに協力しました。



(上)「東九条 空の下写真展」の様子 撮影 | 成田舞 (左下)話し合いながら展示写真の選定や撮影場所の特定などを行った (右下) 50名近い人が集まり、展覧会開催準備を行う

制作協力など

東九条 空の下写真展

街に残る生活の息づかいを、街ゆく人々と感じられる、空の下でのオープンな写真展「東九条 空の下写真展」を開催しました。まもなく大きな整備事業と関連工事が始まり、風景が大きく変化する京都駅南部の須原通り沿いに位置する3ヶ所の京都市有地を囲むフェンスにて、昔の写真や今の写真、街の風景や街に生きる人たちの生活のひとこ

まなどをここで生きてきた(いる)個人や団体から募集し、展示する試みです。写真展の開催期間中も写真を募集。写真を持ち寄ってもらい、その場でスタッフが話を聞き、スキャンや展示をしました。また、トークイベントでは本企画に関わった多様な立場の人が、プロセスも含め企画について共有する機会をつくりました。

DATA

会期 | 2022年4月17日(日)–5月22日(日)
会場 | 須原通り沿い空き地フェンス(八条–九条間)
主催 | 東九条 空の下写真展実行委員会
協力 | 一般社団法人HAPS / NPO法人スウィング / 京都コリアン生活センターエルファ / 希望の家(京都市地域・多文化交流ネットワークサロン) / 希望の家カトリック保育園 / 故郷の家・京都 / 山王学区自治連合会 / THEATRE E9 KYOTO / ただいも / 特定非営利活動法人東九条地域活性化センター / 日本自立生活センター(JCIL) / ノランナラン / 東九条マダン / 東九条まちづくりサポートセンター(まめもやし) / 民衆文化牌ハンマダン
チラシデザイン | 永戸栄大

[会期中のイベント]
写真募集ブース | 5月8日(日) 10:00–14:00
場所 | 東九条文庫・マダンセンター前(京都市南区東九条南河原町3)
配信トーク | 5月14日(土) 19:00–21:00
 「それぞれのリアルと写真のリアルが重なるとき」
司会進行 | 高橋慎一(EAST NINE ZINE CIRCLE、ユニオンぼちぼち)

石井絢子(一般社団法人HAPS / アートコーディネーター) / 大谷通高(総合地球環境学研究所) / さとう大(NPO法人 京都コリアン生活センターエルファ) / 佐藤知久(京都市立芸術大学 芸術資源研究センター 教授) / 孫片田晶(立命館大学産業社会学部現代社会学科准教授) / 中谷正人(東九条耕す計画「ただいも」) / 中村景月(京都大学大学院工学研究科建築学専攻後期博士課程) / 成田舞(フォトグラファー) / 村木美都子(NPO法人 東九条まちづくりサポートセンター(まめもやし)) / やんそる(Books × Coffee Sol.、東九条マダン、東九条耕す計画「ただいも」) ほか

高瀬川清掃+写真撤去 | 5月22日(日) 10:00–終わるまで
場所 | 北河原公園(通称三角公園)(南区東九条北河原町)



(下) 撮影 | 成田舞

アンケートの声

古い写真の路地裏から声が聞こえてきそうです。まぎれもなく人が笑い泣き助けあって生きてきたことが写真から伝わります。一世のオモニが学んでいたハッキョ。キムチをつけながらサツリで話していたオモニの顔が浮びます。再開発で場所が変わってしまっても一人ひとりの生きてきた証を残す写真展ありがとうございました。

地域の人が地域の公共空間を自分たちの記憶の表現の場に変える、類いまれな試みだと思います。これから何回も続けてほしい。

古い歴史を感じるとよりも自分が生まれたころの記憶と共によみがえるのが私にとっては満足でした。広い京都の時代経過を感じるよりも、その地域自体の個性文化が、時代とともに流れる情景が感じられるのも好感がもてました。これからこのような展示会が開催されることを願っております。

大きく様変わりした東九条に仰天しています。父も母も幼馴染も居ない知り合いも少なくなり…私の心の空白を埋めるように散歩の道すがら「東九条 空の下写真展」に偶然の出会いをしました。子どもながらに貧しかった生活の中で、エネルギーな気持ちで毎日を生きて来られたのだと思っています!あの頃の気持ちを改めて感じられました。

施設の外観から何気ない生活や仕事の一瞬まで歴史的なニュースの大小に関わらず並んでいるのが興味深かったです。私たちの記憶の中は本当はこのように感じに近いのかもしれないですね。拝見できて良かったです!

泣きそうに感動しました。懐かしい風景→それを懐かしんだ頃の風景。→そして、未来から見て懐かしいであろう東九条の今。

制作協力など

東九条 空の下写真展 × 希望の家児童館 × 金サジ「なりたい自分になる!」てんらんかい

子どもたち自身が「なりたい自分」の姿を考え、衣装や小道具をつくり、話し合い、写真作品(写真のコンセプト)やお話をつくり、チラシをつくり、展覧会づくりまで行いました。8~10月にかけて3回ワークショップを開催。写真家の金サジがスタ

ジオ機材を組んで撮影を担い、制作物は地域福祉を担ってきた「希望の家」への寄付の品々や、アーティスト・演劇関係者からの持ち寄りを主な素材とし、ワークショップ当日は様々な大人が子どもたちをサポートしました。



DATA

会期 | 2022年10月7日(金)~10月25日(火) 9:00-17:00
会場 | 京都市地域・多文化交流ネットワークセンター
共催・企画・制作 | 希望の家児童館/東九条 空の下写真展実行委員会
共同企画・撮影 | 金サジ(写真家)
チラシデザイン | 山本洋明(caravan)

児童館の子どもたちの声

みんないろいろなしょうがあるのいいと思います。みんなべつべつのしゃしんのとり方、お話があるのいいと思いました。えがおがあるので、第二回もやりたいです。

みんなでどんなお話にするかをきょうりよくしていました!! とてもたいへんだと思いました。たのしいお話でよかったです。



アンケートの声

ただおもしろいだけでなく、人間の奥にある深いものを感じました。人間の中に眠っている神秘的思考のようなものが、6枚の作品や吊られた衣装から噴出しているように感じる。ミンパクで巡回展をしてほしい。

大人になっても、外にとらわれず、自分のやりたいことをできる人になってください。

崇仁すくすくセンター実行委員会

2019-2020年度のモデル事業の一環として、アーティストの山本麻紀子が京都市立芸術大学と京都市立銅駝美術工芸高等学校移転予定地を中心に行った取り組みは、2021年度より「崇仁すくすくセンター（挿し木プロジェクト）」として実行委員会を立ち上げ、山本を中心に継続しています。これは、新たなまちづくりによって大きく変化する崇仁地域にて、まちとともにあった崇仁小学校、崇仁市営住宅、崇仁保育所などで命を育ててきた樹木の挿し木を試み、地域住民とともにその成長を見守り、土地の記憶や人のつながりを継承しながら、いざれしかるべき場所に木を地植えて返すことを目指

す活動です。地域の高齢者福祉施設「崇仁デイサービスうらおい」や、地域在住の人々との活動を中心に、様々な方との関わりを創りだしながら進めています。HAPSは、8月に協働でトークイベントを開催。2020年度の3つのプログラム実施時に撮影した記録映像や制作した作品などを初めて公開し、事前収録したトークの音声を変え、企画背景や山本の想いなどを含めて取り組みを総体的に伝える場をつくりました。また年間を通じて、活動に関連する報告会やイベントの広報協力等を行いました。

※今年度の「崇仁すくすくセンター」の実践の詳細については、p80の継続調査もあわせてご覧ください。



共催で開催したトークイベントの様子

共催 トークイベント「巨人の歯と眠り」「糸と布染め」 「崇仁すくすくセンター（挿し木プロジェクト）」

DATA 日時 | 2022年8月21日（日）10:30-12:00

話し手 | 山本麻紀子（アーティスト）

石井絢子（一般社団法人HAPS / アートコーディネーター）

会場 | 京都市下京いきいき市民活動センター 3階集会所

入場料 | 無料

定員 | 40名

主催 | 崇仁すくすくセンター実行委員 / 一般社団法人HAPS

助成（崇仁すくすくセンター実行委員会） |

京都市「Arts Aid Kyoto」補助事業

チラシデザイン | 梅田郁美



アンケートの声

人の記憶、植物や生命が糸に色としてうつしとられて、それが形としてまた人の記憶に残すことができる、人の素敵な力だと思いました。「場」を通して人と人、人と植物、思い出と体験、いのちや生活が相互に影響しあって関わり合っていることがとてもよく伝わり、忙しい日々で見逃してしまいがちな、でも大切な部分だということ再認識しました。

作品の背景や作者の思いが聞けて、作品への理解が深まった。来年はいよいよこの地に京都市立芸術大学が来る。住民が作品、制作活動、作者に触れる機会も増える。こういうイベントに参加することで理解は深まるが、作品の見方など、アート、アーティストへのハードルをさげる（気軽に交流するためにはどのようなことがあるか考えさせられた。

とても丁寧にトークイベントを構成されており、知識と経験が共有しやすい工夫に感じました。「巨人の歯」「布」「挿し木」が3つの異なる活動でありつつ、共通の集合的記憶や無意識と連なることで、織物のように仕上がっていることを感じました。

医療現場で働いている者です。友人からのすすめで参加させていただきました。挿し木とアート、どれも自分の生活とは全く関わりのないものと参加前は感じておりました。しかし、私の職場と関わりのある施設の方との話が出てきて驚きました。挿し木で植物の命をつなぐプロジェクトを通じて、入居者さんの心をうるおしていることも学びました。アートでも医療でも「命をつなぐ」という共通点があることを知ることができました。

私自身も、美大を卒業して長らく美術業界で働いていました。麻紀子さんのように、わかりやすい「絵画」や「彫刻」でない作品は、美術館やギャラリーの展示では嫌厭されることが多いと思います。しかしながら自身のテーマをもって、地域に深く根差しながら丁寧な対話を重ねてプロジェクトを遂行する山本さんのようなアーティストの活動と作品は、何にも増して尊く貴重なものだと思います。どうか、そのような稀有なアーティストに人間として生活できるような地位と対価が行き渡りますことを強く望みます。

広報協力 崇仁すくすくセンター（挿し木プロジェクト）2022年度活動報告展

DATA 会期 | 2023年2月5日（日）-2月12日（日）10:00-17:00
会場 | 京都市下京いきいき市民活動センター（うらおい館）1階ロビー
入場料 | 無料
主催 | 崇仁すくすくセンター実行委員会
共催 | 崇仁デイサービスうらおい / 京都市下京・東部地域包括支援センター

協力 | 一般社団法人HAPS / 京都市下京いきいき市民活動センター / 京都みどりクラブ / 崇仁自治連合会 / 崇仁児童館 / 崇仁発信実行委員会
助成 | 国土緑化推進機構「緑と水の森林ファンド」 / 下京区まちづくりサポート事業「SHIMOGYO+GOOD」令和4年度採択事業 / 京都市「Arts Aid KYOTO」補助事業

実践の紹介③

高瀬川モニタリング部

2021年度のモデル事業で招聘したアーティストの前田耕平による1年間の試みは、京都市内を流れる高瀬川やその流域の「生き物」たちの世界を観察し、高瀬川の昔と今、これからについて考える、前田を部長とした部活動として発展・継続しています。今年度は、年間を通じたモニタリング、地域行事や学校の授業への参加、報告会の開催や、

新聞「モニタリング通信」の発行等を行い、川をめぐる多様な生き物の観察・表現方法、関わり方を模索してきました。HAPSは高瀬川モニタリング部の活動に部分的に協力し、報告会では2021年度の取り組みの記録映像なども上映されました。

※ 今年度の「高瀬川モニタリング部」の実践の詳細については、p90の継続調査もあわせてご覧ください。



報告会での展示の様子

制作協力 高瀬川ききみる会プロデュース 高瀬川モニタリング部報告会

DATA 会期 | 2022年7月29日(金)–7月31日(日) 11:00–18:00
会場 | 高瀬川・四季AIR
入場料 | 無料
協力 | 一般社団法人HAPS

[会期中のイベント]

座談会 | 7月30日(土) 13:00–15:00
部長の前田耕平とゲストによる座談会。高瀬川の生態環境の疑問を一緒に考えます。
ゲスト | 釜屋憲彦(環世界研究者)

入部体験会 | 7月30日(土) 11:00–18:00
高瀬川モニタリング部の部員による活動体験。各回10分、定員3名程度で「高瀬川・四季AIR」前の高瀬川を観察・記録します。

演奏会 | 7月30日(土) 17:00

高瀬川モニタリング部員打楽器奏者谷口かんなの高瀬川での生演奏会。

高瀬川ききみる会プロデュース
高瀬川モニタリング部
報告会 vol.2

DATA

会期 | 2022年9月23日(金・祝)–9月25日(日) 11:00–18:00
会場 | 高瀬川・四季AIR
入場料 | 無料
協力 | 一般社団法人HAPS

[会期中のイベント]

上映会 | 9月23日(金・祝)–9月25日(日)
11:30 / 12:00 / 12:30 / 13:00 / 13:30 / 14:00 / 14:30 / 15:00 / 15:30 / 16:00 / 16:30 / 17:00 / 17:30

高瀬川モニタリング部の起点となった、2021年度の前田耕平による高瀬川のリサーチとオープンラボ「かめのま」の記録映像を特別公開します。

撮影・編集 | 中谷利明

入部体験会 | 9月23日(金・祝)–9月25日(日)
11:00–18:00

高瀬川モニタリング部の部員による活動体験。「高瀬川・四季AIR」前の高瀬川を観察・記録します。

高瀬川モニタリング部
報告会 vol.3

DATA

会期 | 2023年3月10日(金)–3月12日(日) 11:00–18:00
会場 | 高瀬川・四季AIR
入場料 | 無料
企画 | 高瀬川モニタリング部企画チーム
協力 | 高瀬川ききみる会 / 一般社団法人HAPS

[会期中のイベント]

座談会 | 3月12日(日) 14:00–15:00

ゲスト | 津田和俊(京都工芸繊維大学講師、山口情報芸術センター YCAM 研究員)

入部体験会 | 会期中随時

ささやかな音楽会 | 3月12日(日)
出演 | 谷口かんな(打楽器奏者)



離れられない大切な場所で ともに生きていくために

2022年度 文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業 モデル事業報告会

構成・執筆 | 竹内厚

日時 | 2023年3月25日(土) 14:00-16:30

会場 | 喫茶アミー

話し手 | 崇仁すすくセンター実行委員会、高瀬川モニタリング部、東九条 空の下写真展実行委員会

ゲスト | 石谷治寛 (広島市立大学国際学部准教授、京都市立芸術大学芸術資源研究センター客員研究員)

アートコーディネーター | 石井絢子 (一般社団法人 HAPS / 本事業担当)

司会 | 中川眞 (大阪公立大学都市科学・防災研究センター特任教授 / 本事業全体監修)



(左) 会場の喫茶アミーは崇仁地域の老舗。京都市立芸術大学新キャンパス予定地のほど近くに位置する
(右) 報告会にあわせて会場内には展示も

2022年度のモデル事業に関わった主な3団体を招いた報告会を実施。第1部ではそれぞれの活動内容を報告し、第2部ではゲストを交えてのクロストークと最後にささやかな交流会を行いました。各団体より複数名に登壇いただくことで、同じ実践の中でもさまざまな立場の視線が交わりながら協働のあり方が形づくられているさまが垣間見える場となりました。また、一地域を越えてより発展的な視点で実践を捉える手がかりとして、近接分野の研究を重ねてきた石谷治寛をゲストに迎え、各報告に対するコメントとともに国際展や国内外のプロジェクトについて事例紹介いただきました。実践や経験を報告しつつ、疑問を投げかけ、交流する機会となった報告会の一端を掲載します。

第1部 活動報告

まず、会の冒頭でアートコーディネーターの石井絢子が過去のモデル事業のあり方を受けた今年度の企画趣旨と本報告会の方向性、参加者への注意点等を述べ、続いてモデル事業が主になどのような場所で行われてきたか、地理的・歴史的な面について地図を投影して説明。最後に登壇者を紹介し、各団体の活動報告へ移った。

石井 | これまで1年に1~2組のアーティストを招き、新規プロジェクトを立ち上げていたこの事業ですが、6年目を迎え、今年度はHAPSの動きを起点に新しいプロジェクトを立ち上げるのではなく、多様な立場から複数人で芸術実践を重ねている人たち、もしくは行おうとしている人々と部分的に協働したり、時にそういった方々の下支えをしたりするという試みを行うことをモデル事業としました。具体

的には、トークイベントを共催で協働で行ったり、企画を形にするマネジメントの技術的なサポートを行ったり、金銭的なサポートを行ったりと団体によって関わり方は異なります。

すでに土地とさまざまな形で関係性を持っている方々の、公共性を意識した切実な思いを抱えた自発的な動きが少しずつ増えきているように感じたというのが、理由の一つとしてはあります。

今日は、それぞれが模索する活動から見えてくる協働や共生のあり方を共有し合えればと思っています。また、関わっている地域という枠組みですとか、固有性にとどまらない活動の普遍的な価値も、一步引いた目線から一緒に考えていきたいと思い、石谷治寛さんをゲストとしてお招きいたしました。それでは、よろしくお祈りします。

東九条 空の下写真展実行委員会

村木美都子（東九条まちづくりサポートセンター〈まめもやし〉事務局長）

やんそる（Books × Coffee Sol.店主、東九条マダン）



「東九条 空の下写真展」は、東九条・須原通周辺の公園や空き地に面した金網フェンスを展示場所として街の今と昔を写したさまざまな写真を集めて展示する企画で、2022年4～5月に開催された。誰にでも開かれた公共の場である路上での写真展は、どのような時間帯でも誰かが足を止めて写真に見入ることができるオープンエアな展覧会となっていた。

この写真展の「言い出しっぺゆえ、代表みたいなことをしている」というやんそるが、この企画が単に昔や今の写真を展示するにとどまらず、これまでに東九条で行われてきた多くの地域活動や文化運動、街の歴史につながるものであることを紹介。それに続いて、東九条まちづくりサポートセンター〈まめもやし〉事務局長として生活支援、まちづくり支援に関わる村木美都子が、自身の立場から、どのような思いで写真展に関わっているか述べた。

そもそも「東九条 空の下写真展」で展示された写真は、19の協力団体、20人を超える個人から提供を受けたもの。その核には1959年から東九条で活動を継続し地域福祉を担ってきた「希望の家」が収集・保存してきた写真がある。そして、東九条のさまざまな団体と連携しながら街の撮影をライフワークとしているカメラマンの存在も大きいという。

やんそる | 写真展の開催にあたって大事にしたかったのは、昔のことをこの場所でもう一度みんなと見てみたいというのももちろんありましたが、ただ昔はよかったなというだけじゃなくて、過去とさき

んとつながる今の写真展を心がけました。そのためには、東九条に住んでいる人も住んでいない人も、東九条をよく知る人も今はまだ知らない人も、ここで撮ってみたという写真はすべて展示しました。集まったものを尊重することを大事にした写真展にしたかったの。そうすることによって、東九条に集まる多様なものたちの顔があらためて見えてきたように感じます。

空の下写真展は東九条を中心に展開されたさまざまな動き・運動の積み重ねの上にあるとして、いくつかの代表的なものが紹介された。1959年に1人の神父が立ち上がって誕生した「希望の家」、1978年から40年続いた民間の識字学校「九条オモニハッキョ」、1986年から活動する文化グループ「ハンマダン」、1984年に障害者自身の自立生活の実践と啓発活動を目的に設立された「日本自立生活センター（JCIL）」。東九条を拠点にしたそうしたグループの名前が挙げられる中で、やんそる自身も関わる「東九条マダン」についても紹介された。

1970年代の韓国で、植民地史観からの脱却をめざして始まった民衆文化運動に連帯、支援する形で、日本では1982年に初めて大阪でマダン劇が上演され、翌年「生野民族文化祭」が開催

される。東九条でも同じように民族文化祭を開催しようという機運が高まり、1993年、「東九条マダン（ひろば）」という祭りが開催され、以来、毎年秋に地域の祭りとして続けられている。やんそるは、特に、1986年に結成された民衆文化牌「ハンマダン」の存在が大きいと捉える。

やんそる | 1986年にこの東九条でマダン劇や韓国の民衆文化運動を継承しようと「ハンマダン」というグループが結成されます。それまでは在日コリアンだけの集まりであったものが、東九条で初めて日本人と在日とが一緒に活動を行う形になりました。民族の違いだけに集約されない自己と向き合い、そこから生まれる苦悩と葛藤を自ら表現していく。在日だけが抑圧されてるんじゃないかな。日本人でも解放されてないんじゃないかな。解放を求めたそういう動きが1986年に始まります。で、1993年に「東九条マダン」が開催。これは、東九条を拠点とするハンマダンが展開する文化運動が成長していたことも大きかったし、すでにさまざまな活動主体が存在しそれを尊重する地域であったこと、その結実として「東九条マダン」が生まれたんじゃないかなと思います。

「東九条マダン」は、表現を武器に80年代の閉塞した社会を打破しようとした人たち、生存や人間の尊厳を守ろうと東九条で動いたキリスト者や社会運動の推進者たち、障害者運動を牽引していた人たちが中心となって、地域住民やその理解者とともに、大人から子どもまでのみんなが対等に参加できる祭りとしてつくりました。「地域みんなの祭り」でいう「みんな」って誰なのかをとことん突き詰めたことがありましたでしょうか。たぶん、この「東九条マダン」が生まれたときには、このことにみんなが向き合ったんだと思います。そういう徹底した議論、マダンづくりのような経験をした人や、その集まりの場は、とてつもなく豊かになっていくものだ

なって思うし、そういった経験と実践が、「東九条 空の下写真展」として実現しました。

「私はまちづくりという視点でこの街にずっと関わってきました」という村木美都子。1988年からキリスト者として東九条に関わり始めて、現在は、東九条まちづくりサポートセンター〈まめもやし〉事務局長として生活支援、まちづくり支援を行い、地域に関する資料収集や街のアーカイブ事業も進めている。そのなかで、2022年度は「東九条 空の下写真展」をともに行うことになったという。

村木 | 東九条では、いろんな課題に対して地域の中で話し合い、当事者とともに行政に訴えてきました。そういったまちづくり活動は、一方で、みんながつながって、楽しいこともしていて、それらが合わさって地域のエネルギーとなっていました。その歴史にHAPSなどの芸術関係者が関わるようになり、以前から地域で文化発信活動をしていたやんそるさんたちが加わりました。いろんな角度から幅広く関わるようになり、東九条のよさや持っているものを表現し、発信するという形になってきたんじゃないかと思っています。

私自身、まちづくりに関わってきて、そこで動いていた人たちのエネルギーやすごさみたいなものをアーカイブ的に残していきたいと思ってきました。そのときどきに形をつくって、残していくことが歴史につながっていく。人間ってというのは歴史をつくっていくことができるんだと私は思っています。そういう意味でもこの「東九条 空の下写真展」にはとても大きな意味があったんだなって。これからも、この地域から形にこだわらず、いろんなものを発信できたらいいなと思っています。

なお、やんそるの発表では街の変化に対する戸惑いも発せられた。2017年に地域のまちづくり

を考へる人々とコンセンサスをとりながら策定された「京都駅東南部エリア活性化方針」の実践＝文化芸術を基軸とする若者が集まる多様性を認めるまちづくりを、どう進めていくのかと。

やんそる | 活性化方針が策定されて以降、「アート」という概念が京都市の事業とともに地域にやってきました。ただ、これまでも「アート」という響きは伴わないけれども、美しく、ときには醜いほど強烈に激しくて、たくましく豊かなものが東九条にはすでに存在していたよなあって、私なんかはそ

ういう気持ちを抱いてしまう。おそらく、この地で生きてきた少数でない人たちが文化芸術、アートの街という言葉に戸惑ったような気がします。誰のための、何のための事業がここで行われようとしているの?っていうか、自分の理解がうまく追いついていかないというのもあったし、「アート」「福祉」「若者」「共生」といった、きれいで正しい言葉が並ぶけれども、それが本当に現実と向き合っ出てきた言葉なのか、ただ冠言葉のように使われているだけじゃないのって考えたときに、とても危険だなあと、少なくとも私はそう感じていました。

崇仁すくすくセンター実行委員会

大森晃子 (崇仁デイサービスうらおい 管理者)

宮崎彰子 (京都市下京・東部地域包括支援センター センター長)

山本麻紀子 (アーティスト)



「崇仁すくすくセンター」は、京都市立芸術大学および京都市立美術工芸高等学校移転による新たなまちづくりで大きく変化する崇仁地域にて、街とともにあった小学校、保育所、市営住宅などで育ってきた樹木の挿し木を媒介として、地域の人をはじめ、さまざまな人々とそれを見守ることで土地の記憶や人のつながりを継承していくことを目指すプロジェクト。2020年度はHAPSが招聘したアーティスト、山本麻紀子によるプロジェクトだったが、2021年度から体制を変更し実行委員会を立ち上げて、この地域で高齢者との活動を続けてきた「崇仁デイサービスうらおい」「京都市下京・東部地域包括支援センター」との協働を開始し、2年となる。

山本 | 2020年の4月から8月にかけて、芸大移転

予定地である崇仁地域で工事が始まると、多くの木々が伐採されるということを知ったので、木の命をつなげることができないかと思って始めたプロジェクトです。崇仁市営住宅のABC公園と呼ばれていた場所にあった藤の木、ムクゲの木。崇仁小学校の校門そばにあった桜、夏みかんの木。崇仁保育園にもさまざまな樹種が植わっていて、金柑や柿といった果樹が多いという印象を受けました。ちょうどコロナ禍の最中だったので、これらの敷地にHAPSを通して京都市の許可を得て入れてもらっては、枝を切って挿し木づくりをするというこ

とを、あまり人と関わらずに1人で黙々と作業していたような時間でした。

2020年8月の時点で、結果的に50樹種の木から776本を挿し木にしたという山本。これを、2020年12月からは、自身の滋賀の山間部にあるアトリエで管理をし、1年ごとにひとまわり大きな鉢に植え替えをするという作業を行ってきた。この2019-20年度のモデル事業で開始したものが継続発展する形で、2021年度に「崇仁すくすくセンター実行委員会」が立ち上がる。

実行委員会のメンバーでもある「崇仁デイサービスうらおい」と始まった活動は、まずデイサービスフロア内にて利用者や職員の方々に5本の挿し木の見守りをお願いするとともに、見守り日記を書いてもらうことを依頼。そうした活動を続ける中で、「作品づくりも一緒にできたら」と崇仁すくすくセンターの大きな旗をつくるという目標を掲げ、動き出した。

山本 | デイサービスの利用者のみなさんにとってなじみのある技法で進めたいと考えてデイサービスの職員さんにご相談したところ、当初順調に育っていたその13種類の挿し木が大きく育ったときの姿をイメージした下絵を私が描き、その上にちぎり絵をほどこすという制作をすることになりました。色和紙をつくることから始めたかったので、真っ白な和紙に水彩絵の具で色を塗っていただいたりもして。13枚のちぎり絵を完成させるために、崇仁地域で育っていた植物を擦って、色にして、それで染めた部分もあります。挿し木の見守りやこうした制作を続けながら、同時進行でみなさんに挿し木の実物に触れていただきながらのお話の聞き取りも年間を通じてやっています。

挿し木がいずれ大きな木へと育ち、地面に戻っ

ていく日のために、その木が育っていた崇仁地域の記憶や、プロジェクトに関わった人たちの話を合わせて伝えていきたいのだという。山本が牽引する、こうした「崇仁すくすくセンター」の活動について、「崇仁デイサービスうらおい」の大森晃子は、とてもうれしいものとして見ているという。

大森 | すでに崇仁小学校や市営住宅もなくなって、この地域ががらんと変わるというのが数年前からじわじわ迫ってくるような感覚でした。まもなくデイサービスの施設を取り囲むように大学ができあがりますけど、私たち職員はそれを見ているだけで、何もできないのだからって思いがずっとありました。それが、山本麻紀子さんからこの企画のお話を聞いて、なくなっていくものをつないでいくことだってできるんだということ挿し木を通して考えさせられました。

挿し木から大きな旗づくりになったり、この次はピクニックマットって展開だったり、どんどん展開が広がっているのも、デイサービスの利用者さんからの意見を吸い上げた上でされていることなので、地域とその歴史を踏まえながら今後にもつながっていくような、未来への展望が開けたように私個人としては思っています。そこに関われたことがすごくうれしいなって。

65歳以上の高齢者の支援とともに、地域に目を向けながら地域の住民同士が支え合う仕組みづくりも合わせて進めている「京都市下京・東部地域包括支援センター」。このセンターとの活動は、朝のラジオ体操の参加者がそのまま「崇仁すくすくセンター」に関わる形で活動をスタートしました。仮の名を「水曜日の会」と呼ばれるようになったこの活動では、でき上がった13枚の挿し木のちぎり絵を大きな布に縫いつけたり、藍染めで旗の部分的な装飾に挑戦するといった試みを続けている。センター長を務める宮崎彰子さんによれば、崇仁

地区の高齢化率は40%にもおよび、下京区の他の地域と比べてもかなり高いというだけでなく、人口も約1300人と減少傾向にあるという。

宮崎 | 私たちも地域のみなさんの居場所づくりができないかなと思って、10年ほど前からラジオ体操を活動として始めました。どうしても活動に参加する方々の顔ぶれはなかなか変わらなくてという悩みもあるのですが、今回は、もともとある活動と連動したほうがみなさんも参加しやすいのではということで、ラジオ体操のメンバーの力を借りる形で「水曜日の会」として立ち上げて、「崇仁すくすくセンター」の活動につなげました。最初は、山本さんも地域の方とあまり顔見知りではないということで、私たちも毎週サポートに入って関係を構築していったのですが、山本さんがもう本当に丁寧に進めてく

ださるので、すでに地域の方と山本さんの信頼関係はしっかり築かれてるなという印象です。

これからの街の変化に対して、楽しみもあるけど不安もあるという声を聞きます。今いる住民と同じ数の学生さんが地域に入ってくるということで、住民の生活はどうなるんだろうとか、置き去りにされたりとかすることのないように、大学や高校と地域がうまく融合することを目指して今の活動をつなげていけたらなと感じています。

「崇仁すくすくセンター」は2022年度の活動についての記録集を発行。次年度からも、コミュニティに入れられない人や孤立されている方との接点を探しながら、今ある挿し木が地植えされるところまで活動を継続していくのだと、最後に山本さんが発言して発表を終えた。

高瀬川モニタリング部

山本洋明 (デザイナー)

梅田郁美 (京都工芸繊維大学 工芸科学研究科デザイン学専攻 修士)

前田耕平 (アーティスト)

「高瀬川モニタリング部」は、2020年度の山本麻紀子に続いて、2021年度にHAPSが招聘したアーティスト、前田耕平が立ち上げたプロジェクト。京都から大阪に引っ越したタイミングであった前田は、この依頼を受けて何ができるだろうかと迷った末に、高瀬川を起点として、共生について考えるプロジェクトにたどり着いたのだそう。

前田 | 地域ということに限定しない関わりができないかと思っていたら、高瀬川という存在に出会いました。この川がどこから流れてきて、どこへつながって



いくのか。そういったことを考えてみるのはどうかと思ったのがプロジェクトを始めたきっかけになります。

二条の「高瀬川二条苑（現・がんこ高瀬川二条苑）」の庭園に、鴨川を分流したみそそぎ川から水を引き込んだものが源流となり、木屋町沿い

に南へ。崇仁地区や東九条を南へ抜けた先で、東松ノ木町の取水口からまた鴨川へと合流している高瀬川。この高瀬川の全域で定期的に川に入りこんで生き物を観察することを基本の活動として、2022年4月に前田を部長とする「高瀬川モニタリング部」が結成された。

現在、40人ほどが部員として登録し、なかでも7人が企画チームとして活動。そのうち、デザインを担当するのが山本洋明と梅田郁美である。

前田 | ただ生き物を観察するだけといえばそれだけなんですけど、せっかくなのでいろんな人に関わってもらおうと思って、デザイナー、映像作家、音楽家、俳優…と、親しい人や最近知り合った友人に声をかけながら、部活のようにわいわいと活動を始めました。

山本 | 僕も京都とは関わりがない者ですが、現役のデザイナーです。広報物だったりのデザインを担当しています。

梅田 | 私は前田さんの2021年度の最後の発表会からお手伝いさせていただいて、この春から社会に出るんですけど、一応、まだ大学院生という形で関わらせてもらっています。山本さんと一緒にデザインや広報物のお手伝いをしています。

高瀬川の定期的な観察に加えて、環世界をテーマに研究を進める釜屋憲彦やYCAM研究員の津田和俊らを招いて座談会を開催するなど、高瀬川の観察を一つのきっかけとしながら、そこでの発見や議論をさらに広げて深めつつある。

前田 | 高瀬川の生き物を観察することを通して、結果的には地域に住まう人やその歴史に触れていくことにもつながっていきました。そんな中で高

瀬川が開削された歴史やその変遷を調べてくれた「高瀬川ききみる会」のみなさんのご縁もできて、下京区のギャラリー「高瀬川・四季AIR」を活動拠点としながら一緒に活動させていただきました。高瀬川の観察を続けていると、そもそも川ってどこからどこまでのことを言うのかなって話にもなってきた。川の中、川の周辺、川を取り巻く様相…のそれぞれが、そのときどきで変化していくことに気づいていくんですね。

高瀬川に入りこむにしても、橋の下にもぐりこんでみたり、川の水を顕微鏡でのぞいて微生物を観察したり、あるいは、周囲に住まう人たちが見守る「地域猫」にも目を向けてみたり。

前田 | 自分自身が京都に暮らしていた頃は、高瀬川にここまでの生き物が暮らしているということも考えもなかったんですけど、実は生き物ごとにテリトリーみたいなものもあって、例えば、高瀬川に集まる鳥は川の魚を狙っているようでいて、周囲の住民の方にもらったパンを目当てにしているなんてこともわかってきました。野生下であり人工下でもある、この絶妙な混ざり合いが高瀬川の面白さであり、そこにさまざまな人の思いや歩みが加わって、高瀬川をより複雑化させている。そして、川の中でもいろんな循環が起こっているという魅力的な場所なんです。

「高瀬川モニタリング部」では紙媒体の『高瀬川モニタリング部通信』を制作して、無料で配布も。こうした活動の広がりも、山本、梅田をはじめとする企画チームがともに活動しているからこそ。最終的に目指すのは、「高瀬川の見かた」なる図鑑的なものをつくることだという。

前田 | トビケラという水生昆虫は、高瀬川で見つ

けた石に自分で吐いた粘着質の糸をくっつけて家づくりをしていて、石の他にも貝なんかも使っていることを知りました。どこまでが川なのかという疑問と同じく、結局、どこからどこまで生き物なんだろうかって、その境界を曖昧なものに感じてくる。そういうこ

とも考えられる図鑑というものを、この「高瀬川モニタリング部」を通してつくってみたいというのが今の目論見です。高瀬川を通して見える未来、そして自分たちなりの見かたというものを見出せることを期待して、活動を続けていこうかなと思っています。

第2部 クロストーク

第2部では、第1部で登壇した3団体に関わる8人と石井に加えて、司会の中川真とゲストの石谷治寛が参加。石谷による3団体による発表へのコメントに続いて、それぞれが自身の活動を踏まえて、「アート」という言葉をどう感じるかなど意見が交わされた。

石谷は「芸術学や美学を専門としている教師が喋ると、何が優れたアートなのかみたいな価値判断でコメントすると思われがちではあるんですが、そのような見られ方にならないようにしたい」と前置きを述べつつ、第1部でもアートという言葉が行政の再開発の道具として使われているという危惧が表明されていたことに触れた上で、大学の授業などでは「アートとは異なる信念の多元的なシステムである」と学生に伝えるのだと紹介された。

石谷 | アートというものが美術館に収まるようなものだと考えている人もいれば、技芸を高めた洗練されたものだと思っている人もいる。高い技術を見せつけるのではなく、アイデアを重視する人もいる。それぞれの価値観の中でアートという言葉を使ったり、場合によっては文化と呼んだりすることがあります。そういった多元的な信念や価値観を認めあっていくことがアートの面白さであり、アートという枠組みの中で活動していくことの意義があるのではと

思います。今回、発表いただいた3つの団体の活動もそれぞれに異なる信念のもと、真剣に行われているもので、それが多元的に同じ場にあるということが、豊かなあり方だと感じたことを先に言っておきたいと思います。

続いて石谷は、三者の活動それ自体が、アートとは何かという問いに応えるメタファーになっているように思えるとコメントされた。「東九条 空の下写真展」について「歴史的に培われ継承されてきた文化をその場所に提示すること、そこにさまざまな人々を巻き込んでいくこと。お話から多くのことを教えていただきました」とコメント。つづいて「崇仁すすくセンター」へは、「お年寄りの方とそのサポートをしている方々と、それぞれの生活を尊重した形で、この街から失われつつあるものをもう一度つなぎ合わせることで、別の形に変えて存続させようとしている。挿し木が象徴するように、そうした変容の過程がある」と紹介。最後に「高瀬川モニタリング部」については、「前田さんの話の中で「環世界」という言葉が出てきました。つまり、個々の生物は自分自身の尺度で世界を生きているため、他の生物の世界に対しては無関心である。さらに生物は自然だけでなく人工物とも共生関係を結びながら生きている。そうした生物たちの環世界的な世界観をさらに観

察しながら、生の多様なあり方を見出していこうというのがモニタリング部の活動なのかな」とコメントされた。ただ、この多元性といってもそれぞれの時間感覚が異なることにも注意すべきで、写真展が40年以上の歴史的スパンを含み込んでいるのに対して、モニタリング部は、自然環境の現在の一時的な変化を断面的に切り取るものだろうと付け加えた。

こうした石谷の所感を受けて、まず手を挙げたのは村木美都子、やんそる。

村木 | 「東九条 空の下写真展」は、東九条に住んでいるいろんな人たちとその周りとの関わりの写真をとりあえずできる限り集めていったので、在日の方だけではなく、ほんとにその地域に住んでおられるいろんな背景の方がこの場所にいた、歴史の中に生きてきたという写真が出されています。その写真を美術館とかでお金を払って見るんじゃなくて、誰でも通りすがりの人が自由に見れる展示の形、そういう自由性っていうのがいいなとは思っていますので、ちょっと付け加えたいと思います。

やんそる | 私たちの経験や活動が今、アートという言葉で語られるのですが、あえて挑戦的に言うなら、アートの枠組みをつくったのはアートに携わっ

た人たちじゃないの?って。そこに対する同等の問いかけは、東九条では、在日の社会だったり日本人だったり、もしかしたら同和地域も含めてだったり、実は自分たちでつくってきた枠組みみたいなものに向き合って、それをどうにか突き破ろうとしてきた、その一つの形がマダンだったんじゃないかなと思います。

今、私は若い人たちとつきあう中で、特にアートに関わる人たちはとても真面目に向き合っておられるけど、どうしてもすごく狭い世界のようにも感じられて、しんどいやろなって思ったりもして。ただ、そういう自分たちの世界に向き合おうとするところに、人としての尊さみたいなものが感じられて、それがアートなのか何なのかは別として、私としては、なんか楽しいことしようよっていうくらいのことしか言えない。そういうことを感じました。

こうしたアートという枠組みを巡る意見に対して、「高瀬川モニタリング部」をあえて部活動として位置づけている理由を知りたいという石谷。アーティストである前田耕平がこれに返答した。

前田 | アーティストがやることがすべて作品とか表現になっちゃうんじゃないかっていうのは、僕もずっと悩んでることで…もうちょっとなんか、広く



ていいんじゃないかなって思ってます。今回の話をHAPSからいただいたときに、作品や展示という形をとらなくてもいいと聞いたので、じゃあ、昔から僕が好き生き物観察だけを純粹にやってみたいところからスタートなんです。もうほんとにやんそるさんも言っていたように、楽しみながらやりたいことをやれるっていうのが当たり前になってほしい。だから、あんまりアートの枠組みとか作品とかっていう風にしたくないって、自分ももがいてるんです。

このことについて山本麻紀子にも話を聞いてみたいという前田のフリを受けて、同じくアーティストである山本がマイクを持った。

山本(麻) | 私が進めている「崇仁すすくセンター」に関しては、アートという言葉を使うことはほとんどないというか、0回かもしれない。使ってはいないです。もちろん、プロジェクトの趣旨を説明はしますが、そこに共感してもらって何か手を動かしているという感じで。ある助成金の審査で、このプロジェクトを申請すると「これのどこがアートなのか」という質問が返ってきて、それに対してワークショップをやりますと書けば、その問題はクリアになったんですね。けど、どうしてワークショップっていうだけでアートの要素があると認識されたのか、むしろ疑問に思ったし、ちょっと嫌な気持ちになったというのが正直なところ。また、どうしてこの活動をアート業界で発表しないのかって聞かれたこともありました。そのときはすぐに答えられなかったんですけど、「崇仁すすくセンター」の活動は、高齢者、児童館の子どもたち、職員さんたちといった今生きている人たちと関わるなかで、挿し木という生き物と対峙しながらやっているものなので、発表する場もそういう関係性の中になければ私の中で整理がつかないって思いました。今の時点ではやっぱりアートの文脈の中で作品を発表するということは、全

然自分の中では思い描けない。

中川はさらに3つの団体間の話を促した。それを受けて「じゃあ、はい」とマイクを握ったのは高瀬川モニタリング部の山本洋明。

山本(洋) | 「東九条 空の下写真展」を見て、昔の高瀬川が写ってるやん! ってめっちゃテンションが上がりました。昔のことを研究してるわけではないので、歴史的な目線では見れてないんですけど、それでも、高瀬川の中に人が入ってる様子の写真をもっと見たいなって思っていました。

村木 | 昔の高瀬川はアヒルを飼っている人がいたり、川辺に実のなる木をたくさん育てているおっちゃんがいる、それを鳥がついばみに来たりって、すごい豊かな川だったんですね。写真には写ってないかもしれないけど、その歴史はすごく面白いんですけど、その木もなくなっちゃって寂しくて…。

切られた高瀬川沿いの木をどう使うか、どういう形で残せるかを考えているという村木。「それがアートなのかどうかわからないけど、社会学と地域とまちづくりとアートがくっついているような気がする」と続けて発言された。それを受けて、宮崎彰子、大森晃子と福祉職のみなさんの率直な声が聞かれた。

村木 | 私は普段、福祉的な仕事をしています。その日々の営みやそこに住むいろんな人たちの思い、それを他者が見て思ったことや感じたことを、そのままの形で残したり違う形で表現したりっていうことが、もしかしたらアートなのかもしれないんですけど、よくわからないんです。ただ、そういう社会学なこと、地域のこと、まちづくり、アートがくっついているような気がするんです。私は、その過程が大

事やと思うんです。写真展なら写真展ができあがっていくその過程こそが関わってる人にはとても大事で。そのやり取りの流れの中で、また新しいものが生まれたりするんです。そういうことを感じますね。

宮崎 | アートって私には本当に無縁で、今でもなんだかわかってないんですけど、山本さんと知り合ったり、前田さんとかの活動を見させていただく中で、なんというのかな、その背景には人との関わりがあったり、歴史とかをすごく学ばれていたりして、それって私たち福祉職員がいつも仕事にしているソーシャルワークともすごく密接につながっています。私たちが専門的に勉強してきているはずの人の声に耳を傾けるスキルを、どうしてアーティストの方たちがすごく上手にされるんだろうって思ったりもして、福祉職としてもアーティストの方の過程から学ぶものがすごく多くて。こんなに福祉と芸術とがつながっているってことを私は知らなかったので本当に勉強になっています。

大森 | 今までにも崇仁の川にいきなりアートが出現して、なんじゃこりゃということもあったんですけど、そのときはそれだけの認識でした。それが、こうやって(山本)麻紀子さんを中心にいろんな方と関わっていく中で、私たちがやっている作業にアートという言葉は使ってないけど、それが結果的にアートにな

るのかどうか、それは私自身もよくわからないんですけど…ただ、展示を利用者さんと見に行くと、自分たちがつくったものがそこにあって、その作品に自分たちが関わっているということが展示を見ることを通してすごく感じられるということがありました。アーティストにとって作品をつくる、報告する、発表するっていうのは別の次元の話かもしれませんが、「崇仁すすくセンター」の活動は今、そこが一体になっていて、それがいいのかなって。「東九条 空の下写真展」も人の力と場の力が一体化した感じがしましたし、「高瀬川モニタリング部」も場所によって同じ川が全然違っているところを周りの人が知れるっていうことがすごく刺激になってるなと感じました。

村木 | なんか面白いっていう視点って楽しいですね。アーティストは聞くのが上手だって話、福祉職だと対人援助どうするかみたいなことにどうしても視点が向かうから、なかなかそれ以外のことに話が進みづらいんだけど、(山本)麻紀子さんにはすごく知りたい! とか、それを使ってどうしようみたいな視点があるし、「高瀬川モニタリング部」はただ楽しいからっていうのを表現することで、地域の人がまたそれを見ることで発見が生まれたりもしています。違う立場の人がそれぞれに発信をすることで、共感が生まれたり啓発されたりつながっていったりって、クロスしていることがすごくいいなと思います。

福祉職のみなさんの話を聞いて、勧められてマイクをとったのは登壇者の中で最年少だった梅田郁美。

梅田 | これはデザインを学んでいる私の個人的な文脈に沿った話になりますけど、デザインとアートの何が違うのかって議論が私には普段から結構しんどくて、というか、あまりそこを定義することに意義を感じられなくて。…ってことが頭の片隅にあり



ながら、「高瀬川モニタリング部」の活動に参加させてもらったときに、みんなで川を観察すると「何かいるんですか?」ってナチュラルに関わってくる方がいて、そこには隔たりが一切ないんです。先ほど過程が大事だって話もありましたけど、人を自然と巻き込みながらつくっていているような感覚があって、しかも誰も別に完成形を求めているわけでもない。これってすごく優しい関わり方だなんて思います。特に「これがアートです」って説明しなくてもすんでいるのは、個人的にはとても心地いい。これを文化というのか、名前なんかつけなくてもいいのかもしれませんが、私はこの形が続いていけばなってあらためて思いました。

というところで、予定していた時間もいっぱい。会場からの質問を募ったところ、即座に手が挙がる。この日の報告会のタイトルについて、「第1部でやんそるから「血反吐をはくような議論を重ねて重ねて決定した」と説明があった、東九条マダンを元・崇仁小学校で開催した経緯について、それが何だったのか、可能であるなら知りたいと思いました」(聴衆A)。

聴衆A | 開発するという名のもとに、しかも、その一部にアートが使われてることが私はずっと気になっていて、もともと住んでいた人たちが、その「離れられない大切な場所」からなぜ移動しなければいけなかったのか。複雑なことではあるけど、後から入ってくる人たち、今回でいえば京都市立芸術大学の人たちはやっぱり考えなきゃいけないことだと思います。そのときに、例えばやんそるさんがおっしゃった、東九条マダンを崇仁でやることになったという、それもまたひとつの移動だと思いますので、血反吐をはくような議論があったとやんそるさんはさらっとおっしゃいましたが、それが何だったのか、もしも可能であるなら知りたいと思いました。

タイトルについては、石井が説明。続いて、やんそるが東九条マダンについて、可能なかぎりでも説明された。

やんそる | 2018年に東九条マダンを崇仁で開くことになった経緯について話すのは、これだけでもすごく時間のかかることなので詳細は省きますが、崇仁地域や芸大移転に関わる複数の関係者とお会いする機会がありました。大学が移転してくるにあたって例えばキャンパスの建築設計を担うリサーチチームがこの地域をかなり本格的に調べておられて、崇仁だけでなく東九条も同じ移転先の地域のひとつとして考えているんだという話とそのチームからあったり、とても丁寧に移転を進めておられるんだなって、こう言うところも多かったです。当時、東九条マダン内部に焦りもありました。二十数年の歴史があり、毎年数千人の観客で賑わうマダンですが、安定的な開催場所や練習場所、特に音が出せる練習場所がなく、毎年綱渡りのような形でそれらを確保することにかなりの労力を費やす必要がありました。文化芸術のまちづくりが進む崇仁と東九条でなんとか練習場所だけでも確保できないか、崇仁での開催がその足掛かりにならないかと考える人たちがいました。今では前実行委員長の時代に大きく進んだ地域との地道なつながりを継承し、地域の協力のおかげでずいぶん前進しましたが、練習場所はかなり深刻な問題でした。そんな状況の中、東九条と崇仁の歴史から、また東九条マダンがやってきたことや、これから目指すものを踏まえ、崇仁開催について何度も話し合いを行いました。日本が近代化へと突き進み、朝鮮半島を植民地化していった時代、東九条と崇仁地域には労働力として国内および朝鮮半島からたくさんの方が流入し、地域内の移動も頻繁で、今より一体感があつたと聞きます。もちろん、個々には様々な

ざごもあつたはずですが、一方でなんらかの助け合いで生活が成り立っていたのではないかと。それが戦後になって、行政区で隔てられ、新幹線で隔てられ、施策によって分断された。ある施策がこちらの地域には該当するけどあちらの地域には該当しないとかってこともあって、本当に残念ながらあまり行き来もなくなっていました。そういう関係をもう超えたいというのが単純に私にはありました。

個人的なことですが、私がたまたま7年前から八条通のすぐ近くで店をやるようになって、そこに崇仁地域から引越してこられた方がたくさんおられて、崇仁で育ってきた高齢の方々もかなり私の店の支援をしてくださりました。だんだんと崇仁の歴史は私の歴史の一部でもあるなってことも感じられていたときに、崇仁でマダンをやりたい、そうすることでマダンが一步開かれるなとも思ったんです。ただ、「東九条マダン」と名付けてるものを、なんでわざわざ崇仁にするのか、マダンを楽しみにしている東九条の人たちを放っておくのかという声も根強くあつたし、民主的に、いろんな勢力に巻き込まれずにまじめにやってきたこの祭りが、このことによってもしかしたら違う方向にいくんじゃないかって懸念は私にもメンバーにもありました。だからどうしようかっていう迷いの中で、講師を招いて東九条と崇仁の歴史の勉強会をしたりしながら、やっぱり外へと開いていこう、これまでマダンがやってきた開かれた「ひろば」を崇仁で開催してみようっていう方に舵をとったんですね。マダンが分裂してしまふんじゃないかってところまでいったので、本当に大変な経緯で、けど、崇仁でやってよかったなと今は思っています。

すでにアートという名目でいろんなものが移動させられたり、今後、他にもいろんな資本が入ってくるだろうなという中で、アートの名のもとに世界的にもジェントリフィケーションが起きているということも私もいろいろ勉強しながら…ですけど、単な

る反対運動も疲れるし、これはダメですよって言い続けるのもしんどいんですよ。別にその行政の担当が悪くもないし。じゃあどんな形だったら動けるかなっていう模索をこの3年ぐらいいり始めていて、その動きが空の下写真展だったり、高瀬川の掃除だったり、なんとなく面白いから外の若い人やいろんな人たちが集まってきているような状況だと思います。長くなりました。

ここまでですでに予定していた開催時間を大幅に超過。残念ながら駆け足になってしまったが、石谷から、10年かけてコミュニティ・ガーデンを育くむプロジェクト、街にある果樹を地図化しシェアする試み、蜂の生態を意思決定に含んだ脱中心的自律組織(DAO)や河川敷の再活用、広島での地域資源のアーカイブや空き市営店舗の活用など、国際展での展示と国内外でのアートプロジェクトの動きが会場に共有された。そして最後に、今回の会場として使われた、ここ崇仁で長年営まれてきた「喫茶アミー」について。京都市の再整備事業により変化している、東九条と崇仁をつなぐ須原通り沿いにあり、京都市立芸術大学新校舎の向かいに立地。45年続く店であり、幾度となく移転してきたことが紹介された後、喫茶アミーのマダムからの言葉で本報告会は終了した。

喫茶アミーの敦子さん | 私の母がこの喫茶店を始めて45年になります。その間、立ち退きがあって、店が2回移動してこのお店は3店舗目です。母が数年前からここでお店を始める時に、私と息子も協力して内装などの準備をしました。今後は子ども食堂を開いてみたいとかいろいろ考えていますので、またそのときにはみなさんにも来ていただきたいですし、力を貸していただければうれしく思います。どうぞよろしくお願いします。

アートコーディネーターへのインタビュー

聞き手・文 | 石谷治寛

本調査では、モデル事業のアートコーディネーターである石井絢子の振る舞いと考え方について、主にインタビューを通して明確にしていくものである。HAPSの2022年度の活動として、これまでの共生志向のアートプロジェクトの実践から、主体的に活動を重ねてきた団体や個人との協働へと活動の軸が変化していった。2022年度までの山本麻紀子や前田耕平といったアーティストによるプロジェクトは、HAPSの主催事業を離れながらも活動を継続し、HAPSもそれらのプロジェクトとの協力関係を維持している。

2022年度のモデル事業は、とりわけ「東九条空の写真展」をメインに、東九条地域で生活している人々、東九条マダンの実行委員長も務めたやんそらとの協働によって展開した。

本聞き取りでは、本事業が掲げる共生についての考え方、その共生がいかに地域の中での芸術実践を通して行われたか、HAPSのアートコーディネーターの現場での思考、地域の中での具体的な取り組みを振り返るものである。紙面の都合上、ある程度の編集や部分的な割愛も含まれるが、地域と行政のあいだに立って事業を進めるアートコーディネーターの難しい立ち位置が感じられる内容になっており、その揺らぎも含めて残しておくことが重要だと判断した。

「共生」について 対象を限定しないで広く捉える

石井 | この事業については、HAPSの主催事業として京都市から「共生」の解釈が委ねられています。国や地方自治体はどのようにこの言葉を解釈して事業をしているのだろうと見渡した時に、例えばこの事業と直接の関係はありませんが、文化芸術推進基本計画に基づいて文化庁が「文化芸術による共生社会実現」に向けて計画した事業は障害が中心になるなど、対象がやや限定的であることが多いように思うんですね。「共生」という言葉で考えられる範囲や課題はより広いように思いますし、広いゆえの難しさも感じています。そもそも、当初使われていた生物学や生態学では、共生という関係性を表す言葉自体がもっと細分化されている。例えば片方のみが利益を得る共生のあり方だったり、あるいは寄生という、片方が利益を得てもう片方がどちらかという害を被ることであったり、共に生きるあり方は細かく見ていくと多様にあって、いまだのような方向にあり、どのように捉えるかを色々な視点で考える必要があると考えてきました。社会学の観点で言うと特に「共生」は、60年代後半頃から本格化した社会的マイノリティの社会運動と結びついて実践面で発展していったように見えます。また最近是人类学の領域が、2000年代以降のここ10～20年ほどで自然科学の領域を含めた、社会だけでなく地球全体を視野に入れた

共生について考え始めた傾向にある、という大きな理解をしています。ここでは語りきれませんが、領域により焦点や解釈の仕方が異なる、そういった歴史の中でのポジショナリティも含めて、アーティストと共に考えてきたつもりではありません。

こういうことを前提にして「共生」という言葉に深く潜っていくと、人は生まれてから必ず何かと共に生きているわけで、多くの場合保護者がいるように、家族や複数の人間と密室で過ごすことを生まれながらにしてきている。もっと微細な視点で見ると、例えば空中には細菌や虫が飛んでいて、庭には雑草が生えていますし、家の中も様々な存在に溢れている。人が共生について考える際は、もうすでに起こっていることを通して「どう何かと何かと共に生きるか」や「人はどう社会のなかで生きて行くか」という問いが立つはずだし、それはどう生きたいかとか、どう生きてきたかということと繋がると思います。リアリティを持って考えられる範囲を想像すると、実はすごく個人的な言葉だと思うんです。

——個人的な言葉というのは共生という言葉が？

石井 | はい。共生という言葉の解釈は個人の考えや生きてきた環境にとっても困っていると思います。芸術も、個人の生き様やどう生きるかという思考から出発していると私は考えているので、公的な事業で、芸術や共生について社会の中で実践を通して考え形にしていくのは、そもそも難しいことであり、そんなにポンポンと事業として成立するものではないと感じています。

例えば「自然と人間の共生について考える」という言葉は、自然と一体化して生きている実感のある人、例えばアーティストの前田耕平さんは和歌山の大自然の中で育ちましたが、そういう人は、

人間と自然をわざわざ切り離して共生と銘打っていくことにあまりピンと来ず、言葉にするより先に身体的に把握しているように思います。でも都市部でずっと生きてきた人は自然というものを自分の生活の外側にある対象化された存在として捉えていて、こういった言葉から考えることが多いのかもしれない。共生という観点からこの事業を考えると、結局、関わる人それぞれなりの共生のあり方を芸術を通して形にして示していく、それが部分的には人の心と重なって動かし、目の前の世界の直接的な変化につながることもあるのかなと思います。また、それらを美術や芸術といった制度やシステムを使って後世へ残していく可能性があることのように、私としては解釈しています。

——2点、今のお話の中で掘り下げたい点があって。一つはまず公的な事業を通した共生からすると、本来個別であるはずの共生につながるのが難しいとおっしゃられたと思うんですけども、それについて、もう少し詳しく聞きたいということ。また前田さんのように和歌山で人間と自然を切り離せない環境で育ったことが生き様につながっているとおっしゃられますが、石井さん自身がどのように共生を、生き方としてこれまで経験してきたのか。石井さんの共生の捉え方、個人のあり方を通して、さらに本事業に際しての考え方も浮かび上がると思いました。

石井 | 公的な事業では共生を考えづらくなる、とまでは思っていないのですが、公的な事業とアートとの関係性を考え抜きながらでないに進められないと思います。それぞれが自立して、それぞれの意思を貫こうとしながら、でも共に生きるというある種矛盾を抱えたような状況を社会や生活空間の中で表現を

の島でアート活動を展開する財団だったので新卒から5年半ほど、島やその周辺に住みました。「自然と人間を考える場所」をコンセプトとした美術施設での勤務もあり、島の草木溢れた自然の中に埋もれそうになりながら生きていた。業務の中で稲作の農作業も多少あったり、台風があれば野晒しの建物や作品を保護しなくてはいけない中で、人が自然と一体化したような、種の一部として生かされている感覚もありましたし、ある意味ではエゴイズム的に外から来た人がつくった物を、責任を持って様々な存在にとって良い形で存続させ続けるためには、ものすごい努力が必要だという感覚も得ました。おそらくその経験が前田さんのような自然観を持つアーティストや、東九条・崇仁で今起きているような地域の変化に向き合う人と共通する視点を持つにあたっても大事なところだったのかなと。東九条・崇仁ではまた別の視点で共生について考えてきました。生まれ育った環境もありつつ、その後選択したキャリアによって育てられた共生観もあると思います。

東九条・崇仁地域との関わり方

——共生について考えたうえで、次の話になります。まず対象としている地域の話から。東九条と崇仁地域にとっての共生の意味は、非常に様々なレベルがあると思います。自然環境で言えば、現在の再開発で変わっていく自然の変化があります。また東九条地区と崇仁地区の間でも、コミュニティ自体が違う文化的・歴史的背景を持って、線路を挟んで生活していて、そういった異なるコミュニティ間での共生もあるでしょう。さらに山本麻紀子さんのプロジェクトでも取り組まれているよ

うに、お年寄りなど世代を超えた人たちとの共生もあると思います。そこに、京都市立銅駝美術工芸高校（移転後は京都市立美術工芸高校に改称予定）と京都市立芸術大学が移転することがあって、コミュニティの外部から芸術を学ぶ若い学生を受け入れていくという意味での共生もあると思います。さらに行政が統制する再開発の中で、また違う企業なり、様々な事業者を受け入れていく。そこに駅から観光客が集まってくるように、外部の来訪者もいる。様々に異なる人たちが環境の中でどのように生きる場を創っていくのか、劇的に変化が起きていこうとする中で活動されていると思います。そのレイヤーがあまりにも多いので、それらすべてについて語るのは難しく、それぞれの要素が絡み合いながら、プロジェクトが進んでいる状況だと思います。まず、そういう複雑な状況について、どう捉えているのかを伺えますか。

石井 | その状況はもちろん把握しながらも、一方でそこに直接的に向き合い過ぎない事が大事だとも思っています。まず今年度の企画は、共生を考える手がかりとして、東九条・崇仁という地域の中での複数の実践に目を向けました。それ以前もこの地域で取り組みはしましよう、そこを含む場所で行いましょうかという投げかけをアーティストにしていたのですが、特に場所を強く限定していたわけではないんです。今年度の企画に関わったそれぞれの取り組みについて、例えば崇仁すくすくセンターは、無くなりゆくものや変化するもの、そして普段外にあまり出てこないような、まちづくりには関わっていない声の小さい人たち、特に高齢者への眼差しがある。また、人間には解明もコントロールもしきれない植物の命のベースと、対等に向き合う形での共生が生じていると思います。一方ではそれらを、山本さん個人と

通してつくり出した時に衝突や摩擦が生じることもあります。それをよしと受け入れながら、互いにどういう状況をつくっていけるかを真摯に考えていく。税金を使っているから、公的な事業であるからという理由で、その純粋性のようなものが妨げられる可能性が生じそうなことがある。これは共生に係る事業に限らない問題だと思うんですけども、大枠として行政の計画があり、それをHAPSのように自律して動いている団体が担う、という関係性のもとで行う事業である時に、尚更この関係性について考え抜きつつ、場合によっては表現を守らなくてはいけない状況があることを感じてきたのは正直なところですよ。

——ここを、最終的にどこまで深く考えられるのかが大きなポイントになるかと思っています。

石井 | そうですね。この事業の所管部署の京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化芸術企画課とここ数年間やっていく中で、人の入れ替えもありつつ、担当者レベルで行政側が変わっていくことも大いにある、理解をして下さっているようにも思います。一定の距離を取りつつ、縦割り行政の中で必要な調整を他部署と実施したり、情報を持ってきてもらう流れの中で、芸術側の論理に寄り添いながらやれることは増えています。逆にこちら役所の仕事の仕方を多少でも理解していないと進行できないですし、すり合わせながら継続することの強さだったり、プロセスを共有しながらやることで開かれていくものがあるとも感じています。

——芸術側に寄り添うという言葉がありましたが、いかに「芸術側」という言葉が捉えられるのか。おそらく一方でHAPSが考えている芸術観があり、他方で文化行政が考えている芸術観があり、そ

れぞれの芸術観が調整されていく中で、また違う芸術観が生まれていくまで、行政側も、文化芸術振興に対して、大きな目標がありつつも変化していく、そういったプロセスがあるのだろうと想像します。もう1点の質問として石井さん自身の個人的な共生観についても聞かせてください。

石井 | 家庭という「共生」に人生で最初に向き合うような場所の居心地があまり良くなく、生存を脅かされているように感じたこともありました。中高生の頃、あるガールズバンドに出会って、自分の居場所が彼女たちを通して出会ったコミュニティや、ライブハウスという場所、その前の路上になっていきました。ファンコミュニティはセクシュアリティも年齢も職業も多様で、その豊かさを楽しんで享受する雰囲気があって、年下として可愛がってもらいました。一方で、女性という性が表現を通して過剰に消費されることへの疑問を感じたりもしていた記憶があります。

それ以前からも文化芸術によるコミュニティとの出会いはあったのですが、そういうもので自分の人生が変わった実感が、おそらく共生事業に自分が関わっていく際の根幹にあると思います。生きたくない場所で共生せざるを得ないという状況と、親に愛される部分もありつつ自分なりに生きて選ぶとったコミュニティが、芸術に関わる豊かさを生じたもので、そこで生きやすい自分を見出して、社会の一端を知っていった経験がありました。

——異なる共生観を、それぞれがこれまで生きてきた中で、その共生のあり方自体も問い直しながら実践していくというのが、石井さんが取り組んでいる事業の大きな特徴だということを、まず前提にしておいたほうが良いですね。

石井 | 最初のキャリアが福武財団という瀬戸内海

しては大きく「巨人プロジェクト」という土地と人との関係性に関する物語と共に捉えることをしている。

高瀬川モニタリング部は人間というものを多様な種の一部と位置つけた上で、川をめぐる命の連環に焦点をあてて、それをどう表現するかを模索してきた。地域的観点で言うと、高瀬川の全域ですので、東九条・崇仁を含む6学区にまたがっています。人間が定めた「地域」という境界を認識して各々と関係を結びつつも、表現で示される様々な生き物の視点から、人間の制度的区分とは異なる川の見方を積極的に提示しているように感じます。地域固有性を考えるほど、その境界を融解するようなこうした動きも意義深く感じます。

「東九条 空の下写真展」は、東九条地域で長い間生きてきた方々が起点となって動いていて、先の2組とは始まり方が少し異なります。地域の大きな変化の中で、無くなったものや、無くなりゆくものも、自分たちが生きる場所をつくってきた歴史であることを再認識した上で、新しくやってくるものとどう共生できるかを表現を通して考えることをしてきた、と認識しています。写真展は特に「人間は古来からそういう営みを繰り返してきたのではないかと、広い時間的スケールの中から、人間の根源的な欲求としての表現活動のあり方を模索しようと活動してきた面もあります。また、ポストコロナルの観点でも向き合うべきことを多分に含んでいると感じます。

共生をめぐる複雑さや課題はありつつも私が大切だと思っているのは、芸術の持つ多元性が、ほかの世界を開いていくことにつながる、今自分が見ている世界のあり方を転換させる点だと思っています。共生という言葉に対するずれを持つ人たちが集まって、それぞれがやってきたことを共有しあったり、それぞれの共生のあり方を重ね合わせる。そういう機会をつくるのが一つ重要だと思っているんです。

先ほどの問いに少し繋げると、「これからアートと共生に関わる事業を始めます」と挨拶に行った際にある方から「お手並み拝見だ」というようなことを言われてぎょっとしたことがありました。急にやってきた担当者に何ができるのかという想いがあるのは当然ですが、その後話す中で、長い間取り組んでこられた社会的差別の解消を目指す運動の延長上に共生という言葉を見ていらっしゃるように思いました。おそらく京都市の計画に基づいた事業で、私が市職員と一緒に挨拶に行った姿勢も受けての言葉で、でも実際は、芸術実践を通してもっと広いレベルでの共生を考えたり、その方とは違うレイヤーでの共生を考えて表現し、共有していくということが起きている。

人間社会だけのレベルで言うと、行政対住民とか、崇仁対東九条、開発者対住民、差別者対被差別者とか、外国人対日本人だったり、どうしても課題を考えるにあたって二項対立的になりやすいときに、二者の間で割り切れない存在を想像することや、別の第三項を差し込むことはすごく重要だと思っています。それが、芸術実践なのかなと思うところもあつたりします。山本さんや前田さんのような外から来たアーティストが樹木や生き物のことを教えてください、と話したりする中で、対象物の事をお互い話しているんだけど、気付いたらその人の人生の話になっていたりもする。アーティストはアーティストなりの共生への想いを部分的には貫き、部分的には様々な存在との関係性の中で変容させながら表現していく。言葉を交わすだけでなく、そういうお互いがお互いの大事に思っていることを交換するような動きや表現を、多発的に生じさせてきたのが、ここ数年間だったと思います。アートコーディネーターとしては、アーティストと話し合いを重ねつつ、地域資源を共有したり一緒に関係性を開いたり…直接言葉を交わすのでは

ない関係性のあり方も考えました。

質問の意図に戻れるかわからないのですが、課題自体をどう乗り越えるかをアプローチ方法として直接的に考えてきたというよりは、もっと多元的で多様な価値観を示したり、共有しあうことによって、それぞれの芸術観や、それぞれの共生感を共有し育てていき合いながら、共生について考えてきたのかなと思います。そのことが直接的な政治とは異なるという面で重要だと私としては思っています。

——事業の狙いが見えてきました。多元的なその共生観なり、アート観、あるいは生き方観なりを、地域の中で共存させていく。そういった試みのために、アーティストと具体的に議論をしたり、調整していくことがあったと思うんですけども、そのプロセスについて、どれくらい理解やお互いの思いを進めましたか。アーティストとしても、地域の中で外から来て関わっていくことに対して、戸惑いや自分がふさわしいのかという疑問も抱えながら参加していくことになったと思うんですけども、そうした目標のすり合わせを石井さんはどういう形で行ったのでしょうか？

石井 | その思いと、その土地で活動することのすり合わせでしょうか？

——アーティスト自身がそこに入り込むっていうことを、最初は事業という形で促していき、山本さんの場合は結果的に生活の一部になっていくプロセスがあった。前田さんの場合も最初は事業の中で、プロジェクトという形で入り込みながら、その後、観察会を続けていく形になったと思うんですけども、あえて外から入ってくる。介入という言葉を使うならば、介入していきながら、その共

生のシステムの一部になっていく。生態的なメタファーで言うと、乱暴な言い方になりますが、いわば水槽のような環境に別の生物を入れて放し飼いにするということをしているわけですね。

石井 | この事業は、行政単位の、年度区切りという1年間の時間の制約をお伝えつつアーティストを招くという、ある種不自然でプレッシャーのかかる面をもつ難しい事業だった認識はあるんですね。また、今年度のタイトルに関連する話にもなりますが、アーティストにとって一生でそう多くないけれども、クライアントワークの中に、その人の人生と切実に引き合ってしまう土地との出会いがあることもずっと感じてきました。タイミングや予算など複合的な面があるけれども、例えば大島を拠点にしている山川冬樹さんや高橋伸行さん、豊島に恒久作品を制作したクリスチャン・ボルタンスキーなどです。また、もっとキャリアが浅い時に自分を受け入れられたと感じたり、アイデンティティやキャリア形成にとって大事な経験をした場所もそうなるのかもしれない。そういった場所と人の関係性はたとえ物理的に離れても保たれたまま心に残り、形を変えて関わりは続くと感じてきました。せっかくですから関わるアーティストにとっても大切に思える場所になればいいなと思いながら招聘を決めたり、動いてはきました。ただ、事業終了後もプロジェクトをアーティストが継続する難しさが次の課題としてあり、この企画ではその支援も考慮しました。

「東九条 空の下写真展」の立ち上げ

——それに対して2022年度の「東九条 空の下写

真展」について、どういうやり取りから、事業に発展していったのかお聞かせください。

石井 | 目の前の存在と向き合いながら共生社会について考えていこうとすると、結果的には地域社会と向き合っていくことにはなるのですが、そこに直接的にアプローチしてきたわけではありませんでした。ただ、東九条・崇仁地域との関わりの蓄積によって、幅広く共生という言葉を考えていく場所として、互いにとってよりよく豊かさや課題を交換し合えるのではないかという思いを少しずつ持てるようになっていき、その延長上で今年の企画があります。

ただ、東九条や崇仁は、歴史的に社会的課題を抱えてきた地域でもあり、行政の政策によって分断が生じた歴史もある。そういう地域に行政の計画のもと共生という名前を掲げた事業を持って行って、一定の事業成果をあげようとしている。この構図は、一步間違えると暴力的な面もあると思っているんですね。その構造自体を受け入れながらもどう上から行かないか?や、アプローチの仕方に悩んできましたし、その悩みを大事にしてきました。私が HAPS へ入職する前の2017年度から、HAPS の東九条地域との関わりが始まりましたが、きっかけは京都市が、地域住民や団体、企業、芸術家などが協働して策定したとされる「京都駅東南部エリア活性化方針」のもと、京都市の総合企画局で立案された1年間のプロジェクトの担い手となったことでした。計画には「まちづくりに『文化芸術』という新たな視点を取り入れることにより、『若者』を中心とした新たな人の流れを生み出し、エリアの課題でもある人口減少や高齢化の進展に歯止めを掛ける…」とあります。推進の過程で「既にこの地域に文化や芸術はあるのに、なぜそのような

計画が外から連れてきた芸術関係者やアーティストありきで動こうとしているのか」という思いを抱えた方はいたようですし、関わり始めは地域で生きてきた方との摩擦が生じた面もあったようです。現場での実践者である HAPS 事務局としてはその土地の文化を見つめながら、組織として息の長い関わりをしていく覚悟を持っていたと聞いていますし、その延長上で事業外においても私以外の職員も今も地域の方々と関わりを持っています。並行して共生社会事業が始まり、日常的な関わり合いやプロジェクトを通して地域の方々と関係性を形成しつつ、崇仁などへ地域を広げながらアーティストを毎年招聘してプロジェクトを行う流れが2021年度まで数年ありました。崇仁地域と現在のように関わるようになったきっかけは、東九条地域でプロジェクトを行った高齢者福祉施設「東九条のぞみの園」の施設長が、同じ運営母体の施設がある「崇仁でもぜひ」とお声がけくださったことがきっかけでしたし、両地域、それから地域外についても一緒に事業を行いたいと言ってくださる方も出てきて、意義を感じてくださる方との日常的な関わりも増えていきました。

今年度の企画では、芸術の名のもとに生活が大きく変わる人もいる地域で、アートと共生というものを掲げて権力と共に入っていくようにも見える構図自体を、もう一步踏み込んで切り崩せないかと模索する中で立てた面もあります。自分自身が地域の文化性みたいなものをすごく細かいレベルで体感しながら、数年間の関わりを経て顔を見て本音で話せる人が増えてきた中で、やっとできたことかなと思います。

ある土地について書籍や資料で事前の学習はしますが、実際は些細な日常会話から感じること、

知ること、肌感覚で得る事が多いです。例えばご飯を食べながら日本の加害の歴史について話をしたり、書物に残っていない地域の結婚式の習わしについて教えてもらう。そういう日常的な関わり合いの蓄積によって地域の輪郭を知っていける関係性になり、それは誰にも言わなくても、私の振る舞いを通してプロジェクトを推進する際に見えないレベルで織り込まれていく。互いにとって良い面もありつつ、一方では人の生を搾取したり、素材として芸術にしていくということと表裏一体だとも感じています。

そういう中で「こういうことを今したいと思っている」という話を聞くこともだんだん増えてきた。この提案はすごく公的にも意味があるアートプロジェクトとして形になりそうだなと思ったとしても、年度の途中でぽっと出てきてはタイミングを逃すこともあって、この事業として推進する余地が無い状況でした。アーティストのプロジェクトに織り込んでいくよりは、その提案者が自分たちでやっていく方がいいんじゃないかと思うことが増えてきたんですね。それを手助けすることが必要だと思ってきました。

また、これは様々な関わり合いのごく一面ではありますが、アートコーディネーターの困難さや責任にもつながる話として、アーティストがやりたいと言ったプロジェクトを地域の人たちに説明するにあたって、何か一緒にしたいという人がいる一方で、あまりに日常生活との飛躍がありすぎて、話すだけでも相手の人を一時的に困惑させているかもしれないと思う事もあったりしました。「難しいかもしれない」という状況も含めてアーティストに伝えるけれども「それでもやりたい」ということはある。相手の方と直接話すこともあれば、すでに関係性のある私のような存在をワンクッション挟んで話すこともあります。理解不可能な飛躍性は、芸術の可能性だ

けれども、言葉で事前に説明することがとても難しかったりもする。これをやるのがおそらく豊かさにつながるだろう、推進するならばやりきろうという信念を持ってやってはいますが。企画を、どこかアーティストの論理に寄った設定にしていると自覚する面もある中で、地域に関わってきた人々側から、彼らしか見えていない論理で湧き起こってくる声があったのでこれを素直に形にしていけることが、自然な流れではないか、と思うようになっていきました。「公的に支援をしますよ」とか「相談に乗りますよ」とこちらが言うことはやや権力的であるし、業務外で私が出掛けていって、個人と率直に対等な関係を結ぼうとした時間の中で自然にこぼれてくる言葉のほうが多くあります。まずそういうところで私的に得たものを時に公的な事業に引き上げる、公的な事業の枠組みや立場を用いて形にしていけるという企画の作り方ができないかなと思いました。特に地域に対してこれまで教えて頂いたものを返すような感覚と言いますか、(文化人類学的観点での)贈与交換や創造性の循環をお金を介さない形でどう形成できるか、招聘アーティストを介さない形で直接的に考えるようになっていたし、それを現実的にも実現できる関係性になっていたタイミングでした。

また、この地域に限らず多様な人が関わる実践の豊かさや難しさを感じていたので、次の段階として、協働のあり方を表現と捉えて見ることも「共生」を考えるにあたって重要だと思いました。事業終了後に企画を継続するアーティストも複数名での体制にしていたし、今年は複数名での実践に焦点をあてることにしました。

公的な支援が難しい場合、人として本当に必要だと判断した事は、もう私の個人の時間を使って

でもやろうぐらいに考えて関わってるんですけど、でもこれは、一步間違うと担当者である私が、私にとって都合のいい人間に便宜を図ることにつながりかねないという認識はあります。そうならないよう、公的な組織として選択の指標を設けることも企画に含めています。対外的には非公開ではあるんですけど、レーダーチャートをつくって、公的に意味があるとか、色々な指標を設けた上で協働する方々を決めている。プロジェクトを進行する中で当初とずれることはよくあるんですけども、都度状況は各団体に確認しつつ、極端な崩れ方をした場合は支援のありようを考え直す、という企画の仕組みにしていきました。

企画を立てる時にすごく悩んだのは、これもずっと悩んでいるんですけど、私一人が担当である以上、私の事が嫌いな人は参加できない仕組みにはなってないか、ということです。人が動かしている仕事である以上は属人性が生じる。予算的にも私以上に人を多くつけることはできないから、私自身は誰かを排除することはせずに多様な価値観を受け入れて、できるだけオープンマインドでいようというところで割り切って進める事にはしました。今この地域の変わり目で、あと数年が過渡期の中でやり抜くことが重要ではないか…と感じます。

結局、私のような公的な事業の担当者に関わりたと思う方は、飲食店をやっていたり、民生委員やお祭りに関わっているなど一部です。でも地域の見えないハブのようなものになっている人が多いので、彼らと協働することは私が直接的にはつながってこなかった人たちに芸術を届けたり、直接的ではない形で協働する形に結果的にはなっていくだろうと思います。一方で、ときに長期間の複数名での「協働」というのは偏りと閉塞感を生みやすいので、その点は今後気にしていきたいと思います。

そういうことを考えることと並行して写真展の話聞くようになっていったというのが、大きな流れではあります。ただ、これはまずアーティストをメインとしたモデル事業を数年やってみて、彼らの尽力もあり生み出されたものがあつた。他にも実践を重ねているアーティストもいますし、そこから触発されて動き方を模索したり、自分だったらこうするとか、一緒にもっとこうできるんじゃないかとか、それ以前から地域にいた方々のそういう動きも生じていって段々と段階的に成り立っていったと思います。

HAPS 内部の合意形成

——これまでの話だと、外部との付き合い方を聞いてきたと思うんですけど、HAPS 内部での関係性や仕事のあり方とか、事業計画を立てていくなど、そういった部分での働き方、あるいはほかのスタッフとのコミュニケーションも含めて、どのような合意形成がなされているのでしょうか。

石井 | HAPS 事務局では週に1回、忙しい時も時間を割いて業務を共有する定例会議が有るんですね。数時間かかってしまうんですけど、業務上の悩みや気づきを共有し合う場があるので、その時間の積み重ねがあつたからこそこの企画も自然に受け入れられていったように思います。普段ナラティブで共有することが多いからこそ、そこに寄っていき過ぎないようにするために、数字で客観的な指標をあえて設けて、両方の側面からプロジェクトを捉えるようにしています。

また、芸術分野において審査の基準があまり明確でないまま、落とされたり、受かったりというよう

なことも続いている。ブラックボックスを開く動きも少しずつ起き始めていますし、本当はこの企画でもオープンにしていきたいのですが、数値の指標と例えば私が書いている日記のような情緒的で数値化できない理由も相互に作用しあっているものだから、片方だけ公開するのは足りていないのではという声もあり、上から目線の審査に見えるのも企画意図からずれるので公開はしないことにしました。ただそれを内部で共有しながら進められているのは、この事業に限らず、担当者一人の意向により過ぎない意味では大事なかなと思います。

——公開に関して難しいところがあるにせよ、内部的に基準を担保しておくことは重要です、それが問われた時にちゃんと応えられるようにしておく体制づくりは大事なことだと思います。

業務時間と個人の活動時間とを切り分けることが、地域で活動する場合に難しくなると思います。また業務内での付き合いとそれ以外での付き合いで、その権力性っていうか、関係性の不均衡が出てくる難しさもあると思います。そうした難しさはなかなか解決できないものだと思いますけれども、それをどのように考えていますか。

石井 | そうですね。まずHAPSは、自治体による負担金をほぼ100%に近いぐらい使用している。そういう意味でも公的な面が強くありつつも、一般社団法人として自律性もあって、官民の両方の立場のあわいの部分を良い意味で利用しながら行ったり来たりしつつやってきた組織だと思うんですね。公共事業とか公の視点でこそ出来ることは大いにある、そこには公平性が求められると思うんですけど、一方で選択して限定的にやることも事業では生じますし、選ぶ理由も行政の論理とは

違うところにあつたりします。その両方が大事であることをよく理解している組織なので、組織でアートをやる形態の中ではとても働きやすい方だと私としては認識しています。

一方で、業務時間内での出来事にどの程度報告の義務が生じるかという問題で、例えば相手との関係性の中で出てくる言葉を、組織的に共有しても良いのかは常に悩みます。基本的には相手に許可をとりますが、個人性や親密性は、人と人が関わり合うときにすごく重要な部分でもあつたりするので悩ましいところです。個人的な関わりというのは時に癒着も起こしてしまうので「ちょっとこれ食べて行くか?」とおにぎりを渡されることなんか、どこまで受け取っていいのかという悩みなんかはずっと抱えてきました。ですから、個人として切り離れた方が良い部分もあると判断したところは、宣言してそうしている。でも、私がHAPSの職員であることは業務時間外でも完全には断ち切れないという意識で動いてはいます。

また、芸術という正解がなく個人の価値観をある程度貫いて成立するものを、組織で取り組む時の意思決定のあり方の難しさは常に感じていますし、これもまた協働や共生を考えるにあたっては興味深いと思います。

変わりつつある土地に どんな写真を公開していくか?

——結論が出ない部分ではあると思うんですけども、根本的にこういう難しさがあること自体は、現場に関わる人たちの一つの特徴として、共有しておくべき課題であるんじゃないかと思います。

「東九条 空の下写真展」に戻りましょう。写真展が実際にHAPSの事業と関わりをもって進んでいく中でどういうことが起きていったのでしょうか？

石井 | タイトルに絡めて話すと、継続的にその土地でプロジェクトを行いたいアーティストがいる一方で、住民や、この地域に長く関わってきた人の存在がある。例えば、高齢者と長年関わってきた立場として、地域の過去の歴史が様々な変化によってウォッシュされてしまうことを危惧しつつ、芸術関係者や学生とどう共生できるかを一生懸命考えていらっしゃる方がいます。その根底には、この地域で働き始めてから、たくさんのつながりを得ながら地域の人に地域のことを教えてもらうなどの経験があったのかなと、お話をする中で感じる方もいます。またある方は、大学生の頃から福祉の担い手としてこの地域に関わり始めて数十年ほどで、現在は地域に住んでいます。言葉では簡単にはまとめきれないですけども共通して、自分なりの立場や視点でこの地域に関わっていること、そして努力や様々な経験や関わり合いによって培われてきた土地への愛着や、未来に向けて、引き受けた何か責任のようなものがあるように感じます。こういった動きは様々な人から感じてきましたし、私自身が感じ始めたことでもありました。アーティストが感じている部分もあると思います。

写真展は外から来る大きな力、チームラボを代表とする事業組合や京都市立芸術大学などはもちろん意識しつつ、そういったここで生きてきた人の想いが折り重なって生じていった面があると思います。この場所に関わってきた人たちの土地への想いや切実さと共に、公共的な実践としてやりたい、という言葉をごちらに放ってくれた。これを成り立たせるためにHAPSとしてできることをすべきではない

かと思っていき、この事業としての関わり方を模索し始めました。

写真を集めることが大事であり難しいことでもあると思うのですが、古い写真については、主に地域福祉の担い手など日常的に地域の高齢者の方と接している人や団体が窓口になっていて、顔の見える関係性の中でこそ預かることができているように思います。また、これまで地域に関わってきた方々が主導で行ってきた聞き取りは、ここ数年は十分に出来ていない。「今記録していかないと、ここで生きてきた人の記憶が消えてしまう。今だからこそ聞ける話があるんじゃないか。そういうものがこの地域にとって大事なんじゃないか」と考えてきた方々も関わっている。単発的に展示をして終わりではなく、写真を入り口としながら、地域の歴史や記憶を再度見直していくようにアーカイブをここで生きてきた人々でつくり、共有し合おうとしていて、それを重要だと考える人が熱量をもって関わっていることが非常に大きいかと思います。そういうものが根底にありつつ、対外的な展示が並行して動いている感じなんですね。当初は、展示をしたい思いを強く持ったところから始まった動きで、報告会にも登壇されたやんそるさんが発案者であり推進や実務面のエンジンとなっていると思います。

また、東九条と崇仁をつなぐ須原通り沿いには、京都市立芸術大学が移転して、チームラボのアートミュージアムが建設される。公園に再整備されたり、今後再整備が始まる予定の空き地もあります。並行して走る高瀬川沿いの遊歩道を整備するために、川沿いの木は切られる。そうした芸大移転後の大きな動きが2019年、2020年ぐらいから計画として、京都市から公開され始めていました。以前に行政が

らの投げかけで住民を交えたまちづくりワークショップが何度かなされましたが、そこで出た言葉があまり反映されていないように見えたことで、このまちはどうなっていくのかという地域に関わる一部の方々からの疑問や危機感が、これまで以上に生じていたというのがまずあったように思います。そこから派生する形でやんそるさんが中心となって、高瀬川に関わり地域を見つめ直していこうと月一回の清掃が始まったのですが、その活動にアーティストや生き物に関心がある人など、様々な価値観や立場の人が関わっていく。そういう動きの中で、写真展の構想が起こっていった。

まとめると、まちの大きな変化の兆しに反応する形での流れがまずあった。そこに、先ほど伝えたような長年アーカイブへの意識を持っていた人の想いや、それからこの地域に自分なりに関わってきた様々な立場の想いが合流する形で、「東九条 空の下写真展」が生成していった、というのが私が把握する限りの大きな流れのように思います（注：それより以前の歴史も含めた流れは、やんそるさんが報告会で報告された）。そこでHAPSは、芸術実践の技術をもっている立場としてやれることをやった、という感じでしょうか。主に実施したのはマネジメント面での下支えです。

4月に行った写真展は、過去も現在のものもバラバラに展示する。写真家が撮ったものも、名もなき人が撮ったものも同じ大きさで同じように印刷して、身近なラミネートという形式で。再開発される土地を取り囲むフェンスに展示しています。キャプションも撮影したクレジットもつけず、優劣を付けずに多様な視点が時間を超えて混じり合う。共通しているのは、ある時点では東九条にいて、地域を見ていたということです。その視点が写真を通して、

この道を通る誰にも跳ね返ってくるような、路上の公共空間での展示構成になっていたかと思えます。そういった風景や公共性への介入が、場所選びの根底にはあると私自身は解釈をしています。

今、自問自答しながら話をしていますが、語る上で難しいのは、写真展の関係者は協力団体一覧にあるように非常に多様です。京都市との関わり方、再開発に対する考え方や姿勢が異なる中で協働している。写真展を説明する際に「人の営みを未来に向けて路上で再共有したい」というニュートラルなコンセプトは伝えますが、そこに至る思いの対外的な語り方は迷います。関わる人が、この取り組みが一つの価値観に収束されないように心がけてきたことが大きな特徴とも感じるからです。これは、東九条マダンといういまや文化の一つとなっているお祭りの成り立ちや運営方法と重なっていると感じます。一つの価値観により過ぎることなく、ただ関わっている人たちが納得するまで合議的に話し合うという、その物のつくり方自体が、一つの文化として東九条にあるので、それが根底にある形で成り立ってきた写真展と認識しているところです。ですから以上は、あくまでも私の認識です。

——ものづくりするための合議的な在り方というのも、大きく言うと、共生と関わってくるかもしれないと思うんですけども、これまでお話し頂いたある種の行政主導のまちづくりが一方であるなかで、住民主体の合議のあり方で、どういうやり取りがあったかをさらに聞かせてもらえますか。

石井 | 希望の家という1950年代から東九条での地域福祉を担っている運営母体に対して、地域の人が長年にわたって預けてきた数十年前の写真が

非常に多いのですが、撮影者と被写体が今どこに居るかわからず、多くが亡くなっている状況で、誰が責任を持ち、それを公開する決定ができるか?その意志を発する人がもはやいない、許可がとれない状況での決定には時間がかかりました。法を確認し、他の写真展の事例を参照したり、京都市立芸術大学 芸術資源研究センターの佐藤知久さんが京都市立芸術大学で写真募集をするルールを整えるのに弁護士と話したことを共有いただいたり。最終的には、まず展示に撮影禁止ルールを設けて複製不可能とした上で、自分たちで配慮をしつつ写真を選び、もし不快に思う当事者が出てきたら丁寧に謝って都度修正していくやり方しか、もはや無いのではないかという結論に至った。どの写真を出すか、出さないか?の議論は最後まで続きました。例えば、事実であっても昔のバラックが立ち並んでいる風景を地域の中で展示した時に「昔の悪いイメージを、いまあえてなぜ公開するのか?」と、ここで生きてきた人が感じる可能性もある。様々な状況を想像し合いながら、今回は初めての試みですから公開へ疑問の声があがる可能性がありそのような写真は展示しませんでした。この地域で暮らしてきた方を中心に、社会学者や、仕事でアーカイブを構築している人などを含めた色々な立場の人が参加したことも大きかったです。

こうした会議に立ち会いつつ、私の方では写真選択よりも将来的にこういった状況を回避していくことを見据えた写真募集用紙の作成に参加したり、チラシづくりやデザイナーとの調整など、展示を形にしていく際に担った面が大きかったと思います。また、例えば東九条の都市研究をしてきた若手研究者と住民は、写真から撮影年代や場所を特定する作業をしていました。地域と関わって作品制作をしてきた写真家が展示風景の記録写真を撮影したり…その

ような水平関係での協働が多発していました。

聞き取りについては、特にこの地域に長く住んできた人が状況を共有しあって役割分担しつつ「この人の聞き取りはこの日にアレンジしたから、誰か一緒に行きましょう」など、それぞれができる時間で関わっていくやり方で進めていることも、持続可能性を考えた時に大事かと思えます。

全てにおいて法的な肖像権、所有権・著作権などの問題だけで語りきれない地域固有の事情を、どのように地域の中で考えていくかが難しかったですし、外側から来た団体では到底できなかった企画です。HAPSからは活動資金の部分的な支援と労働力の提供を行って、特にマネジメント面での下支えをしましたが、「支援」という言い方をあまりしたくないのは、プロセスの中で私やHAPSが得たものも大いにあるからです。お互いに得るものがあり、協働している認識です。

——アーカイブだと著作権者が分からなくなってしまった資料のことを孤児著作物と言ったりしますよね。利活用や利便性を優先した法整備の動きが現在ありますが、他方で、それぞれの地域固有で抱えている場所への思いを公開するのか秘匿するのかを考えていく中で、活発な議論が行われ、派生する活動や決定が生まれてくる。そのプロセスが非常に重要でもあるし、それがある種の合議的なあり方や、土地に対する民主的な議論や地域固有のコモンズを立ち上げていくプロセスにもなっている。

子どもの意志を傾聴しながら
さらなる交流を促す

石井 | 写真展開催時に、地域の多様な属性が交わりあう機会をつくれたらと関連イベントとして子ども向けワークショップの話が出てきました。それを単体で丁寧に実施することになり、写真家で在日コリアンの金サジさんをお招きすることにし、6月頃から児童館とすりあわせていきました。写真を用いて子どもたちがなりたいたと思った自分を身体的に表現する、それを大人が手助けする。なりたいたと思う自分を形づくっていく経験をしてほしいと、素案は金サジさんがつくりました。地域の歴史や文化を伝えるように表現していく写真展とはまた別の流れとして、過去の歴史を受けて、新しく来たアーティストと表現を通して一緒にこれからの未来をつくっていくことを行う。東九条 空の下写真展実行委員会の2つ目の柱ができたようにも思います。

表現と共に最も考慮したのが子どもの肖像権の問題でした。この周辺の地域で生きてきたことを対外的に示すはまだ差別を受けることもある社会において、判断能力が育ちきっていない子どもとどうプロジェクトを行うかの話し合いに時間がかかりました。実行委員や金サジさんは「顔を出す必要はない」と話をしていて。仮面をつくって顔は隠す方向にしたらどうか、マダン劇や仮面劇を引用する形にもなるのではと伝えたところ、児童館側からは「児童館の建物内のみでの展示であれば、屋外の写真展とは違い来館者がある程度限定される。顔をオープンにしたい子どももいるだろうし、希望を聞いたらどうか」と提案されました。話し合いの末、展示は保護者も含めて撮影禁止というルールを設けました。来館者の区別が、常駐するスタッフでは判断しきれない場合もあるためです。展示写真は子どもたちに現物を贈ることにしました。その上で、児童館側の意向と子ども本人と保護者の意向をすり合わせる必要があるのも、具体的に言うと、申込

用紙に写真の公開範囲を明記した上で参加の仕方を選んでもらうようにしました。ワークショップ当日はスタッフが子ども本人へ顔を出したいかを必ず確認し、展示設営の時も確認して、細かく合意形成を取って成り立たせていきました。事前にスタッフ向け説明会をして、子ども対応に関する話し合いもしました。面白がって仮面をつくる子どもが多かったです。また、実行委員会が展示風景やワークショップのプロセスの記録を将来的には対外的に発信することも考え、その使用可否や範囲も申込時に確認し、様々なレベルをつくって個別対応していきました。

児童館の先生方からは「そこを丁寧にしてくれたから、信頼して一緒にできました」と言われました。HAPSとして培ってきた技術を共有し、事務局内で許諾書のチェックも行いました。それが写真展チーム全体にも、児童館にも共有されていったこと自体が、今後住民や地域で活動してきた人たちが主体的にプログラムを行っていくにあたっては重要だったかなと思います。

子どもの要望を受け取って一緒に形にしていくことは、傾聴力も必要なクリエイティブなことなので、金サジさんが写真作品として撮影する際の子どもへの投げかけや、衣装づくりを手伝うアーティストの対応を見て、住民の方からの「アーティストはすごい」という声も聞きました。様々な交流が各所で行われていたと思います。最終的には子どもから、来年もまたやりたいという声もありました。金サジさん自身が東九条地域と関わりを持ちたいと考えていたことも知っていましたし、在日コリアンとして、そしてコリアン・ディアスポラとして幼少期から自身のアイデンティティについて思い悩んだり考えることが多かった彼女が、多様な背景を持つ子どもたちとこういう企画と一緒にやったらどうかと投げかけ

てくださったことは、大きなことでした。

結果的にアーティストを招いた形にはなりましたが、これは写真展実行委員で話しあって、この次の流れをつくるにあたっては、金サジさんというアーティストがいいのではという意見があり、報酬を話し合っただけで設定し、お招きした流れになります。そこはHAPSがアーティストを決めて招く構造とはまた違うかなと思います。

若者支援という HAPS の掲げる 事業目標に向けたプロセスの変化

——さらに空きスペースを活用するのに、芸大生が関わっているような場づくりを行っていたとも聞きました。HAPSの事業とは違う形で進んでいったんでしょうか。

石井 | そうですね。こういった活動を通して日常的に関わっているの、話を聞いたり、質問があれば答えますが、大きな流れとしてはやんそるさんが個人的に物件を借りて、そこをアーティストや地域の文化活動を発表する場として活用できないかと模索していた。その後、特に京都市立芸術大学の元教員である井上明彦さんが主導する形で改装がなされて、これまで彼女と関わりのあったアーティスト、写真展を通じて出会ったアーティストも手伝い、現在はオルタナティブスペースとして活用されている、という流れです。やんそるさんは今や2つのアートスペースのオーナーでもあるので、アーティストなり、学生が発表する場を自分なりにお持ちになって、これから関わり方を考えている状況かなと思います。

——面白いことが起きてるなという気がして。ある意味で言うと、HAPSの使命として、場づくりをして若手のアーティスト支援を掲げていますが、写真展に関わることによって、今度は写真展の企画側がむしろ若者と一緒に場づくりをして、場自体を自ら運営するような主体にもなっている。

石井 | おっしゃる通りです。ただし補足をすると、地域の方々による場づくりは写真展の枠組みだけでは語れないですし、個人的にされている面もあります。以前から行われてきた様々な文化活動や個別的なアーティストとの関わりなどもあって、その延長上での写真展でもあり、やんそるさんについてはスペースの設立かなど。写真展は、個人を起点とした動きがより公共性を帯びるよう横で動けたことが、HAPSなり私が居る役割として、多少できたことかなと思います。また、金サジさんと展示を行った希望の家（京都市地域・多文化交流ネットワークサロン）が、最近は芸術家の展示の場としても使われている。細かいことですが、図面や貸し出し展示備品リストと一緒に整えようかと話しています。

——HAPSのももとの役割は、若手芸術家の居住制作発表の場づくりとなっていますが、HAPSが直接的に協働する対象が、もはや必ずしも若者ではなくなっているってような感じもあって、だけれども、結果的に大学が移転することも含めて、若者の場づくりをむしろHAPS外の地域の人と一緒にしている形に、徐々に変化しているのかなと思います。

石井 | そうですね。設立から約10年経っているので、当初若手だった人が中堅になり、中堅は中堅での課題がありますし、突然支援の手を引くこ

ともあり得ないので。自ずと向き合う対象が増えていの中で、若手という最近はこの地域が入り口になっている部分もあるかなと思います。他の職員の業務では、スタジオ運営や物件マッチングなど物理的な場づくり支援も勿論継続していますし、複合的に芸術家の力が循環するような環境づくりができればと思います。

今後に向けて

——結果的に今後どういう場ができてくるのか、興味深く思います。最後に、見えてきた課題をどう次年度につなげていくか。それと年度ごとの事業をまとめる、あるいはリサーチもしくは報告書という形にする、その中での石井さん自身の動き方について、お話していただければと思います。

石井 | 事業の推進者である石井の姿が対外的に見えづらい状況にあるのではないかと話もあり、おそらく責任の所在を示す観点でも屋号を設けたらどうかとHAPS代表の遠藤からの提案もあったりしているのですが、まずはWeb上でまとめた形で発信ができていない点を解消したく、リニューアルを進めています。アーティストや芸術実践に関わる人がやるべきだと思っていることがストレートにできる環境をつくり維持しながら、こういった実践をいかに社会的に成り立たせていけるかを、継続の観点でこれからさらに考えていかなくてはと思っています。報告書に掲載する記録や調査も、多様な価値やアーティストが生じさせている多元性を、文字として対外的に表す一助となればいいなと思います。

別の動きも色々進行していますが、報告会の

会場となった喫茶アミーの方々は、報告会に立ち会ったことによってよりエンジンがかかったというか、やらなくてはいけない、という思いになったみたいです。アーティストや地域外の人との関わりなどに触発されて動いていく部分もすごく大きいと思うので、やっぱりその両方の動きが大事かなと思いつつ次年度を計画しているところです。

行政主導でマスタープランをつくって、場づくりをするのではなく、まずアーティストが介入する形で生じた多様な共生のあり方が、様々な触発を引き起こす中で、これまですでにあった文化芸術活動が刺激されて変化していく。そうした意識の変化や新しく生まれたアイデアを汲み取りながら、HAPS自身も変化しつつ次の事業の形を、協働で育む方法を模索し続ける姿が見えてくる。

現在進められている新しいコモンズとなる場づくりの目標は、より大きな状況を推進する風に吹き飛ばされそうになりながらも、とても繊細な機微で、土地とのこれまでの関係性を踏みしめつつ、また新たなあり方に向けて共に歩み出そうとしているのだろう。そうした状況が、こうして言語化される中に垣間見える。

2023年秋から、大学の移転がなされることも含めて、大きな変化が待ち受けていることは確かである。今後、活動の継続性がどのように保たれていくのか、あるいは継続しなかったとしても、それを事後的に振り返ってみた時に、歴史としてどう記憶されていくのかという部分でも、非常に重要な時期でもある。HAPSのアートコーディネーターの視点から、アーティストと地域とそれと協働する組織の共生や共進化のプロセスの断面の記録として、本聞き取りが将来の一助になることを願う。

継続調査

文化芸術による共生者化社会実現に向けた基盤づくり事業では、その名の通り試行事業としてのモデル事業における活動状況や事業年度終了後の展開について、アーティストやアートコーディネーター等、事業に関わった人々への聞き取りをもとにした専門家による継続調査を掲載しています。今年度は、2020年度以降に実施した以下のモデル事業の、その後の展開を追ったレポートをご覧ください。

2020年度モデル事業

谷本研+中村裕太

タイトルとホコラとツーリズム season8《七条河原じゃり風流》継続調査報告2

節目の年の振り返りと新たな第一歩 文|高嶋慈

2020年度モデル事業

山本麻紀子 3つのプログラム 継続調査報告2

こちらとあちらを繋ぐもの、あるいは巨人と植物 文|宇佐美達朗

2021年度モデル事業

(招聘アーティスト|前田耕平)

継続調査報告

高瀬川での生き物観察が生み出す新たな生態系 文|続木梨愛

2020年度モデル事業 谷本研+中村裕太
タイトルとホコラとツーリズム season8《七条河原じゃり風流》継続調査報告2

節目の年の振り返りと新たな第一歩

文 | 高嶋慈



【図1】タイトルとホコラとツーリズム season8《七条河原じゃり風流》2021年 撮影 | 麥生田兵吾

本稿は、2019～2020年度に崇仁地区にて実施された「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」モデル事業の2つのプロジェクトのうち、谷本研+中村裕太による「タイトルとホコラとツーリズム season8《七条河原じゃり風流》」の継続調査である。本プロジェクトの経緯や詳細については、2020年度報告書、特に本モデル事業にリサーチャーとして関わった中村優花による報告書でまとめられている。

一方、本稿では、視点のスパンを長く設定し、谷本と中村がユニットを結成した2014年から、10回目という節目の年に集大成的な展示を行なった2022年までを視野に入れ、彼らの約10年にわたる表現活動の流れの中で崇仁のプロジェクトがもつ意味を考察する。また、崇仁のプロジェクト終了から時間が経つ中で、別の地域だが「地蔵ホコラ」のリサーチを介して地域の課題とアートが結び付く可能性が出てきたことについてもふれる。

はじめに、谷本と中村の活動の概要を簡単に振り返っておく。谷本研は、観光ペナントの収集家という顔もち、マンガやデザインも手がける。中村裕太は、〈民俗と建築にまつわる工芸〉という視点からタイルや陶磁器の研究と制作を行なう。2人の美術家は、京都市内に点在する「タイル張りの土台をもち、地藏尊をはじめ大日如来や観音菩薩、道祖神などをまつるホコラ」の研究者を出発点に、ゆるやかなユニット「タイルとホコラとツーリズム」として活動してきた。路上観察、土着信仰、巡礼、ツーリズム（観光）と消費、労働、祝祭などをキーワードとしてリサーチ対象を拡大。「タイルとホコラとツーリズム season4 《一路漫風!》」（2017年）では、対馬・沖縄・台湾・濟州島をめぐって東シナ海に分布するホコラと土着信仰に着目し、「タイルとホコラとツーリズム 番外編《父をたずねてやんばーる》」（2019年）と「タイルとホコラとツーリズム season7 《ムイカーヌシーのクイコイ、ウンガミ様》」（2019年）では沖縄に焦点を当て、「タイルとホコラとツーリズム season6 《もうひとつの広島》」（2019年）では明治期に広島から北海道へ入植した移住の歴史に目を向けるなど、近年は各地へ飛び出していたが、本プロジェクトでは再び京都市内のホコラに目を向けることになった。展示ではなく購入者への作品郵送という形をとった「タイルとホコラとツーリズム season9 《ただいま! 玉手箱》」（2021年）を経て、成安造形大学でのグループ展「みちとゆくえ|うつろいのしかた」（2022年）では「タイルとホコラとツーリズム season10 《マンマンダラダラマンダラ》」を発表。彼ら自身の足跡を振り返る集大成として、約9年間の制作物で会場を埋め尽くした。筆者は美術批評家として、2014年の第1回展からほぼ継続的に彼らの活動を興味深く見てきた^{※1}。本稿の執筆にあたり、本モデル事業アートコーディネーターの石井絢子の同席のもと、谷本と中

村両名へのヒアリングを行なった。

「タイルとホコラとツーリズム season8 《七条河原じゃり風流》」の概要

京都市立芸術大学の移転、市営住宅の老朽化、住民の高齢化に伴い、再開発によって更地が出現していく崇仁地区。谷本と中村は、明治期に柳原尋常小学校（崇仁小学校の前身）が建設される際、地域住民が一体となり、鴨川の河原の土砂を運んで建設用地を整備した「砂持ち」に注目した。地域の埋もれた歴史と、現在進行形の地域の変貌をリンクさせる仕掛けとして谷本と中村が行なったのが、「砂持ち」の解釈と再演である。鴨川の河原で拾った石をリヤカーに乗せて運び、崇仁地区の市営住宅内の砂場を借りて、着色した石でお地藏さまのモザイク画を描いた [図1]。このモザイク画を、かわら版を刷るための「版」に見立て、リサーチ成果を新聞として地域の全戸に配布した（2021年2月28日～3月20日までの毎週末に計4号を発行。また、6月13日に「号外」を発行した）。さらに、市営住宅の上階から撮影したモザイク画の写真を大きく引き伸ばし、地域を見守るように、京都市下京いきいき市民活動センターの外壁に掲げた [図2]。

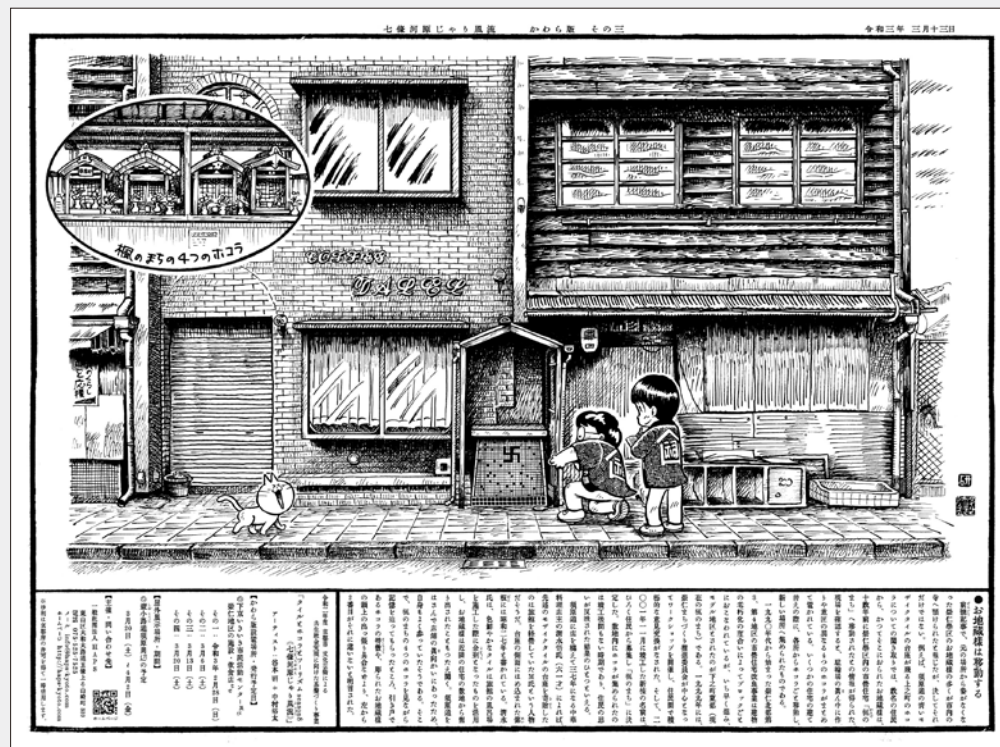
もう一つのポイントが、芸大建設予定地や周辺の市営住宅の建設・建て替えに伴い、土台だけが残る「空きホコラ」や、地域内の一箇所に集約したり寺社へ移動されて路傍から姿を消した地藏尊の存在である [図3]。住民への聞き取りや現場を歩いたリサーチ成果は、谷本のイラストによる「砂持ち」の紹介や制作プロセスの記録とともに、上述のかわら版の紙面にまとめられ、地域へ還元された [図4]。



[図2] 撮影 | 表恒匡



[図3] 崇仁地区の空きホコラ 撮影 | 谷本研



[図4] タイルとホコラとツーリズム season8 《七条河原じゃり風流》かわら版 その三「お地藏様は移動する」（青いモザイクタイルのホコラ） 中面

原点回帰／地域との距離感の難しさ

本プロジェクトを彼らの活動歴の中で改めて俯瞰すると、「路傍のホコラへの着目」という点では原点回帰と言える一方で、いくつかの点で拡張や異質性が見出せる。①特定の地域に焦点を当てること、②約1年間という長いスパンでの関係の継続、③制作・発表場所ともに住民の生活圏であることだ(③については後述する)。

2人は、第1回目の「タイルとホコラとツーリズム」展(2014年)で、京都市内に数多く点在するホコラをリサーチし、谷本は三十三箇所の寺院をめぐる西国巡礼になぞらえて中心部の三十三箇所を厳選し、マップ付きの「ホコラ三十三所御詠歌」を作成している[図5]。「御詠歌」(仏教の教えを五・七・五・七・七の和歌にし、節をつけて歌う)という宗教システムをパロディ的に模倣し、由緒と権威ある寺院ではなく、路傍の小さなホコラの一つひとつに対して、地域の歴史や周囲の景観を詠んだオリジナルの和歌を創作した。この「巡

礼マップ」の範囲は、北が丸太町通、南が五条通の少し下であり、崇仁地区は入っていない。

ただし、両名とも、本プロジェクト以前に崇仁地区との関わりや関心が無かったわけではない。中村は、「タイルとホコラとツーリズム」以外にも複数のアートユニットに参加しており、そのうちの一つのAPP ARTS STUDIOは、京都市立芸術大学の移転事業「Still Moving」展(2015年、元崇仁小学校)の「SUUJIN MAINTENANCE CLUB(崇仁メンテナンスクラブ)」というプロジェクトの中で、崇仁地区の「タイルホコラ」のメンテナンスを行なった。同時期に「PARASOPHIA:京都国際現代芸術祭2015」が開催され、この地域の空き地を使った展示を見に訪れたこともあり、空きホコラの存在は気になっていたという。中村の展示を見にきた谷本も、「この辺のホコラのあり方は他と違うな」と感じていた。

一方、「タイルとホコラとツーリズム」のseason4以降は、ホコラそのもの以上に、「ツーリズム的視点」に関心が移っていったこともあり、改めて、京都の特定の地域を対象にしたプロジェクトを実

施するにあたり、地域との距離の取り方を考えることから始めたという。

谷本 | 僕たちにとってのツーリズムは、いわゆる観光ということではなく、ツーリズム的な見方で、ものごとや地域に僕らが関わっていくあり方だと思うんです。

中村 | 僕のアトリエが歩いて10分くらいのところにあるし、隣の町内に来た距離感なんです。season1で京都の路上を見る目線って、目新しさだった。角を曲がればお地藏さんとの出会いがある。だから今回、観光的な視点をどこまで取り入れることができるのかが、一つのポイントだと思いました。

谷本 | 崇仁のリサーチを始めたときに、まず僕らがやったのが、普段は上らない京都タワーに上ってみることでした。観光地だから上ったのではなく、近すぎて見れないものに対して、フィルターを引き剥がしてみようという意識があったんだと思います。もちろん、京都タワーの存在がこの地域にとって大きいこともあったと思いますが、結果的に、真上から砂場のお地藏さんを見下ろすという構造につながったのは面白いと思います。

中村 | その地域に縁がある人間ではなく、ある程度距離をとりながら、普通の観光客とは違う目的をもってその土地に入り込んでいけれど、地域に根付いていきたいという思いはほぼない。最終的には、「新聞記者」と「新聞の配達人」という、地域に絶妙な距離感で関わる立ち位置になって、そういう距離の取り方を探ることが面白かったです。

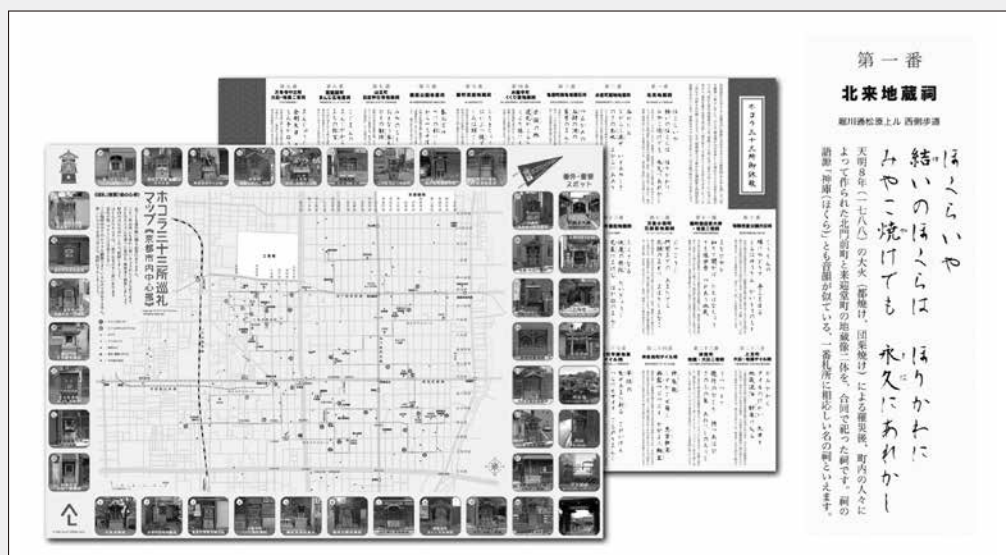
住民の生活圏での制作・発表

2人の活動における特徴として、路上観察的な視点や「実際に街道を歩く」といったパフォーマンス

ンスが起点にあるが、本プロジェクトでは、ギャラリーなど既存の展示施設ではなく、市営住宅の砂場や市民センターの外壁という住民の生活圏が初めて制作・発表の場所となった。ここには、行政や住民との調整にあたったコーディネーターの存在が大きい。

谷本 | 河原の石を持っていくことも、僕たちだけだったらゲリラ的にやるしかない。それらをすべて許可を取って行なうことができたのは、コーディネーターの方がいたからこそだと思います。

生活圏での制作・発表は、住民との交流につながる一方、摩擦にもなりうる。砂場でのモザイク画制作は非公開だったが、谷本と中村は4月3日に住民を招いたツアーを予定していた。だが、砂場をブルーシートで覆って作品を保管していることに対して一部の住民から疑問や苦情の声が上がり、年度を超えた砂場の使用の許可が京都市から下りず、3月30日に撤去することが決まった。ここには、市営住宅の砂場の管轄は、本モデル事業を管轄する「文化芸術企画課」ではなく、「都市計画局」、「京都市住宅供給公社」、市営住宅の管理人といった複数の部署が関係しているという行政の構造の複雑さもある。この経緯に対する2人の応答は、文化行政・HAPSとの協議を経て「かわら版の号外」という形で発表された。砂場の件に焦点を当て、文化行政、HAPS、アーティストそれぞれの立場について前出の中村優花がヒアリングを行なった詳細な報告が、2021年度報告書に掲載されている。作家サイドへの相談がなのまま決定されたことに対してはネガティブな気持ちを抱いている2人だが、少し時間が経ってからの今回のヒアリングでは、この出来事がむしろ2人の活動の根幹に関わるものでもあることが明らかになった。次節ではこの点を掘り下げる。



【図5】「ホコラ三十三所御詠歌」 作成 | 谷本研

方便としての「旅」、 ポニーの抜け毛と住民の声

「砂持ち」の再演すなわち郷土史や信仰形態を自分たち自身の身体でなぞり直すという行為は、「タイルとホコラとツーリズム」の表現の特徴の一つである。特に「労働」と「信仰」の観点から郷土史を再演する行為は、「タイルとホコラとツーリズム season3《白川道中膝栗毛》」(2016年)と共通性が高い。《白川道中膝栗毛》では、京都～滋賀県の大津をつなぐ白川街道を、ポニーを連れて道中のホコラや石仏に花を手向けながら歩いた [図6]。大津に到着後、鞍にポニーの抜け毛が大量に付着していることに2人は注目した。中村がその毛で筆をつくり、谷本が「大津絵」(東海道を旅する旅人の土産物・護符として描かれた民俗絵画)にならうようにして馬の絵を描いた [図7]。ここには、ツーリズムとしての旅路をトレースしながら、土産物を購入する受動的な消費者になるのではな



[図6] タイルとホコラとツーリズム season3《白川道中膝栗毛》2016年 撮影 | 麥生田兵吾

く、抜け毛という無価値なものから消費対象を「生産する」という転倒やユーモアがある。

一方、2人にとって、歴史の再演行為は、「単純に谷本さんと旅を続けたいという個人的な気持ち」(中村)、「再現が目的ではない」(谷本)という。

中村 | そもそもなぞらえることやツーリズム自体を目的化しているというより、方便のような感じでスタートしつつ、実際にやってみて見えてきたことを、可能性を残しながら形にしていくプロセスが僕たちには重要なんだと思います。season3において重要視していたのは、旅自体ではなく、旅をすることでポニーの毛が鞍にいっぱいこっついて、それを筆にしてさらに展開していくというプロセスでした。

何かアクシデントが起きたときに、ある程度は許容しつつ、そこをモチベーションにしながら次に展開していくことがつくって面白いくところなので、もちろん最大限の配慮はしますが、摩擦が起きる瞬間は大事なところに触れる瞬間だと思うので、そ



[図7] ポニーの抜け毛の筆で描いた*栗毛絵。
撮影 | 表恒匡

こをオープンにしていくことが大切だと思います。

谷本 | 今回、住民の方から声があったという事実は、誤解を恐れずに言うなら、僕たちにとっては、ポニーの抜け毛と一緒になんです。つまり、僕たちが何かをすることで、付随的に出てきたエピソードなんです。本来なら、抜け毛は邪魔なものではないんですけど、それを作品化するところに僕たちのダイナミズムがある。コーディネーターの方は、僕たちに対しても住民の方に対しても気を遣って収めようと言われた。その立場の大変さはすごく分かるんですけど、でも、うまみが生まれるかもしれなかったのに、処理されてしまったことに対するジレンマはありました。

中村 | 旅をすることって、ユートピア的というか、現実離れた部分がありますよね。今回は、旅の形態が今までと違って。今までは二人旅だったけど、今回は団体旅行的でした。旅の間にアクシデントってあるじゃないですか、その瞬間に旅の雰囲気が台無しになって、現実に戻される瞬間。そこが今回のプロジェクトの面白みでもあるし、ネックになった部分でもあると思います。

僕たちが「誠意と無邪気さ」をもってやっていたことに、急に現実が入ってきたとき、それがポニーの抜け毛だと思う部分もあるし、一方でそれは現実だという部分もある。そういうことを、今回は良くも悪くも感じられたと思います。

消えていく地蔵盆と、 地域からの呼びかけの声

高齢化にコロナ禍も重なり、モノとしてのホコラや風習としての地蔵盆が姿を消していくのは、崇仁地区だけではない。今回のヒアリングでは、ユニット開始から約10年経ち、地域の抱える課題を訴える住民からの声が寄せられたことが語られた。

谷本 | 最近、同志社大学の佐藤守弘さんの研究の一環として、コロナ禍で地蔵盆がどんどんなくなっていく問題をテーマにしたオンラインのシンポジウムが開催され、ゲストとして僕が呼ばれました*2。活動の紹介として、「ホコラ三十三所御詠歌」をつくった話をして、僕が勝手に第一番として選んだ北来(ほくらい)地蔵ホコラの御詠歌を詠んだんです。偶然、北来町町内会の方がシンポジウムを聴いてくださっていて、後から連絡がきました。コロナ禍でもう3年間も地蔵盆ができず、お布施が集まらないので、存続に困っていると。関心のある人も少ないし、町内としては供養仕舞いをしてホコラを無くそうかとさえ考えていたところ、シンポジウムで僕の御詠歌の話の聴き、町内への問いかけのように感じ、まずはみんなに意識を持ってもらいたかったので、町内の人にこの御詠歌を配りたいということでした。

今後、自分の活動の対象の一つとして、北来町のホコラにも関わりたいと思っています。御詠歌がきっかけになってホコラの存続につながるかもしれないし、そうでないとしても、アーティストとして作品の中のモチーフに直接的に関わる可能性が出てきました。仮に、町内の皆さんが供養仕舞いせざるを得ないという決断をされたとしても、最後に何かの形で残せるようなことをするか、何か展開ができないかなと考えています。

崇仁地区への京都市立芸術大学などの移転工事で伐採予定だった樹から挿し木をつくり、長い時間をかけてさまざまな方と苗木の成長を見守り、いずれ地植して地域の記憶とともに命を未来へ継承していく取り組み「崇仁すくすくセンター（挿し木プロジェクト）」を現在も継続・展開されています。高齢者福祉施設と協働して、毎週、住民の方と行なうワークショップも始まりました。谷本さん・中村さんのようなアーティストがいる一方で、それとは別に山本さんが同じ年度で動いていたことは、崇仁で生きてきた方にとって、さまざまなアーティストの形があることを共有する機会にもなったと思います。どうやってアーティストと関わっていったらいいのだろうと思っている住民の方も多くおられた中で、2組のアーティストが来てくださり、その次の段階として今があるのかなと思います。これは計画的に段階をつくろうと考えていたわけではなく、崇仁・東九条地域の現状やアーティストの動きがあり、世界の他地域での芸術実践者との関わりや、「共生」についてより考える中で、さまざまなファクターが重なり合って、自然な形で私自身がそう思うようになっていきました。

て、2022年度は、東九条や崇仁でさまざまな人たちが自主的に行なっている活動に対して、HAPSで公益性を考慮したうえで、協力したり協働しています。1人や1組のアーティストを招聘して、その人に1年間同行してなにかをつくっていく形ではなく、状況に応じたサイズの支援や協働を年間を通じて少しずつ続けました。京都市立芸術大学が移転する1年前という状況があり、ぼつぼつと地域の中から悩みの声や、自分たちもこうしたいという声があったので、その声を拾っていくことが、アーティストとともに耕した土壌の上で、今すべきことであり、できることであるという思いもありました。

行政主導で、いろいろな動きが半ば住民を置き去りにした形で進められつつある面もあるいま、外からさらに人を招いて共生について考えるより、内側からの声に寄り添おうと思ったのです。HAPSもちろん外から来た存在ですが、それを自覚しながら、地域の中に私たちも包摂されながら、ともに思考してやっていく方向に転換しました。次年度もその方向で考えています。

ただ、初めから今年度の動きができたとはまったく思っていなくて、谷本さんや中村さんが自分たちなりの表現を摩擦が生じるころまで貫いてくださったからこそ、できているのかなと思います。住民の方から自主的な声や相談が寄せられるというのは、その前におふたりとの関わりがあって、こういうアートのあり方もあることを自分たちなりに肌感覚で受け取った中で湧き上がってきたことだと思うんです。そういうものに寄り添って形にしていこうとそが（共生社会実現に向けた）基盤づくりであり、アーティストがつくってくださったものを未来につないでいくひとつのあり方かなと思っています。もちろん、それより以前からこの地域で活動してきた他のアーティストが耕した面もあると思います。

（谷本さん・中村さんと同時期の2020年度にモデル事業を崇仁で行なった）山本麻紀子さんは、

その声はどう応答し、地域の課題に対してアートがどのような視点を提示していけるのかを注視したいと思う。

モデル事業の方向性の転換

—アーティストとともに耕した土壌の上で

最後に、本モデル事業アートコーディネーターの石井絢子の声も記したい。本モデル事業は、京都市が事業計画と予算を策定した枠組みの下で、HAPSが主催し、HAPSの職員がアートコーディネーターとして企画と制作を担っている。HAPSは、毎年度、事業を実施する地域とアーティストの選定を行ない、アートコーディネーターが地域・行政・アーティストの間をつなぎながら、アーティストのリサーチや制作活動に時間をかけて併走する。今回は、鴨川の河原の石を作品制作のために使用する許可、市営住宅の砂場の借用の許可、京都市下京いきいき市民活動センターの外壁に展示する許可など、関係各所への調整が、プロジェクト実現にとって大きな役割を果たした。

ヒアリングの中で、モデル事業の継続的な実施が、谷本と中村の2人にとってだけでなく、HAPSの事業の方向性にとっても、「地域との共生とは」という根幹の部分で大きな意味を持ったのではないかと思われたため、石井の声も紹介する。HAPSは2017年度から東九条、2019年度以降は崇仁にてモデル事業を実施しているが、2022年度からは方向性を転換したという。

石井 | これまでは単年度でアーティストを1人が1組、地域の外からお招きして、その人なりの視点をお借りしながらともにプロジェクトを展開してきました。そうしたアーティストの活動から触発される部分もあっ

中村 | そういふときこそ、新聞社や行政を絡めて何かやったら面白いかもね。北来町だけじゃないだろうし。けっこう立派なホコラでしょ？

谷本 | うん。「ホコラ三十三所」の中でも一番大きいんじゃないかな。

中村 | すごい、地域に入っていくんだね（笑）。なんかもう直な感じだよ。ツーリズム感ないよね（笑）。人とって感じだよ。

北来町の方が谷本さんに関心を向けるって、そんな幸せな関係はないよなって思います。こっちから呼びかけないで、向こうから来てくれる。崇仁に京都市立芸術大学が移転してきて、だんだん町になじんでいって、そんなことが起きてきたらいいよね。**谷本** | かわら版の号外にも書いたんですけど、僕たちが屋外展示やホコラをまわる町歩きのツアーを最後にしたときに、地域の参加者の中で「アーティストが入れ代わり立ち代わり、出たり入ったりすることに対して怖さがある」という正直な意見をおっしゃった方がいました。地域の方にとっては、関係性ができないまま、アーティストが出たり入ったり、いなくなることを恐れているのだと思います。僕たちは観察者の視線で地域と関わるスタンスでしたが、今後の崇仁で行なわれるプロジェクトでは、より長いスパンで地域と関わって、地域の中からも自然に沸き起こってくるようなあり方がいいんじゃないかと思います。

これまでは、「方便としての旅」を設定し、ツーリズム的な外から来た視線で地域を見ていた谷本と中村だったが、崇仁を経由して約10年の活動の中で、原点としてのホコラと御詠歌を媒介に、より深く地域の中へ入っていく可能性も見えてきた。谷本が語ったように、「この御詠歌を町内に配って意識を高めたい」という北来町の住民の声は、ポジティブな意味での「ポニーの抜け毛」として、アーティストに呼びかけられた声である。

- 1 下記の批評を参照。
高嶋慈「タイトルとホコラとツーリズム season3《白川道中 膝栗毛》」展レビュー、『artscape』2016年09月15日号。
https://artscape.jp/report/review/10127063_1735.html
高嶋慈「タイトルとホコラとツーリズム season5《山へ、川へ。》」展レビュー、『artscape』2018年10月01日号。
https://artscape.jp/report/review/10149056_1735.html
高嶋慈「崇仁地区をめぐる展示（前編） タイルとホコラとツーリズム season8《七条河原じゃり風流》」展レビュー、『artscape』2021年05月15日号。
https://artscape.jp/report/review/10168686_1735.html
- 2 シンポジウム「地藏祠・地藏盆は今」2022年12月2日。以下でアーカイブが視聴できる。
<https://www.youtube.com/watch?v=msb-gzYzXik>

こちらとあちらを繋ぐもの、あるいは巨人と植物

文 | 宇佐美達朗



山本のアトリエで保管されている挿し木と巨人の歯

本稿がおこなうのは、2020年度モデル事業としてアーティストの山本麻紀子により展開されたプロジェクトについての継続調査報告である。当該プロジェクトは3つのプログラム「巨人の歯と眠り」「糸と布染め」「崇仁すくすくセンター（挿し木プロジェクト）」からなり、最後のものを除き、基本的には記録集『巨人の歯と眠り、糸と布染め、挿し木をめぐるありとあらゆることについて』（HAPS、2021年）の発行によって一区切りを迎えている。したがっておもな調査対象は2022年度も活動が継続している「崇仁すくすくセンター」になるが、ここではこのプログラム（ひいてはプロジェクト全体）の背景にあると考えられる「巨人プ

ロジェクト」についても考察を試みたい。

本稿は、2022年度活動報告展（2023年2月5日から2月12日にかけて京都市下京いきいき市民活動センターで開催）や、アートコーディネーターの石井絢子（HAPS）同席のもと山本のアトリエで2月16日におこなったインタビュー、そして2022年度モデル事業報告会「離れられない大切な場所でともに生きていくために」（2023年3月25日に喫茶アミーにて開催）をもとに執筆された。またこれらに加えて、過去の報告書等の文書、とりわけ『文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業報告書』の中村優花による報告書（2020年度）とその補遺（2021年度）も大いに参照させても

らっている。アーティスト・アートコーディネーター・京都市のそれぞれについて多角的に調査をおこなったこれらの報告書に対して、本稿は「巨人プロジェクト」という観点から少々穿った考察を加えることになる。以下では、まず2020年度モデル事業として展開された当該プロジェクトがいかなるものであったかを確認したうえで、2022年度の「崇仁すくすくセンター」の活動を概観する。その後、山本の活動の原動力となっている「巨人プロジェクト」（その着想は2012年に遡ることができる）を踏まえたうえで「挿し木」について考察をおこなうことにしたい。

1. 崇仁地区での3つのプログラム

2020年度に実施された3つのプログラム「巨人の歯と眠り」「糸と布染め」「崇仁すくすくセンター（挿し木プロジェクト）」はいずれも、2023年度に移転が予定されている京都市立芸術大学（以下、京都芸大とする）および京都市立銅駝美術工芸高校（移転後は京都市立美術工芸高等学校に改称予定）の移転先である崇仁地区で展開された。京都芸大の移転を機に山本と崇仁との関わりが始まったわけではないが、しかし地域に絶大な影響をおよぼすこの出来事は3つのプログラムとも切り離せないものである。ここでごく簡単にキャンパス移転の経緯を公的な記録から振り返っておきたい（京都芸大の移転にあたっては、長期にわたり、さまざまな立場の人々が、さまざまな水準で、さまざまな活動を展開してきた。到底ここで扱うことのできないその全貌については今後の調査が待たれる。それは京都市の歴史にとっても、また芸術と社会の関係を考えるうえでも、きわめて重要なものとなるだろう）。

事の起こりはおよそ十年前、2013年に京都芸大から要望書が提出されたことに遡る。京都市はこれをうけて2015年に『京都市立芸術大学移転整備基本構想』を、2017年には『基本計画』を策定する。移転前から学生や教職員と住民とのあいだの交流を生みだすことになるこの計画は、2014年度から2018年度まで京都芸大の学長を務めた鷲田清一のもとで考案された「Terrace（テラス）としての大学」という新キャンパスの基本コンセプトを掲げ、その役割として「芸術であること」「大学であること」「地域にあること」の3つの役割を定めているが、とくにその第三の役割がキャンパスの移転前から機能したと言えるかもしれない。もちろんそうした交流によってすべての問題が解決するほど事態は単純ではなく、またこのコンセプトが移転後も理念として機能しつづけるかどうかは長期的に見ていく必要があるが、とはいえ問答無用で一区画を更地にして「再開発」するようなやり方を大学側が意図的に避けた点は十分に評価すべきであるように思われる。HAPSのモデル事業はこうした交流——それは大学側から見れば新たな土地に根づく準備であり、そして住民側から見れば急速に変わっていく自分たちの地域の歴史性を想起し、記憶し、伝えていくことであるだろう——に、そのどちらとも異なる立場から介入する活動のひとつであったと言える。

「Terraceとしての大学」というコンセプトが掲げられたとはいえ、移転に伴って地域の一区画が更地になることはどうしても避けられない。ソフトランディングだとしても、着地点が無傷でいられるわけではない。山本の3つのプログラムが対象とするのはそうした着地点であり、具体的には、南北をJR東海道本線と塩小路通とに挟まれた、東は鴨川、西は高倉通までの三区画、すなわち、鴨川沿いのA地区、須原通と河原町通のあいだ

にあるB地区、そして河原町通から高倉通までのC地区（屋台街「崇仁新町」はその北西部に展開された）である。A、B、Cと呼称される各地区には、元崇仁小学校（2009年に閉校し下京渉成小学校へ統合）や下京地域体育館・下京青少年活動センター・崇仁児童館（以上A地区）、元崇仁保育所や柳原銀行記念資料館（以上B地区）、市営住宅である下之町西部団地や京都市下京いきいき市民活動センター、おもに市営住宅の住民が利用する元崇仁第三浴場、市営住宅に囲まれた崇仁公園（以上C地区）などが含まれている。比較的新しく、稼働率の高い下京地域体育館・下京青少年活動センター・崇仁児童館であったり、地域のシンボルでもある柳原銀行記念資料館であったりといった例外もあるが、住民の生活を支えてきた施設は取り壊され、かつて個々人が生活していた場は失われることになった。山本の3つのプログラムはそうした場の記憶を何らかのかたちで残そうとするものである。

3つのプログラムは崇仁地区に生育していた草木を用いる点で共通している。たとえば「糸と布染め」は移転予定地の植物を採集し、それによって絹糸と布を染めるものであり、また「巨人の歯と眠り」は、取り壊し予定の元崇仁第三浴場、元崇仁市営住宅、元崇仁小学校、元崇仁保育所の施設内や敷地内で山本が眠り、そのときに見た夢をもとに、前述の植物で染めた糸と布も用いて作品を制作し、さらにそれが工事現場ではためく様子を写真に撮影するものであり、そして「崇仁すくすくセンター」は移転予定地に根づいていたサクラやアジサイ等々を挿し木にし、それらをふたたび地植えしようとするものである。これらのプログラムについては、最初に触れたように、中村優花による2020年度および2021年度の報告書に詳しい（とくに2021年度の報告書は「巨人の歯と眠り」の作品制作過程について報告してお

り、サイズの大きな布をはためかせるにあたって「東九条マダン」のはりしごとの会のメンバーから「ポシャギ」を参照するのはどうかとアドバイスもらったことなどが紹介されている）。また採集された草木の詳細（採取された場所や日付、植物名）については記録集『巨人の歯と眠り、糸と布染め、挿し木をめぐるありとあらゆることについて』所収の「崇仁地区挿し木・植物採集マップ」で知ることができる。

2020年度モデル事業を構成していた以上のプログラムは記録集の発行（2021年3月）をもって一区切りを迎えている。ただし「崇仁すくすくセンター」については単年度で終了するのではなく、2030年度までを目処に継続する長期のプロジェクトとして2021年6月に山本を委員長とする「崇仁すくすくセンター実行委員会」が立ちあげられることになった。じっさい、挿し木がふたたび地植え可能な状態になるには、あるいは地植えされた挿し木が十分に成長するには長い時間がかかる。年度という人間の側の制度的な区切りを超えて、また地域のさまざまな施設や行政をあらたに巻き込みながら「崇仁すくすくセンター」のプログラムが継続されたことは、挿し木が成長し、住民の新たな生活の場へと根を下ろして、まちの歴史を証言するような存在となっていく可能性を開いておく点で重要であるだろう。本稿のおもな調査対象となるのは、実行委員会が立ち上げられて2年目の「崇仁すくすくセンター」の2022年度の活動である。なお2021年度の活動についてはやはり中村による2021年度の報告書（『文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業報告書』HAPS、2022年、121頁～）にまとめられているので、そちらを参照されたい。



京都市下京いきいき市民活動センターの1階ロビーで行われた2022年度活動報告展の様子
撮影 | 中谷利明

2. 2022年度の活動

「崇仁すくすくセンター（挿し木プロジェクト）」の2022年度の活動については、京都市下京いきいき市民活動センターで開催された2022年度活動報告展と、実行委員によって作成された『崇仁すくすくセンター（挿し木プロジェクト）2022年度活動記録集』（2023年3月発行）、そしてこの記録集も配布されたHAPS主催の報告会「離れられない大切な場所とともに生きていくために」から知ることができる。2022年度の活動は大きく3点にあったと言える。すなわち、滋賀県にある山本のアトリエでの挿し木の管理と、挿し木を中心に組織された地域内での活動、そして「大きな旗」づくりの3つである（なお8月21日には京都市下京いきいき市民活動センターの集会室で2019–2020年度モデル事業の活動について作品とともにアートコーディネーターの石井と振り返るトークイベントがおこなわれたが、元は2021年度内に開催予定だったが新型コロナウイルス感染症拡大で順延さ

れていたイベントなので、ここでは取り上げない）。以下、山本のアトリエでおこなったインタビューと『活動記録集』に依拠しつつ順に見ていきたい。

2020年度に東九条のHAPS HOUSEで管理されていた挿し木は、2020年12月から滋賀県のアトリエへ移され、そこで三度の越冬を経ることになった。いくつかの挿し木については崇仁デイサービスうらおいで「見守り」（施設の利用者との一種の交流）が実施されていたが、挿し木の負担を考慮してこの活動は一時停止している（挿し木の十分な成長を待つ再開予定とのこと）。2023年2月時点で順調に生育している挿し木として、元崇仁市営住宅で採集したものではアジサイとクチナシが、元崇仁小学校で採集したものではアジサイやバラ、ムクゲ、フヨウ、ナツミカン、シロバナヤエウツギ、ヒメクチナシが、元崇仁保育所で採集したものではマサキとモクレンがあるという。またこれらの挿し木とは別に、移転予定地ではないが2023年度に解体が予定されている、河原町八条の北西角の崇仁市営住宅の敷地内にあるサクラから、京都市の許可を得て、6月に挿し木が

つくられた。これらのサクラの挿し木も山本のアトリエで（別の簡易ビニルハウスに収められてだが）一緒に管理されている。挿し木は基本的に日当たりのよい屋内で管理されていたが、9月に専門家からの日照不足の可能性が指摘され、これをうけて可能なかぎり外気に当て、日光に当たるよう保管体制が変えられることになった。2022年度は挿し木の生育に適した環境を整えていく時期となったと言えるだろう。次年度は獣害にあわないような工夫をほどこして屋外で管理することを考えているという。

挿し木を中心に組織された地域内での活動としては、崇仁デイサービスうらおいで一年を通じておこなわれた挿し木を介した利用者への聞き取りと、2022年9月18日に京都市下京いきいき市民活動センター1階ロビー・喫茶アミー・崇仁地域の高瀬川周辺で実施された「挿し木鑑賞会+挿し木の地植え場所を検討する会」の2つがある。後者はその名のとおり、普段は山本のアトリエで管理されている挿し木43本を鑑賞し、さらには崇仁高瀬川保勝会のメンバーや樹木の専門家とともに崇仁地区を歩きながら地植え場所を検討するものである。この活動が挿し木を外へと開き、その未来について考えるものであるとすれば、聞き取りの活動のほうは挿し木を起点に住民の記憶を、あるいは地域の日常的な水準での歴史を訪ねるものであったと言える。挿し木はその採取地点が記録されており、それゆえその場所とのむすびつきが維持されている。山本が挿し木やかつての崇仁の写真を前にしながら、あるいは次に見る「大きな旗」づくりのなかでおこなった聞き取りの記録は、京都市下京いきいき市民活動センターでの2022年度活動報告展（2月開催）や、喫茶アミーでの2022年度モデル事業報告会（3月開催）で掲示され、『活動記録集』でも紹介されている（『活動記録集』には70代から90代の利用者

10名について5・6・11月に実施された聞き取りの内容が掲載されている）。それらの記録は長さも内容もさまざまであるが、いずれもかつての地域での生活を伝えるもので、オーラル・ヒストリーの観点からも興味深いものであるように思われる。聞き取りの活動は今後も続けられるとのことである。



全て山本本人によって行われた聞き取りの様子

最後の「大きな旗」とは、縦長の大きな布の中央にある「崇仁すくすくセンター 2021～2022」の文字を囲むようにいくつかの草木の図案が配され、布の下部にタッセルが取り付けられている旗のことである。図案は、2021年11月段階で順調に育っていた13種の挿し木——サクラを除く10種にキンモクセイとゲッケイジュ（元崇仁小学校で採集）、ムラサキシキブ（元崇仁保育所で採集）を加えたもの——が成長した姿を表しており、文字と同様にちぎり絵になっている。ちぎり絵やタッセルの作成は、崇仁デイサービスうらおいの利用者（山本の下図から挿し木のちぎり絵を、たこ糸や染色された糸からタッセルを作成）や崇仁児童館のこどもたち（文字のちぎり絵を作成）、さらには京都芸大の学生や下京・東部地域包括支援センターの実習生をも巻き込むものとして展開された。完成した「大きな旗」は上述の聞き取り活動の記録とともに活動報告展で展示され、今

後も挿し木鑑賞会で用いられる予定だという。この旗の制作は下記のように進んだ。

2022年7月29日・8月5日|崇仁児童館にて「崇仁児童館のこどもたちと大きな旗づくり」
同年8月17日|京都市下京・東部地域包括支援センターにて「大きな旗づくり」（以降、毎週水曜日に実施）
同年10月12日|崇仁デイサービスうらおいにて「大きな旗づくり——タッセル（ふさふさ）づくり」
同年11月5日から13日|京都市下京いきいき市民活動センターにて「崇仁文化祭に参加」
同年12月2日|京都市下京いきいき市民活動センター会議室2にて「大きな旗づくり——京都市立芸術大学構想設計1回生と」
2023年1月17日|崇仁児童館にて「完成した大きな旗を崇仁児童館のこどもたちにお披露目」



崇仁児童館での「完成した大きな旗を崇仁児童館のこどもたちにお披露目」の様子

とくに聞き取り活動と大きな旗づくりに顕著なことだが、「崇仁すくすくセンター」の活動は地域とひじょうに密着したものとなっている。じっさい実行員会のメンバーには京都市下京・東部地域包括支援センターのセンター長や崇仁デイサービスうらおいの管理者が、そしてなにより副委員長として、東九条と島原、崇仁に施設を擁する総合福

祉施設東九条のぞみの園の施設長が参加している。2022年度モデル事業報告会では山本とともに京都市下京・東部地域包括支援センターのセンター長と崇仁デイサービスうらおいの管理者も登壇していたことから窺われるように、その協力関係の緊密さは特筆に値する。この協力関係あるいは信頼関係は一朝一夕でつくられたもの、つくられるものではけっしてなく、直近では2018年度モデル事業「ノガミツプロジェクト」に遡る。このプロジェクトの詳細については『平成30年度京都市文化芸術による共生社会実現のための基盤づくり事業』（HAPS、2019年3月）および高嶋慈による継続調査報告（『2020年度報告書』前掲書、91-105頁）と長澤慶太による継続調査報告（『2021年度報告書』前掲書、127-135頁）に譲るほかないが、それが東九条のぞみの園——「ノガミツ」は「のぞみのその」に「の」がみつ含まれることから命名された——で展開されたこと、そしてこのプロジェクトにおいてすでに植物による染色という手法が用いられていた点をここでは指摘しておきたい。また「崇仁すくすくセンター」の根幹をなす挿し木という手法もまた元をたどれば地域住民から教わったものであるという（アトリエでのインタビューによる）。このように軒先での交流のなかで得られた手法が、草木という自然を、その生命力を頼りにしながら殖やすための人間の技術であったことはたいへん興味深い。



「大きな旗」制作の様子

3. 「巨人プロジェクト」

2020年度モデル事業の一環として展開された「崇仁すくすくセンター（挿し木プロジェクト）」がその枠を超えて継続されていること、そしてその活動には東九条・崇仁地区での山本の活動の積み重ねが重要なものとして働いていることを確認したところで、さらに大きな観点からこのプログラムをしてみることにしたい。その観点とは、2020年度モデル事業の3つのプログラムのうちのひとつ「巨人の歯と眠り」にその姿をはっきりと認めることのできる「巨人プロジェクト」である。このプロジェクトについてはすでに中村による報告書でも触れられており、これが「崇仁すくすくセンター」の活動に合流している点も指摘されている（『2020年度報告書』前掲書、76頁）。以下ではより詳しく「巨人プロジェクト」について紹介するとともに、巨人伝説と「崇仁すくすくセンター」とのむすびつきについても考察してみたい。

5年／1フェーズとして全3フェーズを予定している「巨人プロジェクト」は、山本が2012年7月に茨城県水戸市の七ツ洞公園を訪れた際に泣いている巨人の存在を感じたことに始まる。英国法人の設計のもと英国建材も使用しつつ作庭されたこの英国風景式庭園で山本が感じ取ったのは、長いまつげに大きな涙をたたえた、金髪の巨人のイメージだった。この2012年の「出会い」は山本をイギリスの巨人伝説のリサーチへと向かわせる。翌年には近隣の水戸市立国田義務教育学校の小学生を対象としたワークショップが開始された。2014年2月に水戸にも「だいだらぼう」という巨人伝説があるということがわかり、さらなる大きな一歩がもたらされる（この伝説については茨城の民話Webアーカイブで確かめることができる）。袋田の滝で聞いただいだらぼうの「でしょ?」という声に励まされつ

つ、4月にイギリス南西部のデヴォン州、ドーセット州、コーンウォール州を訪れる。コーンウォール州ベンザンスに残る「ホリバーン伝説」と出会うことで、山本のプロジェクトは「だいだらぼうとホリバーン」として本格的に始動することになった。このときベンザンスのアルヴァートン小学校がワークショップ・プログラムのパートナー校となり、水戸とベンザンスの交流関係が始まる。以後、2018年まで、だいだらぼうとホリバーンという巨人を軸に、日本とイギリスでさまざまなプログラムがおこなわれた（詳しくは山本の個人サイトを参照されたい。「RESEARCH」ページでは巨人伝説の紹介が、「ON GOING PROJECT」では「だいだらぼうとホリバーン」の活動記録が閲覧できる）。じつのところ2020年度モデル事業の「巨人の歯と眠り」の「巨人」とは日本の巨人であるだいだらぼう——ただし水戸のだいだらぼうではなく滋賀県のダダボシ——のことであり、その歯（くしゃみをした拍子に飛び出した奥歯）は「巨人の落としものシリーズ」として2018年に制作されたものであった（京都国際映画祭2018に出展）。

茨城県水戸市に始まった「巨人プロジェクト」の第2フェーズは京都市の東九条・崇仁地区で展開されることになる。すなわち「ノガミツプロジェクト」であり、「巨人の歯と眠り」「糸と布染め」「崇仁すくすくセンター（挿し木プロジェクト）」である。たしかにこれらには「巨人」の存在は希薄かもしれないが、「だいだらぼうとホリバーン」の活動をまとめたパンフレット（HAPS石井提供）によれば2018年時点で第2フェーズでは「土」や「植物」からのアプローチが考えられていた点を考慮すれば、だいだらぼうやホリバーンといった巨人が出てこないとはいえ、なにか巨人的なものをそこに読み込むこともできなくはないように思われる。以下ではそうした巨人性について、おもに山本へのインタビューに依拠しつつ若干の考察を試みる。



京都国際映画祭2018に出展された、巨人の落とし物シリーズ第二弾「巨人の歯」（2018年） 北大路橋のあたり
撮影 | 内堀義之



巨人の落とし物シリーズ第二弾「巨人の歯」（2018年） 塩小路橋のあたり
撮影 | 内堀義之

巨人伝説の特徴としては、巨人が人間と関わり合いながら生きていること、そしてそれゆえに巨人が特定の土地とむすびついていることがある。じつさい、だいだらぼうは村人の声にこたえて山を動かすことで田んぼの日当たりを改善し、ホリバーンは周辺の村の人々を別の巨人たちによる略奪から守っていた。巨人は人間とは異なる存在、人間よりも大きく力強い存在であるが、しかしこの世を超越した超自然的な存在ではなく、人間と関わり合いながら生きているものとして語り継がれている。そうした人間たちとの関わりがゆえに巨人伝説はその土地の歴史とむすびついている。たとえばだいだらぼう伝説では、大串貝塚や朝房山はこの巨人の活動の痕跡であるとされる（これをうけて大串貝塚ふれあい公園には巨大な「ダイダラボウ像」が建てられている）。またホリバーンについては、巨人の机と言われているラニョン・クォイトやこの巨人が頂上を寝床にしていたというカーン・ガルヴァの丘がある。その伝説の背後に人間と自然との（あるいは人間どうしの）さまざまな交渉があっただろうことは想像に難くない。貝塚や山、巨石などが

その活動の痕跡として語り継がれているだいだらぼうやホリバーンといった巨人は、人間と自然のぶつかるところで、人間のスケールに収まらないものとして生まれてくるような存在なのだろう。

「だいだらぼうとホリバーン」のおもしろさは、日本とイギリスという人間のスケールからすればひじょうに離れた土地のあいだで、こうした巨人どうしの交流——巨人のスケールからすれば両地は遊びに行ける距離なのだろう——を新たにつくり出す点にあると言えるかもしれない。ホリバーンが水戸で忘れていったハンカチとサンダルであったり、だいだらぼうがベンザンスで忘れていったハンカチ、スケッチブック、えんぴつ、ゲームカード、コーンウォール州の地図であったりといった、当地の小学校のワークショップで制作された交流の「痕跡」は、巨人伝説にあらたなエピソードを加えることで日本とイギリスの両地を離れたまましっかりとむすびつけている。巨人はある特定の土地に生きるものとしてその土地の人間と交流し、ときにはそうした交流のなかで命を落とすが、一方で人間のスケールをやすやすと超えていくことのできる力を



「巨人の歯と眠り」元崇仁小学校での眠り 2020-2021年
撮影 | 片山達貴

もっている。「巨人プロジェクト」の第1フェーズは巨人のこうした特性を存分に活かすものだったと言えるだろう。

第2フェーズでは巨人そのものの影が薄くなるものの、しかしその特性は植物のうちに見いだすことができるように思われる。とりわけ挿し木については、それがもとは特定の場所に根ざした樹木であり、当然その場所の記憶とむすびついているという点で巨人と同様の特性を認めることができる。もちろん、巨人がどちらかと言えば空間的な意味で人間のスケールを超えているのに対して、樹木は（人間よりも大きくなるものも少なくないが）どちらかと言えば時間的な意味でそのスケールを超えている、あるいは挿し木によって超えようとしているという違いはある。「だいだらぼうとホリバーン」では巨人どうしの交流によって日本とイギリスの空間的な隔たりが超えられたのに対して、「挿し木プロジェクト」では挿し木というクローンによって時間的な隔たりが越えられようとしているとも言えるだろう。つまり挿し木という自然と人工の間にあるものの場合、人間のそれとは異なるより大きなスケールを介してむすびあわされるのは、その地域の記憶と未来である。2016年から東九条・崇仁地区での活動を始めた山本が植物という存在に着目し、軒先で挿し木という手法を知り、そして挿し木プロジェクトを10年がかりの計画へと成長させた背景には、こうした巨人性とでも言えるような特性があったのではないだろうか。

4. むすび

以上、2020年度モデル事業の3つのプログラムのうち、とくに「崇仁すくすくセンター（挿し木プロジェクト）」をとりあげ、さらに「巨人プロジェクト」

を踏まえたくて挿し木について簡単な考察をおこなった。都合15年を予定している「巨人プロジェクト」も、2018年度モデル事業「ノガミツプロジェクト」や2020年度モデル事業の3つのプログラムを経て、第2フェーズから、第3フェーズに移行していくはずである。上述の報告者による憶測の当否はもとより、「巨人プロジェクト」と合流しつつ2030年度までを目処に活動を継続する「崇仁すくすくセンター」の行方や、おそらくは新型コロナウイルス感染症拡大のゆえに停滞している巨人サミットなど、第3フェーズで明らかになっていくことは少ないだろう。今後も息の長い活躍を期待したい。



山本のアトリエにて、地植えの時を待つ挿し木たち

参考資料など（言及順）

山本麻紀子・石井鈎子「巨人の歯と眠り、糸と布染め、挿し木をめぐるありとあらゆることについて」（一般社団法人HAPS、2021年3月）

『2020年度京都市文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業報告書』（一般社団法人HAPS、2021年3月）

『2021年度京都市文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業報告書』（一般社団法人HAPS、2022年3月）

『京都市立芸術大学移転整備基本計画』（京都市行財政局総務部総務課、2017年3月／京都市印刷物第283249号）

『崇仁すくすくセンター（挿し木プロジェクト）2022年度活動記録集』（崇仁すくすくセンター実行委員会、2023年3月）

『平成30年度京都市文化芸術による共生社会実現のための基盤づくり事業』（東山 アーティスト・プレイズメント・サービス／HAPS、2019年3月）

茨城の民話Webアーカイブの「ダイダラボウ伝説」のページ（<http://www.bunkajoho.pref.ibaraki.jp/minwa/minwa/minwa-357?f=1>、2023年3月31日最終閲覧）

山本麻紀子の個人ウェブサイト（<http://makikoyamamoto.com>、2023年3月31日最終閲覧）

2021年度モデル事業（招聘アーティスト | 前田耕平） 継続調査報告

高瀬川での生き物観察が生み出す新たな生態系

文 | 続木梨愛



『高瀬川モニタリング部通信秋冬号』

1. はじめに

2023年1月15日、私は寒空の下行われた高瀬川モニタリングに参加した。集合時間の前後でゆるゆると8名が集まり、「じゃあ、いきますか」と、初めての高瀬川生き物観察が始まった。交代で長靴を履きながら川の中に入り、各々の気になるスポットを探して各々の方法で観察する。どうやって観察するんだろうか。部長の前田耕平をはじめ、

他のメンバーの観察方法を見て真似してみる。四之船入址あたりで観察していた時、姉小路橋の上に若者の集団がいた。「何をしているんだろう?」と、あちらを見る。「何をしているんだろう?」と、若者たちもこちらを見る。どうやら彼らは高瀬川沿いにあるイタリアンに並んでいるようだった。橋の上と下で、異なる目的を持った人々が、でも同じように集まって各々の目的のものを眺めていた。川の中では、これまた異なる目的を持った生き物たちが集まったり離れたりしていた。

本稿は、「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」のモデル事業（以下「モデル事業」と表記する）にて、アーティストの前田耕平が2021年度から継続して行っている活動について報告するものである。前田は2021年度より、京都市を流れる高瀬川に着目し、高瀬川とその周辺の街における人間や人間だけでなく生き物の生態系の営みについて考えている。2022年度も同じ軸を持ちつつ「高瀬川モニタリング部」という部活を発足することで、より多くの人々の参加の機会を増やし、より多様な高瀬川の姿を映し出そうとしている。

高瀬川モニタリング部はその名の通り、高瀬川のさまざまな「生き物」を観察する部活動である。月に数回「観望会」という名の生き物観察の日が設けられており、希望する人は誰でも参加できる。部長の前田を筆頭に川の中に入り、虫や魚、草木や人工構造物、そして時には高瀬川周辺で生活する人々に出会い観察することを通して、広い意味での「共生」のあり方を模索している。2022年度は「高瀬川・四季AIR」を拠点として報告会

や座談会を行い、『高瀬川モニタリング部通信』という印刷物の発行もした。

本報告書では、まず高瀬川モニタリング部とその活動内容である生き物観察、高瀬川という存在と前田の「点描」という概念、そして今後の活動としての図鑑の制作に着目し、前田を中心としたヒアリングとともに一年の活動を振り返る。そのあとに、高瀬川モニタリング部がHAPSのモデル事業との関連でどのような相乗効果を発揮しているのかを概観し、再び前田自身に注目して彼の変化や今後の活動についてまとめる。筆者はアートと生き物観察のどちらでも専門ではないが、広い意味での「共生」について考えるための活動として前田らの活動を捉え、調査を行った。以下は、筆者が参加した1月と2月の高瀬川モニタリング、3月の報告会の準備と展示・トークショーへの参加と高瀬川モニタリング部の企画チームメンバー（前田耕平、梅田郁美、山本洋明）へのヒアリング、HAPSのアートコーディネーターである石井絢子への電話での聞き取りをもとに執筆している。各コメントは内容に影響がない程度に、一部筆者が編集して掲載している。括弧内は筆者の追記である。



姉小路橋での光景

2. 高瀬川モニタリング部と生き物観察

高瀬川モニタリングに必要なのは、長靴と半月型のタモ網、直径25センチくらいの丸くて白い観察用の容器と、これから何に出会うのかとワクワクする気持ちである。前田たち高瀬川モニタリング部のメンバーは川に入ると、端のほうや草が生えているところ、橋の下など「ここだ」というポイントを見つけ、タモ網で川の底からまるととらう。私が思っていたより深く掬い上げているのか、網を入れた部分から泥が舞い上がって川が濁る。水の中でタモ網を小刻みに揺らし、細かな泥を振り落とししてから水の外に取り出す。みんなで覗き込みながら、タモ網の中から生き物を探す。シジミ、スジエビ、カワニナ、謎の青色の陶器の玉、サワガニ、葉っぱ、カワゲラ、タニシ…「おっと、カワニナはたくさんいるから全部入れてたらキリがないよ」観察容器の中に色々なものが集まっていく。「あつピケラの子どもがいました〜」「これ木の棒に間違えちゃうね」気づくと、観察容器はまるで白いお皿に盛りだされたフランス料理の一品のようだった。



タモ網に入ったものを観察容器まで持って帰る前田

この章では、2022年度前田が進めた高瀬川モニタリング部の活動の成り立ちや活動内容を振り返り、それが「生き物観察をする部活」であると

いうことがその言葉で想像される以上の意味を、前田と高瀬川と街に与えることを確認する。

HAPSのモデル事業ではアートと共生社会に関する取り組みを行っており、その一つの手がかりとして、多様な歴史や関係性を持つ崇仁・東九条地区を中心に活動を進めてきた。2021年度から前田は関心の対象を川に絞りリサーチを続けていた。モデル事業への招聘を受けてから高瀬川に着目するようになるまでの経緯を、前田は以下のように振り返る。

前田 | アーティストのリサーチという形で具体的な地域の歴史と記憶に触れていくのではなく、もっとフラットに関われる方法を取りたかった。そのなかでHAPSの石井さんの薦めもあって、街を歩くことにした。歩いていたら、川が流れてる、この川はどこからきてるんだろう?と思い、川を上がったり下がったりすることを始めた。高瀬川を見ると生き物とかがいることもわかった。高瀬川を調査することにしたら、ここからここまでって範囲を決めなくてもいいんやなって。最後は海までつながって考えたら、京都からも出れるし、しかももっと大きく「水」みたいな感じで、いろんなことに接続している概念として捉えられるかなと。HAPSがやりたかったことは少しずれたかもしれないが、それが出発点。

川を「みる」ことを決めた一方で、2021年度前田はすぐには川に入らなかった。まずは高瀬川の保勝会が行う清掃に参加することから始めた。前田曰く、普段から高瀬川に入っている「高瀬川の入り方エキスパート」の保勝会の人々に会いに行き、ともに清掃を行い、高瀬川に関する話を聞く。そのようなことを繰り返しながら前田と高瀬川の直接の関係が結ばれていく。



モニタリング部の企画チーム7名

前田 | 会いに行き清掃をするという感じで毎月いろんな学区の保勝会の清掃に参加した。その後に生き物観察をしていいか聞くと「ええでええで」と快諾してもらった。それからはむしろ「生き物観察やってよ」と言われるようになって、今ではもうモニタリングの日は「前田くんか」ってすぐに分かってくれる。生き物観察するっていうのを決めたことで、それを名目に自分たちだけでも川に入れるようになってきたと思う。

そして、2021年度の最後に「かめのま」を迎え、前田は今の形態である高瀬川モニタリング部を設立する。「かめのま」は2022年3月にHAPS HOUSEで行われた前田のオープンラボであり、水甕をモチーフに高瀬川に関する研究などを発表する場となった（詳細は『2021年度報告書』を参照）。

前田 | 「かめのま」のイベントをやる時に、高瀬川で今後も継続していくことと図鑑を作っていくことを目標として掲げた。その図鑑を一緒にやってくれるような人や、観察を一緒にしてくれる人を募集するために、高瀬川モニタリング部を作ることにした。

今の高瀬川モニタリング部の企画チームは、もともとは「かめのま」の仕事に関わってくれた人たちもいて、部活が発足してから入ってもらった。

部活として始まった高瀬川モニタリング部は、それに共感した人々によって強制力の働かないゆるやかな集まりができていく。メンバーそれぞれが望むものがたまたま重なっているところがこの部活動だと言える。高瀬川モニタリング部の企画チームのメンバーである梅田と山本にもヒアリングを行った。

梅田 | 企画チームの人でも、全員が生き物に興味があるわけではないです。私自身、高瀬川モニタリング部の活動以外で積極的に虫に触ることはありません。しかし、企画チームにいる人は、あくまでも自分が普段活動していることややりたいこと（音楽、映像、研究、趣味など）と、モニタリングの活動が自然に結びつけられる人が多いと思ってます。自分のやりたいことの一部がこの部活を通してでもできるから参加していると思いますし、部活の活動のためだけに時間と労力を割いている人はいないのではない

ている人が、「何か（生き物）とれるの?」と聞いてくれました。そういう干渉されうる構造ができていることが、誰もが川に干渉できる役割も担っていて、意味がある行為だと思っています。

パフォーマンスでもあり、生き物観察でもあるという点で高瀬川モニタリング部は前田の関心がちょうど重なるところで存在し、さまざまな存在に影響を与えている。

前田 | もともと好きだった生き物観察が高瀬川モニタリング部になることで、それが川に入って堂々と観察する大義名分ができた気がした。何をしてるんですか?と街の人に聞かれても、美術活動や単純な川への興味を説明とするのではなく、生き物観察しているんですと言える。他に違う考えで高瀬川に入りたい人や、単純に高瀬川に入りたい人も入りやすくなる。部活という形式にすることによって、自分以外の人も関わりやすくなったと思う。

高瀬川モニタリング部は生き物観察の活動それ自体を表現方法の一つとして持っている一方、2022年度は報告会という形でも活動をまとめ、モニタリング部の展示を行う機会があった。報告会は2022年7月29日(金)-31日(日)、2022年9月23日(金)-25日(日)、2023年3月10日(金)-12日(日)の3回開催された。写真展示や映像の上映、印刷物の配布などが行われ、企画チームの1人である谷口かんなによる音楽会なども行われた。前田は、報告会をこのように振り返る。

— 報告会とはどのような経緯で開催することになったのか。

前田 | 高瀬川モニタリング部報告会っていう展示形式の報告を、2022年度は3回開催した。高瀬

することにした。

このように前田は、この一年を「部活」としてどのような形にするのが最適なのかを模索した一年だったと述べていた。一方で高瀬川モニタリング部それ自体に関しては、生き物観察でありつつも「表現活動」の一つでもあるという。特に京都市の中心街でモニタリングを行うと、そこにある種々の非日常的な動きが生まれる。道ゆく人々も川に入るメンバーに関心を向け、さまざまな人を巻き込んだ活動となる。モニタリング部の活動は、その周辺の人々に少なからず影響を与えるという意味でも意義のある表現となるだろう。

前田 | 2022年度は高瀬川を観察する時に、いろいろな人と一緒に川に入ってその人たちの川を見る方法を集めていくのを目標にしてた。観察という行為のなかで、川に入っていく人がいて、さらに川に入っている人を見ている人がいる。さらに川に入っている人を見る人を見るっていう構図がまた生まれて、そのうち川の認識みたいなのが変わっていくだろうなと思って。モニタリング部が生き物観察という活動をしていることは、川への興味を起こす集団パフォーマンスになることを期待している部分もある。**梅田** | モニタリング部で観察することはある種のパフォーマンスだと思ってます。私はよく川に入っている人を見ている人に目がいくので、活動を始めた時から注目されやすい行為であることは認識していました。

ある日のモニタリングの時、繁華街の喫煙所の前で観察したことがあったんです。すると、まあまあ見られてしまって、何か起きることが期待されているような目線を感じてちょっと緊張したのを覚えています。でも生き物観察してるって名目があるから迷いもなくできましたし、むしろ堂々とやってやろうと思って。その時も、モニタリングしている様子を見

そのような状況のなかで、明確にこの活動が誰のものかっていう話はチーム内で話したことはないです。前田さんだけの活動であってはいけないとは思わないですが、私としてはそれ以上の何かにならなければ面白くはないかなあと最初は思っていました。しかし、活動をしていくなかで、この活動には主体で動くメンバー以外にも関係する人（地域の人など）がどんどん増えていて、そうなるとそれと同時にあらゆる側面とそれぞれの価値を持つことになります。つまり、高瀬川モニタリング部があらゆる人との共有物になっている認識になってきています。そうなっているとすると、今後は前田さんや私たちチームの意味と役割をもう一度再考しながら活動することで、モニタリング部も次の段階にいけるのではないかと考えています。

前田がこの部活の部長であることが重要であることを再確認するような話し合いもあったようだ。『高瀬川モニタリング通信秋冬号』に「侘び寂び独りモニタリング」と題した写真が載っている。これは、予定されていた観望会の参加者が山本1人だった時に撮影した写真である。タイトルが興味深かったため、これについて前田に尋ねてみた。

前田 | 部活が始まってから、部員が1人でモニタリングをすることもあった。前田耕平が来ないのに生き物観察をする意味はあるのかと、とても反省した。自分とひろくん（山本さん）の間では、電話でやりとりした時に、ひろくんは自分1人でもやりたいから大丈夫だけど、周りの人から見ると（1人で生き物観察するのは）可哀想に見えるのかもしれない。むしろそこまでして無理矢理する必要はあるのかと。たしかに、月に何回もモニタリングをしないとイケないと思って焦って、月3回も観望会の日程を設定してた。最初は月に2回すると決めてしまったところから、月1回にして、その1回は絶対に前田が参加

かと思っています。このような、仕事でもないし遊びでもないこと（モニタリング部の活動）に労力を割くことは理解されづらいことである一方で、私にとっても社会にとってもすごく重要な活動だと思っています。

山本 | ここに参加している人はいろんな思いを持っていると思います。部員の中でも、(高瀬川という)「自然」の中に僕らが入って観察させてもらう、という感想を持っている人もいれば、生き物たちが（人工物である）高瀬川に入ってるのを観察してるという立場の人もいる。それでも、単純に川に入るのが面白いというのがあります。

前田くんの手に負えない活動がもっと増えたら面白いなと思います。僕は、観察に行ったりデザイン物を作ったりすることの他に、4コマ漫画を描いています。面白いからやっていきたいなって。4コマ漫画は高瀬川のタカセ君というオリジナルキャラクターが主人公になっていて、全く前田くんの意図してないところで描いています。Vol.1とVol.2の報告会では、タカセ君のキーホルダーを作って売ったりしていました。タカセ君には変な人格が与えられていて、おそらく地域の人の印象とは違う高瀬川になっていると思います。

前田が川に入ることから始まった高瀬川モニタリング部は、単なる生き物観察の場としてだけでなく、参加するメンバーがそれぞれ自分のしたいことができるような「それぞれにとっての部活」という場所も提供している。

梅田 | モニタリング部が前田さんのものなのか、メンバーみんなのものなのかどうか、よく考えるものの言い切ることは難しいです。展示をする時の展示物や印刷物の方向性は前田さんと私と山本さんが中心になって相談して進めています。『高瀬川モニタリング部通信』の「コーナー」に関しては他のメンバーに任せたりしています。



報告会の様子

川ききみる会*1は高瀬川に関する新聞を作ってそれを地域に配布している団体で、前から気になっていた。代表の前川さんに話を聞きに行ったりしているうちに、前田さんたちも一緒に何かやりませんかと言ってくれたのが始まり。補助金を得ることになって、あっという間にスケジュールが立っていました。

— 高瀬川ききみる会は具体的にどのような関わりをしていたのか。

前田 | 報告会やモニタリングの活動拠点として「高瀬川・四季AIR」を貸していただきました。それに加えて報告冊子という形で記録物を作ることができました。あとかわら版を発行していただき、京都の

新聞の中に折り込んでもらった。最初は高瀬川ききみる会として何をしたいのかがあまりわからなかった。夏くらいにそれについて聞いてみると、他世代交流だと。それやったら交流しましょうよといって、10月くらいに、高瀬川ききみる会の人たちとみんな川でのモニタリングをして、座談会もやりました。

2022年度、前田は高瀬川モニタリング部を設立し、さまざまな人と高瀬川の生き物を観察することを通して、川を中心に人や生き物について考えてきた。「部活」であるということや、「生き物観察」を主な目的とすることによって、アートや部活の域を超えた多義的な活動が可能になり、広く「共生」を考え直す機会を提供したのではないだろうか。

3. 高瀬川という存在と点描、図鑑

みかんを拾った。正確にはみかんの皮を拾った。川にはよくわからないものが多いが、みかんの皮は色も目立つのでわかりやすく、愛媛県出身の私にとっては親しみもあるので気づくと手が伸びていた。観察容器の方へ持って行った。みんなでみかんの皮を囲んで、裏側をしてみる。「うわー!」「やば! めっちゃいる!」「これ絶対捕食してますよね、みかんの皮」「栄養ありますしね」甘皮の白い部分のほとんどは無くなり、3分の1ほど残っている白い部分に小さな黒い点のようなもの、しかし生き物だろうと分かるようなものがたくさん集まっていた。



ある日の観察容器の中。デザートのコース料理みたい

ここまで高瀬川モニタリング部についてみてきたが、次はその観察対象、場所である高瀬川に関心を移す。前田は高瀬川をいろいろな存在やものの集まりだと説明する。まずは前田の活動で重要になってくる点描という概念に触れたい。2021年度の前田は以下のように説明していた。

この生き物を作り出しているのは、情報とかいろいろなもの積み重なりなんだなと思ったんです。でもそれは同時に、僕と川とこの生き物というものが、何かしらの繋がりをもって出来上がっているというこ

とで、こうしたあり方を認識するための方法が、点の集積として生き物を見るということなんです。そして、生き物について言えることは、川にも言えるし、街にも、自分についても言えると気づきはじめてときから、生物多様性みたいなものの捉え方について、自分ならではのアートからの視点を生み出せるかもしれないと思うようになりました。

(加藤隆文「2021年度モデル事業報告書」、2021年度京都市『文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業』報告書、2022年、85頁より引用)

2022年度を振り返って、改めて前田に点描について聞いてみた。

前田 | 2021年度は甕をもっていろんなものを掬い集めていたが、じゃあこのいろんなものが何なのかを考えてた。保勝会の人と出会って話を聞いた内容かもしれないし、もっと物質的なものかもしれない。石とか水とか光とか、風とか。何かしらの反響とか反射とか跳ね返ってきたものを捉えてるのかもしれないし、単純にタライの中に入った水生昆虫とか微生物みたいなものかもしれない。この1年間この甕の中に何を集めてきたんだろうって思った時に、全部一個一個点みたいなのかなと思って、点描画を描き始めた。

一番初めに描いたのは、カワニナ。観察を始めた時にカワニナに出会う回数が多かったから。保勝会の人にカワニナの話を知ったら、昔ビオトープがあったことや、蛍による地域活性をやっていたことを教えてくれた。蛍の幼虫がカワニナを餌にするから、高瀬川にカワニナを放流してる人もいる。自分が高瀬川で見つけたカワニナは、自然や人の集積だと知って、点描画を描き始めた。この点描的な考え方や概念を図鑑にしたいと思って描き始めた。

この点描画は、今はもう工事現場で塞がれてし

まった水路だけにいたでっかいどんこ。どんこって
いうのはどこにでもいるんやけど、これはそこにしか
いないどんこだった。ヒレが片方欠けてたりとか、
失明してたりとか、左右対称じゃない。あの時あ
の場所の高瀬川にいたどんこは、その時の自分の
記憶の点だったりとか、あの水路の水だったりとか、
人の歴史とか、そういう点群でできてるっていうこと
を点描画で表している。

実は点描画をあまり描いたことがないから難しかった。最初はこれは何の点なんだろうと思しながら、
ここはへこんでいるから黒いんかな?いや、これは模
様の黒やな、というのが面白い。描いていくなかで、
最終的にモワって出てくる感じがすごく好きで。線
がない感じとか、川っぽくなって。Google マップ
で川を見たら線みたいに見えるけど、もっと近づい

ていったら線じゃなくなっていく、そういう感じ。

点描画は前田のカワニナへの関心から始まったが、2022年度はトビケラがキーポイントだという。トビケラは石や砂、落ち葉を使って自らの巣を作る水生昆虫である。自らの身体と自然物で作られた巣が一体となっているように見えることが、生き物とそれ以外のものの境界線を揺るがし、またトビケラの色々なものを集めて巣を作っていくという特徴が高瀬川や高瀬川モニタリング部について考える際に重要な存在となっている。

前田 | 2022年度に重要だったのはトビケラ。部活としてやった時に、みんなで観察するなかでトビケラとその住処である石の（塊の）存在に辿り着い

ていった。色々なものの見方をする人たちと共有していくなかで、トビケラという生き物の巣、生き物か生き物じゃないかよくわからないものを見つけた。この石の塊は生き物なんかなくて。図鑑を作っていくなかで、メンテマかもしれない。それを点群で表した時に、これも生きてるって言い切れるような気がした。橋とかもそうかもしれない。実際橋にはいろんな生き物がついてるし、もしかしたら図鑑に橋を載せるかもしれない。そういうことになった時に、こんな生き物図鑑じゃないやんって子どもがブーブー言ったら面白いな。

山本 | トビケラは自分で石を集めて家を作っていて、象徴的な存在だと前田さんと話しています。前田さんのやっている小さい点を集めて一つに形作る表現に似ている。僕たちはトビケラが身の回りのものを集めて作った家も含めてトビケラだと認識するじゃないですか。でも巣は生き物としてのトビケラじゃない。そういうのが象徴的で面白いです。モニタリング活動に合っているなって思います。

るものであるが、これも興味のある人が集まって制作できるような形になったら良いと前田は話す。

前田 | 2021年度に、川への入り方を模索し始めた。生き物を見ている時に、「かめのめ」の時と一緒に、どういふうに川を捉えるかを考えたいと思った。川の見方をたくさん集めて図鑑みたいなものを作りたいと思って。高瀬川の生き物観察はモニタリング部になってからは、関わった人の視点が見えるようにしたり、やりたいことがある人がいればやってもらったりできたらいいなと思ってる。

2022年度はたくさん点描画を描けなかったけど、今まで写真もいっぱい撮ってきたし、今年（2023年）はその中で気になったものを点描化していく。もっとストイックにやろうかな。100体くらい描けたらいいな。図鑑を本という形にする必要あるのかどうかは検討の余地がある。もう少し違う形でできるんじゃないかな。

2021年度からの高瀬川を中心とした活動を通してより多くの人々や生き物と関わることで、前田は点描という概念で表される考えをより深め、今後の図鑑の制作活動を進めている。

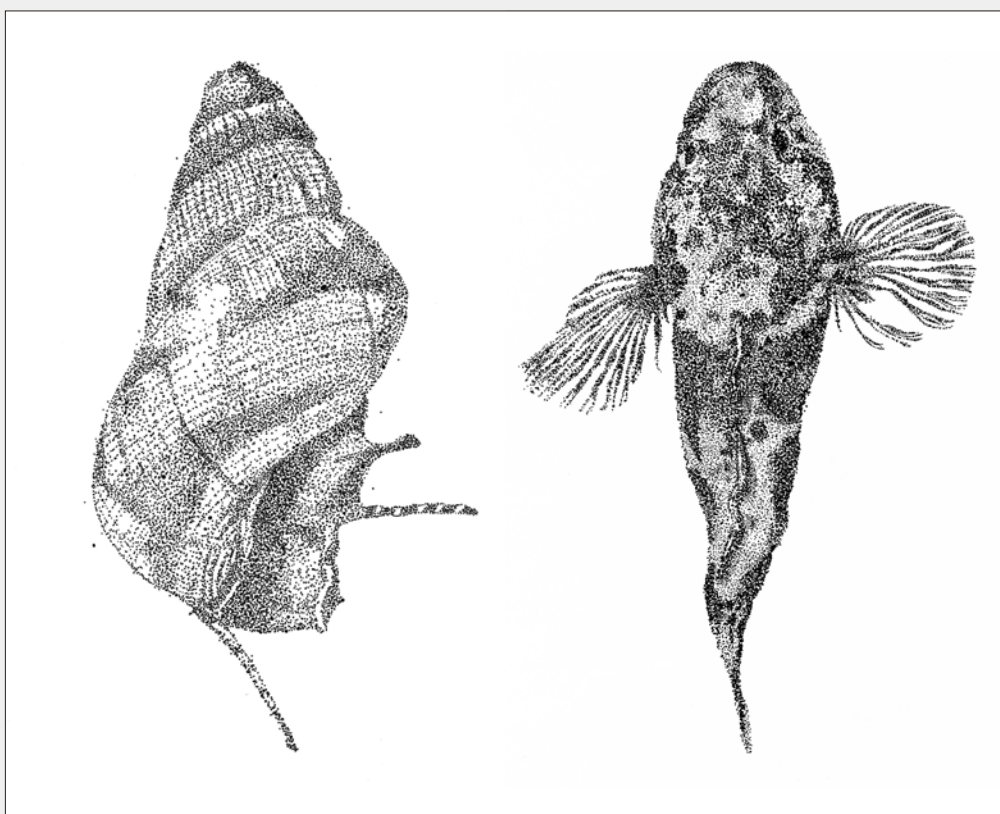
4. HAPS と前田の活動

白い観察容器はたいてい高瀬川と隣り合う道路の間に置いているので、道ゆく人も足を止めて覗き込む。特に子どもたちは興味津々で質問してくる。「これは知ってる?」「これヤゴかな」「ヤゴ知ってるよ」「詳しいね」お父さんも参戦。「これカワハゼやな」「カワハゼ飼ってたのに全部食べられてしまったね」一番下の子を抱っこしたお母さんもやってきた。家族5人勢揃い。



石だけでなくカワニナの貝まで塊にしてしまったトビケラの巣

前田は高瀬川モニタリング部の活動をまとめて、生き物図鑑を制作することを視野に入れている。生物学的な観点に基づいた生き物図鑑とは異なり、前田たちがこの日、この場所で出会った生き物やその他の存在に注目して作り上げるものである。高瀬川モニタリング部の活動の成果をまとめ



カワニナ、どんこの点描画

この章では、前田の活動がHAPSのモデル事業の延長線上にあるということを念頭に入れながら見ていく。まず、本事業アートコーディネーターである石井に前田の活動について聞き取りを行ったものをもとに、前田の活動にとってのHAPS／石井と、HAPS／石井にとっての前田の活動を検討する。次に、HAPSの報告会に参加した筆者による考察から、高瀬川モニタリング部がHAPSの事業の大きな軸である「共生」を考えるにあたってどのような役割を果たすのかを述べる。

石井への聞き取り

— モデル事業の延長線上にある、という観点で前田による活動をどのように見ているか。

石井 | 2021年6月ごろに前田さんから川に注目したいという話を聞いた時、川はそれ自体がとても興味深いものだなと思いました。そもそも川は公物である一方で、法的な管理の範囲と私的—例えば流域の人々が関わるような—管理の範囲の境界線が曖昧に存在している。流域も含めて複数の種の命が交わって共生する場所であって、たとえ都市の中にあっても人間が全てをコントロールできる存在ではない。かつその場所にあり続けながらも流れ続けて変化している、という矛盾のようなものを抱えてもいる。高瀬川は特に、身近にありつつ人間が作ったものが自然の一部になってきた不思議さや、「自然とは何か?」という根源的な問いも内包している。そういう多元性が生じていて、アーティストがそのような多元的な存在にアプローチできる、さらにそこから多元性が生じていくことが、芸術実践の豊かさであり、可能性でもあると思います。2021年度の活動はモデル事業のあり方を変

化させるというよりは更新しつつ、事業としては当初は人間社会に焦点をあてていた「共生」を実践を通して意識的に広げる機会にはなりました。また、アーティストの文脈で見た時に、前田さんの人生の流れのなかに自然な形で置かれるものにもなりました。今、マルチスピーシーズ的な視点を持つプロジェクトを行なっていることも意義深いと思っています。1年目で「かめのま」をやった時に創造されたことが発酵してって、2年目のモニタリングを通して、点描画という表現も発展していった。前田さんが考えていたことが、深化して形として少しずつ現れてきたのがこの2年目なのかな、というふうに思っています。

— 2021年度と比較して、2022年度は前田や高瀬川モニタリング部へどのように関わっているか。

石井 | 2021年度は最後の2か月を除いて、この事業に関するほぼ全ての前田さんの活動に同行していたんですよ。マネジメントやコーディネートを担っていたため、前田さんと視点と視点を重ね合わせることも多くて。そういう1年を経て、私が今の自分の立場でやるべきことの一つとしてあるのは、もう少し離れた場所から社会的価値付けの一部を担うことだろうと思うようになりました。例えば年度末の報告会や、続木さんへ依頼したこのレポートもそうです。多様な人が多様な視点で高瀬川モニタリング部のプロジェクトを言葉にするなかで立ち上がってくる価値があると思うので、そういった機会をいくつか作るようなことです。それから、高瀬川モニタリング部への具体的な支援は、部分的な活動資金がメインだったんですね。HAPSが協働する団体を検討するのと並行して、各活動に何が必要でどうしたら互いにとって良い形になるのかを考えた時に、高瀬川モニタリング部は急ぎのところは活動費だと。補助金や助成金の情報も積極的に送

付しました。この社会的価値と、活動費の確保は部分的に連関しているとも考えています。

私がHAPSの職員として関わるか個人的に関わるか、という問いも、自分のなかでは常に持っています。ただどちらの立場で関わるにしても、これまでの自分の仕事や専門性を考えると、全体を包み込むような動きが主だったので、他業務と並行した部分的な関与の難しさは感じています。例えば、今までしてきたことはプロジェクト全体がよく動いていくように考えて決定に責任を持つことであったり、総体的にうまく動いていくように必要なことがあれば都度対応し、一つひとつの行動のなかでキュラトリアルな実践をしていくことであったり、ということでした。

ただ、個人的なリサーチやネットワーキングは並行して続けていて、例えば伊丹昆虫館主催の、数十年ぶりに新刊が出版された『学研の図鑑LIVE 昆虫新版』の制作舞台裏に焦点をあてた展示とトークイベントは興味深かったです。生物学・昆虫学などの領域において、「図鑑」というメディアのあり方自体がどのように発展してきているかの把握も重要だと思います。時々のモニタリングへの同行や会話は勿論していますし、必要に応じて部分的な協力などは行っているんで、そういった日常的なやりとりのなかで、投げかけをしたりされたり、ということが出来れば良いと思います。

2022年度は、前田さんが部活動として活動のあり方を自分で決めた延長上で、2021年度に私が担っていた部分も含めて、広い意味での表現の方法を彼がどう編んでいかを別の視点で見守り関わる段階にきたと感じていました。もちろん、色々迷うところはありますが…。

— 今後の高瀬川モニタリング部についてどう考えるか。

石井 | 私が個人的に関心があるのは、メンバーそれぞれがやりたいことを実施するための有機的な活動体になるのか、前田さん個人のやりたいことを実現させるような活動になっていくのかということ。どのような力学のあり方を作るのか、これは「協働」という観点から着目したい点ですね。あとは川という公のものに対して、どういふうに、ある意味個人的な私欲を重ねて形にしていくか、というところ。そして、図鑑について。図鑑は分類のフォーマットがあるものだと思うんですけど、そういうある程度決まった規則や成り立ちの歴史を踏まえた上で、前田さんが生き物を点描画で描いたように、どういふうにそのありかた自体をほぐしたり再分類して、アーカイブの視点も入れつつ何を表現していくのかを楽しみに思っています。

2021年度の石井との二人三脚から一度互いに距離を取り、HAPSや石井による適度な支えのもと2022年度の前田と高瀬川モニタリング部の活動は継続されてきた。



普段何気なく見ていた高瀬川にこんなにも生き物が生きている

2023年3月25日(土)、トークイベント「離れられない大切な場所でも生きていくために」と題してHAPSの2022年度モデル事業報告会が行われた。筆者はそこに参加したことで、高瀬川モニタリング部の活動を、HAPSのモデル事業という側

面から改めて眺めることができた。

筆者の専門である文化人類学という学問は、そのはじまりから「彼ら」「異文化」といったような外側の世界を見ることを基本姿勢としてきた。詳しくは割愛するが、外側について知ることで新たな視点を得ることができ、内側をも知ることができる、ということが文化人類学の一つの目的となっている。すなわち「彼ら」について知ることで、改めて「私たち」についても振り返ることができるということである。

前田が中心として行う高瀬川モニタリング部の活動をHAPS全体やモデル事業との位置付けとしてもう一度見てみた時、文化人類学で採用されている見方を援用できる。高瀬川モニタリング部は「川」に注目することによって、地理的にも生命的にもより広範囲の対象を包括しながら考えることを可能にしている。人間以外の存在を含めた生態系に注意を向けるということは、すなわちこの文章を読んでいる私たち人間にとって外の世界にいるものたちを観察するということである。生き物観察の部活である高瀬川モニタリング部は、参加する人の範囲を広げることによって多様な視点を確保し、また私たちは人間以外を観察対象とすることによって、さらに広範囲の視点を得ることができるだろう。高瀬川モニタリング部が外へ向かう矢印を持っていることで、「共生」を考えるモデル事業の取り組みに還元される。

また、以下の2つの点も強調しておきたい。1つ目は、生き物観察を通じて前田が抱いた点描という概念が「共生」について考える際に大切な指標となるということである。ものごとについて考えようとする時、あちらとこちらといったような二項対立の軸で比較検討してしまうことがある。点描画は、一つのものに見えている対象の境界線を揺るがし、その構成要素が常に入れ替わりながら不安定な形を保っているというような視点を

示す。点描画によって表されるような概念は、あちらとこちらといったような単純な形では想像し得ない「共生」の形についてヒントを与えるものとなる。2つ目は、高瀬川の生き物に注目することが日常において無関心になりがちなことに目を向けることを思い出させてくれることである。街で生活していると、高瀬川は景観の一部となり、その川の中に生息している生き物は意識しないと見ることすらできない。知らない間に無関心になるという構図は、高瀬川を出てからも起こりうるであろう。高瀬川モニタリング部の活動を通して、「共生」について考える時に見落としてしまうような対象に目を向ける機会が生まれる。

5. おわりに

ここまで主に高瀬川モニタリング部とその活動を見てきたが、最後は前田に自身の活動を振り返ってもらおう。

— 2022年度を通して、高瀬川に対する関わり方は変化したか。

前田 | 高瀬川のことについて饒舌に話してる自分が現れてるなどは思う。これまで自分のなかにおらんかった高瀬川マニアみたいなのが現れて喋ってる、ふと思う時が増えた。去年は初めて高瀬川モニタリング部の前田っていう形で御所東小学校の授業とかもさせてもらって、生き物先生みたいなのをやった。そういう機会が増えていっているのは不思議やなど思う。でもそれはおもしろいことやなって思ってた。子どもからすると本当に「生き物博士」みたいになって、「前ちゃんこれ何ですか」「何がいますか」って話をしてくれる状況がいいなって

思ってる。何者かわからん感じ。高瀬川の中でも生き物観察者として隙間に入り込んでいっている。



御所東小学校での授業の様子

— 高瀬川を「観察すること」には影響はあったか。

前田 | 周りに気を使ったことは多いかもしれない。(観察に) 入り込める時もあるけど、みんなどんな気持ちなんかなとか、大丈夫かなとか、そういうことを結構考えて、企画チームの人とかにも相談した。そうすると毎回「前田がやりたいことをガンガンやったら、勝手にみんなもしたいようにやる。集まってるって時点で何やってもいいんだよ」って言ってきて。確かにそうだ、本末転倒やと。もやもやすることもいっぱいあったかな。高瀬川のことはやっぱり考えてられない自分がいて。長期プロジェクトってこんなに苦しいんやって。

— 2023年度前田は、東京での川を主題とした作品を制作する予定であると聞いた。これまでの活動と、前田の今後の活動へのつながりはどのようになるのか。

前田 | 東京の川で活動を行うのは、TOKAS (トキョーアーツアンドスペース) っていうアート施設のレジデンス。海外のアーティスト2名、日本から2名のアーティストで計4名で交流しながら活動するよ

うです。テーマが「都市を取り巻くエコロジー」で、東京の川を、高瀬川で考えてきたこととかと紐付けながらやってみようと思ってる。高瀬川モニタリング部ではその行為が表現としてある。東京の方では、最終的に何かしらの展示プランを作る予定。作品としてどう見せるかっていうのを考えてみたいなって。遡上の話が気になって。鮎が海から川に上がってくる。その遡上するサイクルに注目したい。神田川はすごく汚くて、そもそも生き物が帰ってこない「死の川」って呼ばれてたんやけど、最近綺麗になってきて、鮎がいるらしい。そういうニュースを見て、東京の川に鮎がおるの信じられへんなと思った。東京の川で鮎になってみる。まずはそんなことを考えてみたい。

高瀬川モニタリング部の活動を通して、高瀬川周辺の人や生き物の生態系が変化してゆく。参加しているメンバーも、部長である前田も部活を通して変化し、あらたな生態系を紡いでゆくだろう。

3月末、高瀬川沿いを通って帰路に着いていた。高瀬川の上流は桜と木蓮の花が満開である。道行く人は皆立ち止まり、ピンク色や白色の集まりをカメラに収める。冬の間はほとんど人々の気を引いていなかった高瀬川は、春になると花木の色を写しこみ鮮やかな色彩をまとっていた。なるほど高瀬川は自ら姿を変えることで毎年、周りに新たな変化をもたらしているのか。ピンク色に変化した水面を覗き込み、次に会おう生き物を想像する。

1 | 2015年発足。研究者、アーティスト、実業家、学生など有志で構成されている市民サークル。高瀬川の歴史や人々の暮らし、川の生態などを調査研究して、その成果を『高瀬川タイムトリップ かわら版』として発表したり、アクティブに高瀬川を楽しむ提案を発信しながら広いネットワークを構築するなど、住民とともに新エコリズムの発見と実践を行っている。

#わたしが好きになる人は #The people I love are

レクチャーシリーズ+ネットワーク構築ゼミ

レポート

文 | 中川眞

日時 | 2023年2月17日(金) 18:30-22:00

第1部 レクチャー | 「サバイバルの戦略—クィア・オブ・カラーとパフォーマンス」
講師 | 菅野優香 (同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教員)

「ことばに、ふれる、グロリア・アンサルドゥーア」
講師 | ほんまなほ (大阪大学 CO デザインセンター教授)

第2部 作品上映 | 『ホルムアルデヒド・トリップ』《The Formaldehyde Trip》
ナオミ・リンコン・ガヤルド

Naomi Rincón Gallardo, *The Formaldehyde Trip*, 2016 (still);
photo: Fabiola Torres Alzaga



京都精華大学では、マイノリティの権利、特に SOGI をはじめとした〈性の多様性〉に関する知識と、それらを踏まえた表現倫理のリテラシーを備えたアートマネジメント人材を育成するプログラム「#わたしが好きになる人は / #The_people_I_love_are」を2022年8月より開講しており、2023年2月17日にネオコロニアリズムや女性への暴力等をテーマとする作品『ホルムアルデヒド・トリップ』のオンライン上映と、作品の背景にふれるレクチャーが行われた。本レポートは、菅野優香 (同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教員) の「サバイバルの戦略—クィア・オブ・カラーとパフォーマンス」と、ほんまなほ (大阪大学 CO デザインセンター教授) の「ことばに、ふれる、グロリア・アンサルドゥーア」のレクチャーの抄録である。

『ホルムアルデヒド・トリップ』を発表し、現在メキシコを拠点に活動するナオミ・リンコン・ガヤルドは、自身のことを「グローバル・サウス出身の、有色のクィア、脱植民地のフェミニスト、ビジュアルアーティスト、抜け目のない研究者」と語る。その作品は、人種・民族・ジェンダー・セクシュアリティ・階級といった様々な権力関係の交差によって強いられた個人や集団への抑圧に、多様な性やジェンダー表現、喜び、憤り、祝福をもって対抗し、それを別のかたちの世界へと転換する欲望と活力を煽っている^{*1}。

菅野はガヤルドの「ホルムアルデヒド・トリップは、メキシコの先住民民族ミステカの活動家で、2010年に殺害されたベティ・カーリーニョのゴースト、精霊、スピリッツ、身体を物質化・活性化するための、ねじれた、神話的な、批評的な、寓話化である」という言葉を引用し、映像からの具体的なイメージを参照しつつ、クィア・オブ・カラー批評の観点から、ベティ・カーリーニョとアホロートル (メキシコサンショウウオ) に焦点を当てたときに立ち現れてくる問題群を取り上げた。

菅野優香「サバイバルの戦略—クィア・オブ・カラーとパフォーマンス」

クィア・オブ・カラー批評

侮蔑的な言葉として使われていたクィアは、次第に当事者たちが自己に言及するための言葉として使われ始めた。先行するフェミニズムとレズビアン/ゲイ・スタディーズを基盤としながらも、それらだけでは不十分であるという認識に立ち、ジェンダーとセクシュアリティ、さらに人種を交差させることによって、セクシズム、ホモフォビア、レイシズムに立ち向かう

ための新しい理論としてテレサ・デ・ラウレティス（カルフォルニア大学サンタクルーズ校）がクィア理論を立ち上げたのは、1990年のことであった。

菅野はすでに1910年には存在していたクィアという言葉が、ホモセクシュアルに関する他者表象から1980年代における自己表象へと変容したこと、その定義は人によって異なるものの、レイシズムやセクシズムを内包する異性愛規範への批判と抵抗を共通の認識とし、1990年代の ACT UP をはじめとするエイズ・アクティビズムの流れの中からクィア理論が生まれてきたことを導入として述べたのち、本題へ入っていった。

新自由主義的な経済体制の中にジェンダー、人種、セクシュアリティの支配が組み込まれている中で、クィア・オブ・カラー（有色のクィア）を政治や経済の文脈で捉え直そうとするのがクィア・オブ・カラー批評である。こうした批評的傾向の土台を作ったのが、ウィメン・オブ・カラー（有色の女性たち）であった。彼女たちは、人種やジェンダー、セクシュアリティを単独に扱うのではなく、「交差的」に政治的課題を考えたのである。菅野は、クィア・オブ・カラー批評について、バーバラ・スミスらが中心となって結成されたコンバヒー・リバー・コレクティブ、キンバリー・クレンショアのインターセクショナルリティ、キャシー・コーエンのブラック・クィア・フェミニズム、さらにグロリア・アンサルドゥーアやシェリー・モラガなど、チカーナのフェミニストたちの影響の大きさを指摘した。

ムニョスの思想

次に、クィア・オブ・カラー批評の人物としてホセ・エステバン・ムニョスに焦点が当てられた。ムニョスは1967年にキューバで生まれ、6歳の時にアメリカのフロリダに移住、アメリカで教育を受けた理論家で、2013年にエイズで亡くなった。ムニョスには“*Disidentifications: Queers of Color and the Performance of Politics*” (University of Minnesota Press, 1999)、“*Cruising Utopia: The Then and There of Queer Futurity*” (NY: NYUP, 2009)、“*The Sense of Brown*” (Duke UP, 2020) などの単著がある。

“*Disidentifications: Queers of Color and the Performance of Politics*” はグロリア・アンサルドゥーア、シェリー・モラガ、ノーマ・アラーコン、チェラ（シェーラ）・サンドバルといったチカーナ・フェミニズムに触発されて書かれており、非同一化の重要性を強調したものである。有色の性的マイノリティが、支配的なイデオロギーの内部と外部で用いるサバイバルの戦略、つまり主流文化に同化するのがあるいはそれを拒否するのかという二者択一ではなく、主流文化を参照したりそれを取り込んだりしながら、その文化を変えつつ、自分も変わることを、そして何よりもサバイバルしていくことが語られている書物だと菅野はいう。それは越境すること、

人種や言語などが混交することでもある。

“*Cruising Utopia: The Then and There of Queer Futurity*” は時間に関わる議論が展開されている。ムニョスにとってクィアは今ここにいることの拒絶であり、世界と時間に対して別のやり方で存在することである。潜勢力という概念を持ち出し、今は見えないけれど確かにそこにあること、未来性としての、希望としてのクィアという概念である。

“*The Sense of Brown*” では、ムニョスは知識や分析の主体である「人間（ヒューマン）」の特権性に疑問を呈し、人間以外のもの、非人間とともにあることを含めて、クィアについて考えようとした。非人間主義は、人間と人間以外のものの境界は何か、何が人間を人間たらしめているのか、その境界をどう引くのかを問うものである。こうしたポスト・ヒューマンの議論は、本質的なものや自然とされるものと、ジェンダーのように構築されるもの、文化とされるものといった二元論を超えようとしていると菅野は指摘する。非人間主義、すなわち人間以外のものへ向かうこの傾向は、自然と文化は相互作用しており、それらを分離することなく考えることの必要性を示唆する。その根底には、ビカミング（自分以外の何かになる）としてのクィアという生成変化の思想があるのではないかと菅野はいう。ガヤルドの映像に出てくるメキシコサンショウウオなどはその一例かもしれない。

メキシコの世界背景

新自由主義の実験場ともいべきメキシコに話題は移ってゆく。1980年代に合衆国からの財政援助と NAFTA で、アメリカとカナダとメキシコの3国は貿易自由化を交わした。メキシコでは小さな農場がどんどん資本集約型の大規模農場になっていき、農村部に貧困化と深刻な環境破壊が生じた。住んでいた人々を追い出し奪った土地を私有化して資本を蓄積していくのが新自由主義的な略奪による蓄積の基本的な特徴であるが、こういう政策に対して、先住民、農業労働者からの激しい抵抗が出てきた。そのひとつがサパティスタ蜂起として知られる動きである。

発展と多様性という新自由主義的な基準からすると、ある人々の道徳的な欠陥は「性的」かつ「環境的」な欠陥であるということになる。そのような基準のもとでは、有色の貧しい人々、先住民、グローバル・サウスの人々は、自分たちを自然や動物との「正しくない関係」を結んでいると見做す「意識の高い」環境保護者たちと、大量の天然資源を搾取して利益を得ようとする開発業者たちの両方と戦わなければならない。ここでは、一見ふたつの異なるイシューのように見える環境問題とレイシズムが実は深く結びついており、気候変動や土壌・空気汚染の被害がグローバル・サウスや先住民居留地に収斂する「環境レイシズム」と、従

属化や暴力、非互恵的な関係の特徴とし、社会や環境を破壊するグローバルな資本主義的かつ帝國的主義的実践を示すエクストラクティヴィズムというふたつの考え方が紹介された。

クィアな時間性

2000年以降、クィア理論では、クィアをセクシュアリティだけではなく、時間で定義していく議論が生まれた。クィアというのは、規範的で生殖主義的で資本主義的な時間とは異なる時間を生きる人たちのことだとする内容である。例えば、クィアを性的な逸脱だけではなく、時間的な逸脱として捉えたのがジャック・ハルバスタムである。同様のことをエロトヒストリオグラフィーのエリザベス・フリーマンは、「発展のロジックに対抗する、予想不可能で身体化された快樂のポリティクス」*2と述べている。また、リー・エーデルマンは“*No Future: Queer Theory and the Death Drive*” (Duke UP, 2004) という本の中で、生殖的未来主義を批判する。生殖的未来主義とは、政治家などがよく使う「未来のため、子供たちのために」というレトリックに象徴されており、それに対置されるのがクィアである。これらの議論に対して、ムニョスはエーデルマンの議論は白人ゲイの特権的な位置に基づいていると指摘し、それとは違って、現在を支配する様々な暴力的非対称性に抵抗するための未来性としてのクィアを想像する。過去も変わらないものではなく、可能性の領域なのだ。現在を拒絶しつつも可能性に開かれた過去と未来がある。そうした複数の時間を生きるのがクィアなのである。

さらに菅野は「クィア・タッチ」という概念で知られるクィア理論家のキャロリン・ディンショーにも言及する。クィア・タッチとは時間を越えて触れることである。周縁化された人々、主流から周縁に追いやられた人々が、情動的な接触を通して時間を崩壊させ、時間を越えたコミュニティを形成すること。例えばガヤルドは、作品を通して、殺害されたベティ・カーリーニョを甦らせる。彼女を現在に呼び戻すことは、クィア・タッチによって可能性の領域としての過去につながってゆくことでもあるのだ。

『ホルムアルデヒド・トリップ』とのつながり

最後に菅野は、これまでに述べてきた理論的背景に沿って、ガヤルドの『ホルムアルデヒド・トリップ』の特徴を再確認する。

ベティ・カーリーニョは亡霊として、「生きてはいないけれども、死んでもいない」という、生と死の間、過去と現在の境界を攪乱させながら、どちらでもない存在として私たちのもとに帰ってくる。フリーマン的文脈で考えれば、新自由主義的な時間、発展、進歩のロジック

に対抗し、それをぐちゃぐちゃにするのが亡霊という形象なのだという。ベティは4人の女性たちを従え、色々なトレーニングをしたりしてコミュニティを作る。またムニョス的なユートピアとしての未来と希望をそこに見出すこともできる。世界と時間の両方に別の方法で存在するものとしてのクィア、可能性の領域としての過去というクィアな時間のロジックが、この作品の中には強く出ているのだと。

もうひとつ、アホロートル（メキシコサンショウウオ）は、ネオテニーという幼形成熟という特徴をもっている。成長段階にある形を保ったまま（時間が止まったまま）性的に成熟するという逸脱的な時間を生きる生物である。また、アホロートルは身体を切断されても再生能力を持っているという点でも注目されており、不可逆的な時間とは異なる時間を身体化している側面があるという。作品の中には、ナオミ・ガヤルド自身がアホロートルになるというシーンがたくさん出てくる。アホロートルであり人間でもあるパフォーマンスは、人間と非人間の中間、あるいはその両方であるというイメージを示しているのが興味深い。

ほんまなほ「ことばに、ふれる、グロリア・アンサルドゥーア」

ほんまなほはまずサパティスタが活動するメキシコ、チアパス州への自らの旅をスライドを用いて紹介した。チアパス州は多民族国家、多民族で様々な文化が共存する社会であるが、メキシコでは、そういう多民族、多文化に対して非常に抑圧的な政策がずっと続けられてきて、土地の収奪があり、何百年という歴史の間に先住民の人たちは貧困状態に置かれてきたのである。

メキシコの社会背景

次にほんまはメキシコの歴史に触れる。スペイン人による侵略を受けて長く植民地支配下に置かれてきたメキシコでは人種別身分制社会というものが形成されてきた。スペイン生まれのスペイン人、メキシコ生まれのスペイン人、彼らと先住民の間に生まれたメスティーサ（女性）、メスティーソ（男性）、アフリカからの奴隷、そしてその混血、その一方で彼らと交わらない先住民も加え、人種が地層のように重なっている。しかもメスティーソといっても多くの分類があり、それらが階層化されて500年の歴史があるということを国元伊代の『メキ

シコの歴史』(2002年・新評論)が教えてくれる。

サパティスタについて

サパティスタは軍事組織というよりはメキシコの中央政府の不当な弾圧に対して人権を守るための主張をする組織である。サパティスタたちは、チアバスのサン・クリストバルから車で一時間くらい行った山の中に「大地の大学」を作って色々な知的活動をしている。ここを訪れた時の様子をほんまは次のように紹介した。

「大地の大学」の大講堂に行くときたくさんの人がいて、真ん中でサパティスタの女性兵士たちが発言をしていた。彼女らは目出し帽をかぶっていた。なぜかというと、顔がばれると政府から暗殺される恐れがあるからである。この時の主題は、チアバス州で働くセックスワーカーたちの権利についてである。セックスワーカーは覆面を被らず話していた。セックスワーカーという、原住民社会の中でも虐げられてきた女性たちの権利を保障せよという主張である。伝統的社会といっても男性中心主義的で、女性は子供を産むのが当たり前という中で、そうではない女性の個人としての生き方を認めよということもサパティスタたちは訴えてきた。

多くの女性たちがサパティスタに合流するのは、村にいても何の権利ももてないからである。教育を受ける権利も、自分が成長していく権利もなく搾取される。男性が受ける搾取りももっとひどい。スペイン系の人たち、あるいは場合によってはメスティーサ、メスティーソに虐げられてきた先住民の暮らしは貧困状態に置かれ、なかでも女性たちはさらに虐げられてきた。サパティスタたちはそこにちゃんとメスを入れて活動してきたのである。

ラディカル・ウィメン・オブ・カラーの運動

1970年代から80年代、第2派と呼ばれるフェミニズムが北アメリカで隆盛を極める中で、ウィメン・オブ・カラーという人たちがいた。オードリー・ロードやシェリー・モラガ、グロリア・アンサルドゥーアたちである。第2波フェミニズム運動の中でも特に周辺化されて孤立してきたレズビアン、バイセクシュアルなど、多彩なバックグラウンドを持つ女性たちが言葉でつながっていく格闘の本が、シェリー・モラガらの“*This Bridge Called My Back*” (Persephone Press, 1981) である。

ほんまはこの本から一部を引用しながら、問題群を引き出してゆく。モラガがフェミニストたちによるレイシズム、人種差別をテーマとする会合に参加した時、話しているのは白人やスペイン系の女たちばかりであった。モラガはこれを大理石の模様を喩える。自分たちは白地の大理石にある混ざり物の黒色であると。モラガは「いったいどうやって、ひどく苦しめら

れてきた歴史の流れに、こんどこそ、自分たちのからだを投げだすんじゃなくて、この谷間に橋をかけることができるんだろうか」と問う。それに対してバーバラ・スミスは「橋が歩いて渡る」という。橋というメタファーを使って、自分たちの状況を表す。「自分たちは白人たちがフェミニズムの運動を起こすのを手助けしてきた、橋になってきた、自分の背中を呈して身を投げ出して橋となり、いろんな人たちをつなぐ努力をしてきた。でもこの橋になった私たち、この背中はどうなるんだ」という問いかけである。あるいは家族のなかにあって、母親を手伝ったり、自分の兄弟の労働を助けたり、父親を助けたりとかそういう家事労働をさせられてきて橋となってきた自分たちが、民族的背景とか言語とかセクシュアリティの違いを超えて、どうやって互いの間に橋をかけることができるのか。それがこの“*This Bridge Called My Back*”という本のテーマなのである。

朗読を通して

ほんまのレクチャーの後半は氏が選んだ文章を参加者が朗読し、その感想を交えながらほんまがコメントをしていくという形式をとった。“*This Bridge Called My Back*”のアンサルドゥーアの序論‘*Acts of Healing*’から始まった。

「あたしはあんたよりも貧しくて、抑圧されているってなげくサビのところを、こえをそろえてうたいながらここまで来た」(朗読)に対して、ほんまは「私たちはしんどかったって言っている」と語る。“*This Bridge Called My Back*”において女性たちが日記とか詩を通して書いているのは、何かを主張する言葉ではなく、主張する言葉によって消されてきたもの、見えなくされてきたもの、価値を奪われてきたものが生き返り、生き延びるための言葉が書かれているところに惹かれるという。

「わたしは書くのがこわいけど、書かないのはもっとこわい。だから、わたしは書く」というアンサルドゥーアという言葉に、ほんまは「アンサルドゥーアたちにとっては、現実について書く、何かを報告する、レポートする、現実を自分は代弁するっていうんじゃなくて、書くことこそが彼女たちにとっては必然であったと。なぜかっていうと、書き物の中で自分たちが初めて息をする、呼吸ができる、生きることができるからだ。この切実さというのを私は個人的に感じ取ります」と応答する。肌の色とか、性別とか、愛とか、生とか家族に関する否定の言葉があふれている現実の中で、否定の言葉に閉じ込められてしまうと上下もドアも分からなくなる、そのドアの取っ手を作るのが書くことであるという。

ギャルドの映像の最後の方に出てくる「左利きの世界」という言葉にも注目したいとほんまはいう。左利きはマイノリティであり、右手の中心に作られた世界を生きないといけない。

「左利き」とは、有色の人たち、クィアの人たち、貧しい人たち、障害を持つ人たちである。そういう人たちが共に働く意思をもつこと、そういう人たちとつながりをもつことで、インターナショナルなフェミニズムを作るのが必要だというのがアンサルドゥーアの主張だった。

また征服者コルテスと交わり、子を産んだ先住民の娘マリナリの原罪性に関して、「わたしたちが母、マリナリを軽蔑し非難するように、わたしたちは、じぶん自身を非難する。この敗北した種族、敵のからだ。わたしが民族を裏切ったのではなく、民族がわたしを裏切ったのだ」という表現に対して、ほんまは「メスティーサというのは、その罪を背負った血筋の女っていう、そういうルーツを持っている。それを私たちは隠すのではなくて、引き受けないと。それをちゃんと見据えないといけない、正しく混乱しないといけない」として、「母マリナリっていうのは民族を裏切ったと言われるけどそうじゃない、民族のほうが私を、マリナリを裏切ったのだ。その両義性をちゃんと生きるのだ、そこから目をそらさないでいこう」というふう読み解く。

最後にほんまはアンサルドゥーア直筆の“*Light in the Dark / Luz en lo Oscuro: Rewriting Identity, Spirituality, Reality*” (Duke UP, 2015) のスライドを見せながら、光と影という比喻とともに、この本の中にある、真っ暗な深淵、下を覗いても全然底なしの、底が見えない沼みたいなどころに橋をかけるシーンに着目し、アイデンティティを書き直すこと、スピリチュアリティを書き直すこと、リアリティを書き直すこととことこのメタファーとして捉えることができること、さらに隙間に橋を架けるといふ、私たちは民族とか文化とかの間において橋を架ける存在なのだということ、他方で女性として引き裂かれた存在であること、あるいは欧米中心の人種概念やフェミニストを攪乱しようとする存在なのではないかと指摘して終わった。

第2部の冒頭では、菅野(左)とほんま(右)のクロストークも行われた



1 | https://www.kyoto-seika.ac.jp/news/2023/0213_5.html から引用。

2 | Elizabeth Freeman, *Time Binds: Queer Temporalities, Queer Histories* (Durham and London: Duke University Press, 2010)

プロフィール

【企画・監修】

中川真 なかがわしん

アジアの民族音楽、サウンドスケープ、アーツマネジメントについて研究する。著書『平安京 音の宇宙』(平凡社)でサントリー学芸賞、京都音楽賞、小泉文夫音楽賞、現代音楽の活動で京都府文化賞、アーツマネジメントの成果で日本都市計画家協会賞特別賞(共同)を受賞。インドネシア政府外務省文化交流表彰。大阪市立大学都市研究プラザ特任教授。インドネシア芸術大学、チュラロンコン大学(タイ)の客員教授も務める。アートミーツケア学会副会長。

【相談事業】

Social Work / Art Conference ディレクター

奥山理子 おくやまりこ

母の障害者支援施設みずのき施設長就任に伴い、12歳より休日をみずのきで過ごす。施設でのボランティア活動を経て、2012年みずのき美術館の立ち上げに携わり、以降キュレーターとして企画運営を担う。アーツカウンシル東京「TURN」コーディネーター(2015-2018)、東京藝術大学特任研究員(2018)を経て、2019年より、HAPSの「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」に参画し、2020年、相談事業「Social Work / Art Conference」ディレクターに就任。東京藝術大学 Diversity on the Arts Project 非常勤講師。

【モデル事業】

協働した主な団体・グループ

東九条 空の下写真展実行委員会 ひがしくじょう そらのしたしやしんてんじっこういいんかい

「この街のあちこちで、笑い泣き遊び働いてきた人たちの生きた証が、広く高い空の下に並んだら、どんなにステキだろう、どんな景色になるんだろう。」東九条と周辺地域に今も息づく人々の営みの記憶と記録、その語りをアーカイブすること、街ゆく誰もが鑑賞することができる写真展の開催を目指して、東九条で暮らす・働く・動く有志が集まりました。古代より人は、星空や大地といった自然の営みと一体となって生活の知恵や術を紡いできました。古来からの人間の営みや、写真や語りが織りなす人々の記憶を重ねるように、私たちは過去とつながる“今”と向き合い、ともに生きる“これから”の物語をこの場所で紡いでいきたいと思っています。

崇仁すすくセンター実行委員会 すうじんすすくせんたーじっこういいんかい

京都市立芸術大学移転等の新たなまちづくりによって大きく変化する崇仁地域にて、まちと共にあった崇仁小学校、崇仁市営住宅、崇仁保育所などで命を育んできた樹木の挿し木を試み、地域住民とともにその成長を見守り、土地の記憶や人の繋がりを継承しながら、いずれしかるべき場所に木を地植えして返すことを目指すアーティストの山本麻紀子がスタートさせたプロジェクトです。2021年度より、実行委員会を立ち上げ、主に崇仁デイサービスうのの皆さんの活動を中心に、様々な方との関わりを創りだしながら進めています。

高瀬川モニタリング部 たかせがわもにたりんぐぶ

2022年4月に発足。高瀬川モニタリング部では、定期的な高瀬川周辺の生き物の観察と記録をする「観望会」や、高瀬川を起点にゲストと話す「座談会」を行っています。高瀬川の昔や今をモニタリングすることで、川と都市、人類と自然のような壮大な物語に結びつけながら、高瀬川のこれからについて考えていく部活動です。

モデル事業アートコーディネーター

石井絢子 いいい あやこ / 一般社団法人 HAPS

1990年生まれ。2013年、福武財団に入職。ベネッセアートサイト直島での勤務を経て、2018年より京都市「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」モデル事業の担当としてHAPSで勤務。崇仁・東九条とその周辺地域を中心にプロジェクトを行う。携わった企画に、丹羽良徳「歴代町長に現町長を表敬訪問してもらおう」(直島町、宮浦ギャラリー六区、2016)、山本麻紀子「ノガミツプロジェクト」(京都市南区、高齢者総合福祉施設 東九条のぞみの園、2018)などがある。

報告会登壇者

東九条 空の下写真展実行委員会

村木美都子 むらき・みとこ／東九条まちづくりサポートセンター〈まめもやし〉事務局長

1963年生まれ。1988年に初めてあ東九条を訪れ、地域の人たちが在日コリアンオモニのたくましさとあたたかさに魅了され、以降、東九条地域に関わる。現在、コリアンが半数の東松ノ木市営住宅でコミュニティ支援を行いつつ、東九条や宇治市ウトロ地区の在日コリアンの生活史を残す活動をしている。

やんそる ／Books×Coffee Sol. 店主、東九条マダン

1970年生まれ。Books×Coffee Sol. 店主、オルタナティブ・スペース「Taroハウス」「ノランナラン」オーナー。1993年から続く地域のまつり「東九条マダン」では、まつりの運営とともに芝居づくりを中心に担う。コロナ禍以降は、まちの中で畑をする「東九条耕す計画・ただいも」や川掃除とアーカイブ活動を行う「東九条アーカイブプラス」を展開中。

崇仁すくすくセンター実行委員会

大森晃子 おおもり あきこ／崇仁デイサービスうおい 管理者

広島県生まれ、京都で福祉を学び在宅介護支援センターや特別養護老人ホーム、居宅介護支援事業所で勤務。2009年4月から現在の法人にてデイサービス勤務。趣味は仏像鑑賞。

宮崎彰子 みやざきしょうこ／京都市下京・東部地域包括支援センター センター長

福祉系大学を卒業し、特別養護老人ホームに就職。介護を経験しながら、介護支援専門員（ケアマネ）取得。2008年4月1日～京都市下京・東部地域包括支援センター及び崇仁デイサービスうおいに勤務し、2017年4月よりセンター長として着任、現在に至る。

山本麻紀子 やまもと まきこ／アーティスト

京都市立芸術大学大学院美術研究科構想設計修了。ある場所についての観察や考察を続け、その場所に関わる人たちとコミュニケーションを重ねながら活動を行う。ライフワークとして、2013年より15年計画で日本（水戸）とイギリス（ペンザンス）の巨人伝説をベースに、「眠り」「怒り」「待つ」「生き延びる」などのテーマを設け、巨人の世界を追い続けている。

高瀬川モニタリング部

山本洋明 やまもと ひろあき／デザイナー

グラフィックデザインを中心に書籍やロゴマークを制作。思いや考え方の伝わるデザインをこころがけています。2020年デザイン事務所 caravan を設立。caravan.myportfolio.com

梅田郁美 うめだ いくみ／リサーチャー

京都工芸繊維大学工芸科学研究科デザイン学専攻修士。日々生きる中で出会う人たちと共に、あらゆる形で活動を行ない、その中で起こる現象やプロセスを観察・記録し続けている。

前田耕平 まえだ こうへい／アーティスト

自身のルーツとなる紀伊半島での風土や体験、同郷の博物学者である南方熊楠の哲学を根幹に「自然と人の関係や距離」をテーマに活動。国内外の自然地形や生態系、文化や信仰に目を向け、フィールドワークを通し、写真、映像、パフォーマンス、インスタレーションなどの作品を制作。

石谷治寛 いしたに はるひろ／広島市立大学国際学部准教授、京都市立芸術大学芸術資源研究センター客員研究員
美学・芸術学。19世紀フランス美術と視覚文化に関する研究から、外傷記憶の再演を扱う現代アート、メディア芸術の保存とアーカイブなどを考察。2022年から都市への芸術介入を調停する人材育成を目指すHACH（広島芸術都市ハイヴ）を運営。

報告会レポート執筆

竹内厚 たけうち あつし／編集者・ライター

1975年生まれ。雑誌、ウェブマガジン、フリーペーパーなどの編集、執筆を手がける。最近の編集物は、UR都市機構のウェブマガジン「うちまちだんち」、日本建築家協会（JIA）近畿支部の広報誌『table』、デザイン・クリエイティブセンター神戸（KIITO）のニュースレター、名古屋の港まちづくり協議会の広報誌『ポットラック新聞』など。

〔継続調査〕

高嶋慈 たかしま めぐむ／京都市立芸術大学芸術資源研究センター研究員

美術・舞台芸術批評。ウェブマガジン「artscape」、*「京都新聞」*にて連載。「ブッチーニ『蝶々夫人』の批評的解体と、〈声〉の主体の回復 —ノイマルクト劇場 & 市原佐都子／Q『Madama Butterfly』にて第27回シアターアーツ賞佳作受賞。論文に「アメリカ国立公文書館所蔵写真にみる、接収住宅と「占領」の眼差し」（『COMPOST』vol.03、2022）。共著に『不確かな変化の中で 村川拓也 2005-2020』（林立騎編、KANKARA Inc.、2020）、富田大介編『身体感覚の旅——舞踏家レジーヌ・シヨピノとバシフィックメルティングポット』（大阪大学出版会、2017）。

続木梨愛 つづきりあ

1998年愛媛県生まれ。国際基督教大学教養学部卒業。京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程在学中。蜜蜂と人間の関係を中心に、養蜂においてさまざまな存在が共存していることに着目して文化人類学的観点から研究している。2022年度CHISOUプログラム実践編C成果展「グラデーションズ—わたし（たち）とせかいと」（奈良県立大学、奈良、2023年）にて、自身の研究調査の中で生まれてきた蜂や他の生き物との関係をテーマに作品を展示した。

宇佐美達朗 うさみ たつろう

1988年生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。博士（人間・環境学）。2022年度まで日本学術振興会特別研究員（PD）。単著に『シモンドン哲学研究——関係の實在論の射程』（法政大学出版局、2021年）、共訳書にエマヌエーレ・コッチャ『メタモルフォーゼの哲学』（勁草書房、2022年）とティム・インゴルド『ライフ・オブ・ラインズ——線の生態人類学』（フィルムアート社、2018年）がある。

〔講座〕

京都精華大学公開講座「#わたしが好きになる人は／#The people I love are」
レクチャーシリーズ＋ネットワーク構築ゼミ

講師

菅野優香 かの ゆうか／同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教員

カリフォルニア大学アーヴァイン校Ph.D.（ヴィジュアル・スタディーズ）。同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教員、およびフェミニスト・ジェンダー・セクシュアリティ研究センター員。専門は、視覚文化、クィア理論・批評。著書に『クィア・シネマ・スタディーズ』（編著、晃洋書房、2021年）など多数。

ほんまなほ 大阪大学COデザインセンター教授

臨床哲学を専門に、哲学プラクティス、対話、こどもの哲学、フェミニズム哲学、多様なひとびとが参加する身体・音楽表現についての教育研究を行う。著書『ドキュメント臨床哲学』、『哲学カフェのつくりかた』『こどものてつがく』（共編著）ほか、『アートミーツケア叢書』監修。

実施概要 2022年度 京都市「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」

【相談事業】

Social Work / Art Conference (SW/AC)

ディレクター|奥山理子 アシスタントコーディネーター|小泉朝未、東美沙季
 年間相談件数 アーティストから14件 施設・団体等から38件
 談話室 2回実施

【モデル事業】

「離れられない大切な場所でともに生きていくために」

主に東九条・崇仁地域で複数名で行われる様々な取り組みとの協働・その下支えなどを行い、
 年度末には1年間の実践の一端を示すトークイベントを開催しました。

【主催・共催】

トークイベント「巨人の歯と眠り」「糸と布染め」「崇仁すくすくセンター（挿し木プロジェクト）」

日時|2022年8月21日（日）10:30-12:00
 話し手|山本麻紀子（アーティスト）／石井絢子（一般社団法人HAPS／アートコーディネーター）
 会場|京都市下京いきいき市民活動センター 3階集会室
 入場料|無料
 定員|40名
 主催|崇仁すくすくセンター実行委員会／一般社団法人HAPS
 助成（崇仁すくすくセンター実行委員会）|京都市「Arts Aid Kyoto」補助事業
 チラシデザイン|梅田郁美

トークイベント「離れられない大切な場所でともに生きていくために」

2022年度 文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業 モデル事業報告会
 日時|2023年3月25日（土）14:00-16:30
 会場|喫茶アミー
 話し手|東九条 空の下写真展実行委員会（村木美都子（東九条まちづくりサポートセンター〈まめもやし〉
 事務局長）・やんそる（Books × Coffee Sol. 店主、東九条マダン）、崇仁すくすくセンター実行委
 員会（大森晃子（崇仁デイサービスうらおい管理者）・宮崎彰子（京都市下京・東部地域包括支援セ
 ンター センター長）・山本麻紀子（アーティスト）、高瀬川モニタリング部（山本洋明（デザイナー）・
 梅田郁美（京都工芸繊維大学 工芸科学研究科デザイン学専攻 修士）・前田耕平（アーティスト））
 ゲスト|石谷治寛（広島市立大学国際学部准教授、京都市立芸術大学芸術資源研究センター客員研究員）
 アートコーディネーター|石井絢子（一般社団法人HAPS／本事業担当）
 司会|中川眞（大阪公立大学都市科学・防災研究センター特任教授／本事業全体監修）

【主に協働・協力した取り組み】

【制作協力など】東九条 空の下写真展実行委員会

- ・東九条 空の下写真展
- ・東九条 空の下写真展 × 希望の家児童館 × 金サジ「なりたい自分になる!」てんらんかい

崇仁すくすくセンター（挿し木プロジェクト）実行委員会

【広報協力】

- ・崇仁すくすくセンター（挿し木プロジェクト）2022年度活動報告展
- ・トーク「巨人×眠り×植物」

【制作協力】高瀬川モニタリング部

- ・「高瀬川ききみる会プロデュース 高瀬川モニタリング部報告会」
- ・「高瀬川ききみる会プロデュース 高瀬川モニタリング部報告会 vol.2」
- ・「高瀬川モニタリング部報告会 vol.3」

【講座】

「#わたしが好きになる人は／ #The_people_I_love_are」

レクチャーシリーズ＋ネットワーク構築ゼミ

（京都精華大学との共同開講）
 日時|2023年2月17日（金）18:30-22:00
 受講方法|YouTube 配信

第1部 レクチャー|「サバイバルの戦略 —クィア・オブ・カラーとパフォーマンス」
 講師|菅野優香（同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教員）
 「ことばに、ふれる、グロリア・アンサルドゥーア」
 講師|ほんまなほ（大阪大学COデザインセンター教授）

第2部 作品上映|『ホルムアルデヒド・トリップ』《The Formaldehyde Trip》
 ナオミ・リンコン・ガヤルド

【人材育成】

アシスタントコーディネーター 1名を2020年度より対象者として雇用継続
 業務内容|相談事業・調査・モデル事業・連続講座におけるアシスタント業務

2022年度 京都市 文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業

企画・監修 中川眞
主催・事務局 一般社団法人HAPS
遠藤水城、藏原藍子(全体進行)、石井絢子(本事業主担当)、沢田朔(広報)、
小泉朝未・東美沙季(ともに本事業アシスタント)、岡永遠(経理)
所管 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課
四元秀和、天野裕之、林夕華

2022年度 京都市 文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業 報告書

発行日 2023年3月31日
発行元 一般社団法人HAPS
〒605-0841 京都市東山区大和大路通五条上る山崎町339
Tel. 075-525-7525 Fax. 075-525-7522
執筆 石井絢子、石谷治寛、宇佐美達朗、奥山理子、高嶋慈、竹内厚、続木梨愛、中川眞
撮影 石井絢子、片山達貴(p.26～28)、小檜山貴裕(p.27、40～53)、成田舞(p.26、28、29、32、33)
編集 松永大地(ポケット)、石井絢子、藏原藍子(ともにHAPS)
進行管理 吉岡康介
アートディレクション 見増勇介(ym design)
デザイン 関屋晶子(ym design)
アシスタントデザイン 早川恵美理(ym design)
印刷 株式会社イニユニック

著作権法で定められた範囲を除き、本書の無断での複製、複写、転載を禁じます。